

勝賀城跡 III

— 総括報告書（調査編） —

二〇二三年十一月

高松市教育委員会

勝賀城跡III

— 総括報告書（調査編） —

2022年11月

高松市教育委員会



勝賀山（第1,2次調査時）



勝賀山航空写真（東から）



喰い違ひ虎口



平虎口



曲輪Ⅲ石積み（北から）



曲輪Ⅲ石積みと城道（南から）



外周土堀



北東部の曲輪と切岸

例　　言

1. 本書は、高松市教育委員会が平成 28 年度から令和 3 年度にかけて国庫補助事業として実施した勝賀城跡の総括報告書（調査編）である。
2. 発掘調査及び整理作業は、高松市創造都市推進局文化・観光・スポーツ部文化財課文化財専門員 梶原 慎司が担当した。平成 29 年度の調査では、同課非常勤嘱託職員 益崎卓己（現香川県教育委員会）の補佐を得た。
3. 本報告書（調査編）の執筆及び編集は梶原が担当した。
4. 本報告書の標高は東京湾平均海面高度を基準とし、図中の方位は座標北を表す。
5. 遺構断面の注記の色調及び土器観察表の色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖 36 版』を参照した。
6. 本報告書の挿図として、国土地理院発行 2 万 5000 分の 1 地形図「五色台」「高松北部」「高松南部」「白峰山」を一部改変して使用した。
7. 発掘調査で得られた全ての資料は、高松市教育委員会で保管している。
8. 報告書作成に関連して以下の業務を委託発注により実施した。
基準点測量業務・地形図作成業務：株式会社 四航コンサルタント
遺物写真撮影業務：西大寺フォト
9. 発掘調査から整理作業、報告書執筆を実施するに当たり、下記の関係関係者並びに諸機関から御教示及び御協力を得た。記して厚く謝意を表する（五十音順、敬称略）。
東信男、嘉村哲也、川島佳弘、下高大輔、田中健二、中井均、西岡達哉、信里芳紀、
乗岡実、橋詰茂、藤井雄三、松浦暢昌、松田朝由、松田直則、宮里修、山本一伸、
吉成承三、渡邊誠
香川県教育委員会、香川県埋蔵文化財センター、勝賀城跡保存会、坂出市教育委員会、
さぬき市教育委員会、善通寺市教育委員会、文化庁
10. 発掘調査から報告書執筆を実施するに当たり、発掘調査及び図面作成に携わった方々に謝意を表する（五十音順、敬称略）。
勝賀城跡保存会の皆様、飯間明雄、糸川義信、小笠原和隆、小島省二、金子真夕、木村茂、
河野真弓、佐々木一朗、高畑裕、玉木雅和、西原佳祐、西宮嘉雄、畠正二、前田健二

発掘調査編目次

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯	1
第2節 調査履歴	2
第3節 会議の設置	3
第4節 調査の経過	5

第2章 勝賀城跡の測量調査と縄張り

第1節 測量調査	7
第2節 勝賀城跡の範囲	14
第3節 勝賀城跡の構造	14

第3章 各曲輪の概要と発掘調査成果

第1節 主郭	21
第2節 唰い違い虎口	32
第3節 平虎口	38
第4節 曲輪I・II	47
第5節 曲輪III・IV	53
第6節 曲輪V・VI・VII	69
第7節 曲輪VIII・IX	76

挿 図 目 次

第1-1図	3次調査位置図	2
第1-2図	3次調査トレンチ配置図	3
第1-3図	調査区配置図	6
第2-1図	勝賀城跡の位置	7
第2-2図	勝賀城跡の位置	7
第2-3図	各部位の名称	8
第2-4図	勝賀城跡測量図	9・10
第2-5図	勝賀城跡山腹部A測量図	11
第2-6図	勝賀城跡南西部・山腹部B測量図	12
第2-7図	勝賀城跡北東部測量図	13
第2-8図	勝賀城跡南西部測量図	15・16
第2-9図	勝賀城跡の縄張図	17
第2-10図	勝賀城跡の縄張図	18
第3-1図	主郭平面図	22
第3-2図	主郭平面図（トレンチ配置）	23
第3-3図	1次調査区平・断面図①	25
第3-4図	1次調査区平・断面図②	26
第3-5図	1次調査区平・断面図③	27
第3-6図	4次調査区平・断面図	28
第3-7図	SK01・02平・断面図	29
第3-8図	主郭出土遺物①	30
第3-9図	主郭出土遺物②	31
第3-10図	喰い違い虎口測量図	33
第3-11図	喰い違い虎口トレンチ配置図	34
第3-12図	喰い違い虎口トレンチ断面図①	35
第3-13図	喰い違い虎口トレンチ断面図②	36
第3-14図	喰い違い虎口出土遺物	36
第3-15図	平虎口測量図	39
第3-16図	平虎口トレンチ配置図①	40
第3-17図	平虎口トレンチ配置図②	41
第3-18図	平虎口トレンチ出土遺物	41
第3-19図	平虎口トレンチ断面図①	42
第3-20図	平虎口トレンチ断面図②	43
第3-21図	平虎口トレンチ配置図③	45
第3-22図	平虎口トレンチ断面図③	46
第3-23図	曲輪I・II測量図	48
第3-24図	曲輪Iトレンチ配置図	49
第3-25図	曲輪Iトレンチ断面図①	50
第3-26図	曲輪Iトレンチ断面図②	51
第3-27図	曲輪Iトレンチ出土遺物	52
第3-28図	曲輪III・IV測量図	54
第3-29図	曲輪III・IVトレンチ配置図	55
第3-30図	曲輪III東端石積み平・立面図	56
第3-31図	曲輪III・IV区画土塁立面図・曲輪IV東端石積み平・立面図	57
第3-32図	2次調査第I調査区配置図	58
第3-33図	2次調査第I調査区断面図	59
第3-34図	2次調査第II調査区配置図	60
第3-35図	2次調査第II調査区断面図①	61
第3-36図	2次調査第II調査区断面図②	62
第3-37図	曲輪III・IV出土遺物	63
第3-38図	2次調査第III調査区平面図	64
第3-39図	2次調査第III調査区断面図	65
第3-40図	8次調査区平面図	66
第3-41図	8次調査区断面図	67
第3-42図	曲輪V・VI・VII測量図	70
第3-43図	曲輪VII土塁平・立面図①	71
第3-44図	曲輪VII土塁平・立面図②	72
第3-45図	曲輪Vトレンチ出土遺物	72
第3-46図	曲輪V・VI・VIIトレンチ配置図	73
第3-47図	曲輪V・VI・VIIトレンチ断面図①	74
第3-48図	曲輪V・VI・VIIトレンチ断面図②	75
第3-49図	曲輪VIII・IX測量図	77
第3-50図	曲輪VIIIトレンチ配置図	78
第3-51図	曲輪VIIIトレンチ断面図	79

挿表目次

第1-1表 勝賀城跡の調査履歴	2	第3-3表 石器観察表	82
第3-1表 土器観察表(1)	80	第3-4表 鉄製品観察表	82
第3-2表 土器観察表(2)	81		

巻頭図版目次

図版1	勝賀山(第1,2次調査時)	図版3	曲輪Ⅲ石積み(北から)
	勝賀山航空写真(東から)		曲輪Ⅲ石積みと城道(南から)
図版2	喰い違い虎口	図版4	外周土堀
	平虎口		北東部の曲輪と切岸

写真図版目次

図版1 1・2次調査	2次調査Ⅲ-ltr 完掘状況
1次調査トレンチ設定	2次調査Ⅱ-Btr 断面
1次調査2tr 完掘状況	2次調査外周土堀
1次調査4tr 完掘状況	曲輪Ⅲ南端の石積み
1次調査C-Dtr 完掘状況	図版5 1・2次調査
図版2 1・2次調査	調査風景①
1次調査6tr 完掘状況	調査風景②
2次調査I-1・2tr 完掘状況(西から)	調査風景③
2次調査I-3・4tr 完掘状況(西から)	調査風景④
図版3 1・2次調査	図版6 4次調査(主郭)
2次調査I-3・4tr 完掘状況(南から)	4次調査断ち割り壁面
2次調査I-3tr 完掘状況	完掘状況(南から)
2次調査I-4tr 完掘状況	4次調査完掘状況(東から)
図版4 1・2次調査	SK01 半掘状況
2次調査II-1・2・3tr 完掘状況	SK02 半掘状況

図版 7 5・6次調査（喰い違い虎口）

- 喰い違い虎口
- 喰い違い虎口完掘状況①
- 喰い違い虎口完掘状況②

図版 8 5・6次調査（喰い違い虎口）

- 喰い違い虎口完掘状況（2, 3tr）
- 喰い違い虎口完掘状況（2tr）
- 土壙頂部（4, 5tr）完掘状況

図版 9 5・6次調査（喰い違い虎口）

- 南側土壙頂部（4tr）完掘状況
- 北側土壙頂部（5tr）完掘状況
- 北側土壙頂部（5tr）断面

図版 10 5・6次調査（喰い違い虎口）

- 土壙断ち割り（3tr）断面①（北）
- 土壙断ち割り（3tr）断面②（中）
- 土壙断ち割り（3tr）断面③（南）

図版 11 6次調査（平虎口）

- 平虎口（主郭から）
- 平虎口（主郭外から）
- 平虎口完掘状況①

図版 12 6次調査（平虎口）

- 平虎口完掘状況②
- 平虎口完掘状況③
- 平虎口完掘状況④

図版 13 6次調査（平虎口）

- 平虎口 3tr 完掘状況（北土壙）
- 平虎口 5tr 完掘状況
- 土壙の土層断面（1tr）

図版 14 7次調査（曲輪 I）

- 曲輪 I（西から）
- 曲輪 I 完掘状況①
- 曲輪 I 完掘状況②

図版 15 7次調査（曲輪 I）

- 曲輪 I 完掘状況③
- 曲輪 I 完掘状況④
- 曲輪 I 完掘状況⑤

図版 16 7次調査（曲輪 I）

- 土壙断ち割り完掘状況①
- 土壙断ち割り土層断面①
- 土壙断ち割り土層断面②

図版 17 8次調査（曲輪 III）

- 曲輪 III 完掘状況
- 石積み裏部分断ち割り①
- 石積み裏部分断ち割り②

図版 18 8次調査（曲輪 III）

- 石積み裏部分断面
- 第2遭構面完掘状況
- 第2遭構面断面

図版 19 5次調査（曲輪 V～VII）

- 曲輪 VI 完掘状況（南から）
- 曲輪 VI 完掘状況（北から）
- 曲輪 V 完掘状況

図版 20 5次調査（曲輪 V～VII）

- 曲輪 VII 南壁完掘状況①
- 曲輪 VII 南壁完掘状況②
- 曲輪 VII 南壁東側断面

図版 21 8次調査（曲輪 VII）

- 曲輪 VII 完掘状況
- 曲輪 VII 北側完掘状況
- 曲輪 VII 南側完掘状況

図版 22 竪土壙・主郭

- 竪土壙（北側）
- 主郭
- 北東部からみた南西部
- 主郭土壙の折

図版 23 曲輪 I～III

- 曲輪 I（東から）
- 曲輪 II（西から）
- 曲輪 III 石積み

図版 24 曲輪 V～VII

- 曲輪 V～VII（東から）
- 曲輪 V～VII（西から）
- 曲輪 VII の外周土壙

図版 25 主郭東側の帯曲輪・北東部

- 主郭東側の帯曲輪
- 主郭東側の帯曲輪と露岩
- 北東部

図版 26 曲輪 26 の石列

曲輪 26 の石列①

曲輪 26 の石列②

曲輪 26 の石列③

図版 27 勝賀城跡からみた高松湾・高松平野・

瀬戸内海

勝賀城跡からみた高松湾

勝賀城跡からみた高松平野

勝賀城跡から瀬戸内海を臨む

図版 28 現地見学会風景・調査風景

現地見学会風景

草刈り風景

調査員集合写真

図版 29 出土遺物①

土師質土器①

備前焼

図版 30 出土遺物②

土師質土器②

陶磁器

石器

図版 31 出土遺物③

銅製品

鉄製品

養福寺所蔵 泥塔

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯

勝賀城跡は、鎌倉時代から戦国時代にかけて約360年間笠居郷を本拠にして活躍した香西氏の牙城である。市内でも遺構が良好に残る山城跡として認識されており、高松市指定文化財(史跡)(以下、市史跡とする)に指定されている。

1970年代に香川県普通寺市・多度津町・三野町(現三豊市)にまたがる天霧城跡において採石作業が城跡の遺構に重大な影響を及ぼすようになったことを受け、関係市町を中心に天霧城跡の保存運動が盛り上がった。その結果、昭和49(1974)年から56(1981)年にかけて数次にわたる測量調査や発掘調査が行われ、国指定史跡(以下、国史跡とする)に指定された。天霧城跡の調査が行われた同時期(54~57(1979~1982)年)に高松市勝賀城跡・さぬき市雨滝城跡・さぬき市昼寝城跡という県内の主要な中世山城の調査が行われている。これらの調査は、県内の中世山城の実態を明らかにしようという機運の高まりや、開発計画に対する保存運動が背景として想定される。以上の経緯により、高松市教育委員会(以下、市教委とする)は53、54年度に勝賀城跡の測量調査・発掘調査を実施し、城跡の全体像を記録化するとともに、15~16世紀の遺物を確認した。これにより、市内における中世山城の代表例として55(1980)年8月6日に市史跡に指定された。その後、56(1981)年に結成された勝賀城跡保存会(前身の勝賀史談会は52(1977)年に結成)により勝賀城跡の清掃活動(主に主郭と土塁)がなされ、現在まで勝賀城跡の保存活動が継続的に行われている。

平成9~14年度に香川県教育委員会(以下、県教委とする)により香川県中世城館跡詳細分布調査が行われると、池田誠氏によって作成された縄張図が提示されるとともに、今後さらに調査を進め、国の史跡等として保存を図るべき中世城館のひとつとされた。その後、文化庁と国指定に向けた協議を実施し、以下の点について調査や検討を進めることとなった。

1. 指定範囲

県教委が行った分布調査の際に提示された縄張図と、現在市史跡として指定されている範囲を整合させる必要がある。また、国史跡として指定する範囲についても検討する必要がある。

2. 本質的価値の深化

昭和53、54年度に行われた発掘調査から約40年経過しており、その間に中世城館研究は大きく進展した。それらの研究成果に基づき再調査を行い、本質的価値を深化する必要がある。

3. 文献調査の実施

勝賀城跡に加え香西氏について文献調査を実施する必要がある。

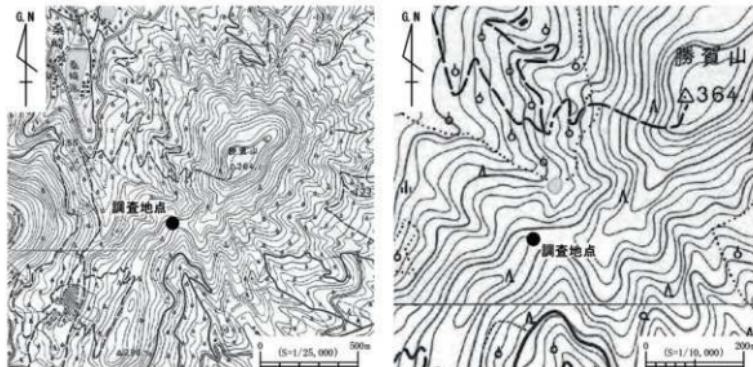
以上の課題を解決するため、3~5年を目安として平成28年度から調査(踏査、発掘調査及び測量調査)を実施することになった。調査を実施するに当たり、28(2016)年2月に滋賀県立大学の中井均教授(当時)を招いて踏査を実施し、今後の発掘調査予定地等についての助言を得た。

第2節 調査履歴

勝賀城跡における調査の履歴と概要を第1-1表にまとめた。1、2次調査については『勝賀城跡』『勝賀城跡II』(高松市教委編 1979, 1980)で報告されているが、本報告書作成に伴い再整理を行ったため、第3章で調査内容を再掲載した。3次調査については『高松市内遺跡発掘調査概報』(高松市教委編 2004)で報告している。城内の調査ではないことから、本節において調査内容を再掲載する。

第1-1表 勝賀城跡の調査履歴

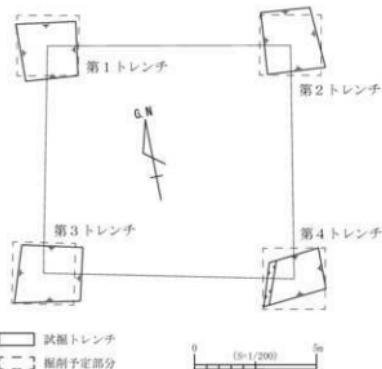
次数	調査期間	調査要因	調査概要	測量調査	文献
1次	1979.2.13～2.24	内容確認調査	主要内の確認調査。遺構は土坑を数基検出し、16cの遺物が出土した。	○	高松市教委編1979 本書
2次	1979.10.29～11.30	内容確認調査	主要外の曲輪の確認調査。遺構は認められなかつたが、16cの遺物が出土した。	×	高松市教委編1980 本書
3次	2003.8.20	鉄塔建設工事	遺構・遺物は認められなかつた。	×	高松市教委編2004 本書
4次	2016.11.21～ 2017.2.24	内容確認調査	主要内の確認調査。遺構は土坑を2基検出し、16cの遺物が出土した。	○	本書
5次	2017.12.4～ 2018.2.1	内容確認調査	墳い違い虎口（主郭）の確認調査。遺構は認められなかつたが、16cの遺物が出土した。	○	本書
6次	2018.11.2～ 2019.3.27	内容確認調査	平虎口（主郭）の確認調査。遺構は認められなかつたが、16cの遺物が出土した。	○	本書
7次	2020.2.8～3.25	内容確認調査	主要外の曲輪の確認調査。遺構は認められなかつたが、16cの遺物が出土した。	○	本書
8次	2020.11.10～ 2021.3.23	内容確認調査	主要外の曲輪の確認調査。遺構は認められなかつたが、16cの遺物が出土した。	○	本書



第1-1図 3次調査位置図 (S=1/25,000・1/10,000)

3次調査（第1-1, 2図）

送電線鉄塔建設工事に伴い掘削が行われる部分について確認調査を実施した。鉄塔の基礎部分4ヶ所にトレンチを設定した。全てのトレンチで表土を除去すると地山が認められた。地山上面で遺構検出を行ったが、遺構・遺物ともに認められなかった。



第1-2図 3次調査トレンチ配置図 (S=1/200)
(高松市教委編 2004 を再トレース)

第3節 会議の設置

平成28(2016)年2月に行われた踏査で得られた中井氏の助言に基づき、28～30年度は主郭内及び虎口の発掘調査を実施した。調査中は、中井氏の指導を仰ぎながら調査を行った。30(2018)年には、勝賀城跡の調査に関し広く専門家の意見を聞くことを図り、勝賀城跡の国史跡への指定を推進することを目的とした勝賀城跡調査会議を設置するため、勝賀城跡調査会議設置要綱を定め、令和元(2019)年5月1日に勝賀城跡調査会議を設立した。会議の委員には、考古学の学識経験者2名と日本史(文献)の学識経験者2名を委嘱した。会議は年2回程度開催し、3年度末までに計4回実施し貴重な助言を得た。委嘱した委員は以下のとおりである。

勝賀城跡調査会議（所属・肩書は会議設立時）

会長 中井 均（滋賀県立大学教授）
委員 乗岡 実（丸亀市教育委員会）
委員 田中 健二（香川大学名誉教授）
委員 橋詰 茂（徳島文理大学教授）

第1回調査会議

第1回調査会議は令和元(2019)年10月9日に開催した。議題は、①勝賀城跡調査会議の設立について、②会長及び職務代理者の選出、③勝賀城跡における調査の経緯と経過、④今後の事業計画について、⑤平成31年度の調査地点について、である。主な指摘事項は以下のとおりである。

1. 勝賀城跡の北（北東）部分と南（南西）部分で構造が異なることについては繩張りから理解できるが、それらが時期差又は階層差かについては検討する必要がある。

- 出土遺物の年代について詳しく検討する必要がある。土師質土器からみた年代と陶磁器からみた年代を比較すると少し時期差がある。出土遺物が全て改修後のものと判断する必要はない。各器種ごとに検討していく必要がある。
- 城の恒常性について検討する必要がある。つまり、極めて臨時の・暫定的なものであった可能性がある。

第2回調査会議

第2回調査会議は2(2020)年3月19日に開催した。コロナ禍のため勝賀山山上にて調査会議を行った。議題は、①発掘調査地点の現地視察、②令和2年度の発掘調査地点について、である。主な指摘事項は以下のとおりである。

- 4次調査（平成31年度調査）で曲輪を全面発掘調査したが、遺構は検出されず出土遺物も少量であった。このような遺構・遺物が「ない」ということが評価に繋がるのではないだろうか。
- 備中高松城攻めや三木城攻めの陣城の発掘調査成果を参考にしてみたらどうか。
- 香西周辺の真宗系寺院の文献調査を行う必要がある。

第3回調査会議

第3回調査会議は2(2020)年10月頃に開催する予定だったが、コロナ禍のため調査会議は開催せず、発掘調査地点について各委員から個別に助言を得た。そして、3(2021)年2月26日に第3回調査会議を開催した。本会議には、文化庁文化財第二課の山下主任文化財調査官（当時）の出席を得た。議題は、①令和2年度の発掘調査成果について、②勝賀城跡における発掘調査成果の総括、③勝賀城跡の本質的価値について、である。主な指摘事項は以下のとおりである。橋詰委員は会議に欠席だったため、後日個別に助言を得た。

- 香西氏の時代の城の規模や出土遺物について、より精緻な評価をする必要がある。
- いつ、何のために織豊系城郭に改修されたのかを考えるために考古学的検討のみならず社会状況を含めた検討が必要である。

第4回調査会議

第4回調査会議は4(2022)年1月12日に開催した。議題は、①報告書(調査編)の内容について、②勝賀城跡の歴史的価値について、③報告書(考察編・史料編)の執筆について、である。主な指摘事項は以下のとおりである。

- 調査編について、これまでの縄張り図と事務局案の違いを鮮明にし、その根拠を明確に示す必要がある。また、調査で明らかになったことから理解できることを順序だててわかりやすく説明した方がよい。
- 歴史的価値については大筋で同意を得ることができた。

平成31年度～令和3年度に開催した勝賀城跡調査会議の議題と指導内容は上記のとおりである。また、平成31年2月26日には文化庁の山下主任調査官（当時）に、令和4年2月2日

には野木調査官に現地指導をしていただいた。

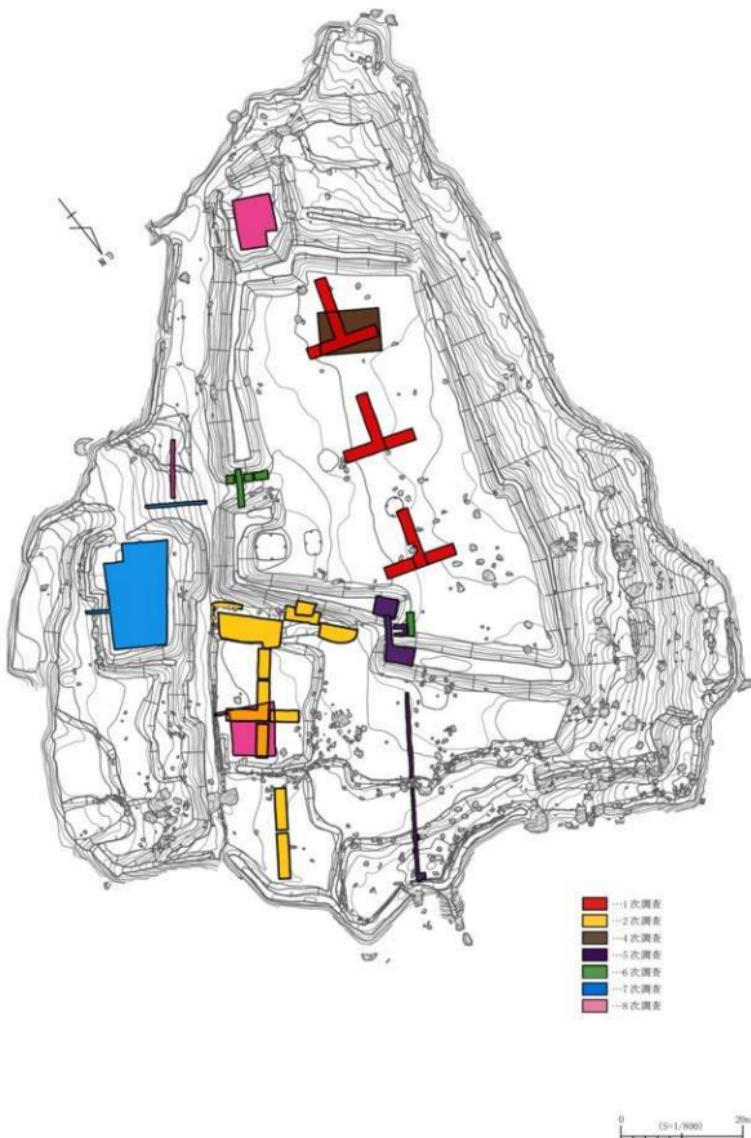
調査会議以外にも委員の皆様には御多忙のなか御指導をいただいた。中井委員には調査当初から毎年足を運んでいただき、山上にて御指導いただいた。乗岡委員には勝賀城跡に加え雨滝城跡・聖通寺城跡等の出土遺物について検討していただいた。田中委員・橋詰委員には史料編と考察編について毎月のように御指導いただいた。委員の皆様に多大なる御指導を賜ったことをここに記し、厚く御礼申しあげる。

第4節 調査の経過

平成28年度から開始した調査では、主に勝賀城跡の南西部を対象とした。その理由としては、後述するように、南西部が天正年間以降に改修されたことは喰い違い虎口等の要素からみて明らかであり、本質的価値を深めるためには、「どの段階で改修されたのか」という問題を明らかにする必要があったからである。調査区の配置は第1-3図、調査期間は第1-1表に示したとおりである。

発掘調査は人力により掘削を行った。図化作業の際に使用する基準点と水準点は、(株)四航コンサルタントに委託し、世界測地系第IV座標系・4級基準点を設置した。記録に際しては、基準点を基に1/20縮尺で平面図及び断面図を作成した。写真撮影は、28～30年度は35mmフィルムカメラとデジタルカメラを併用したが、31年度からはデジタルカメラのみ用いた。測量調査はレベルとトータルステーションを用いて行った。記録に際しては、基準点を基に1/100で作図した。

平成31(2019)年3月26日に勝賀城跡の現地見学会を行った。集合場所から徒歩約1時間の登山という行程にも関わらず約100名の参加があり、市民の関心の高さがみられた。



第1-3図 調査区配置図

第2章 勝賀城跡の測量調査と縄張り

第1節 測量調査

勝賀城跡は高松平野西部に位置する（第2-1, 2-2図）。香川県高松市鬼無町・香西西町・植松町・中山町にまたがる標高365mの勝賀山の山頂に所在し、城跡からは高松平野と瀬戸内海が一望できる。勝賀城跡の測量は、1次調査で（株）南海コンサルタントに業務委託して行われた。第2-4～2-7図は1次調査で作成された測量図である。この測量図は、50cm間隔で引かれた等高線図であるのに加え、遺構図としても作成された。

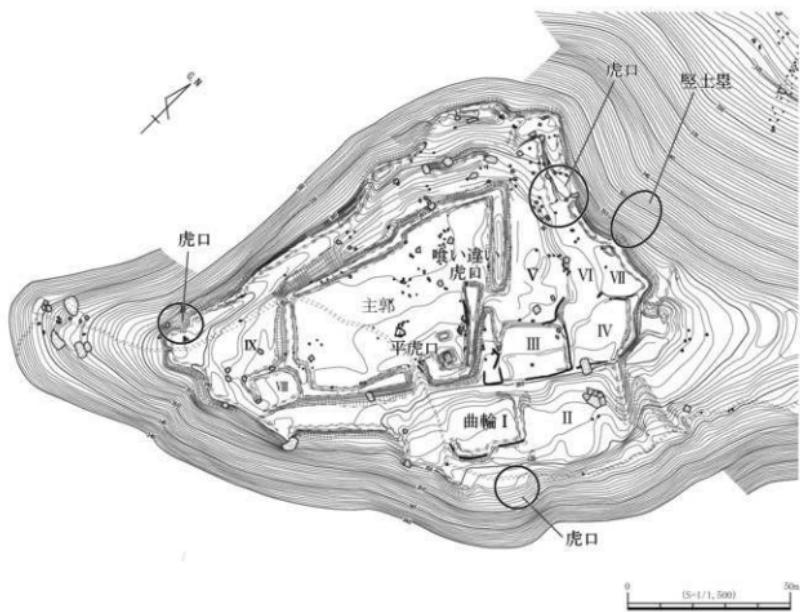
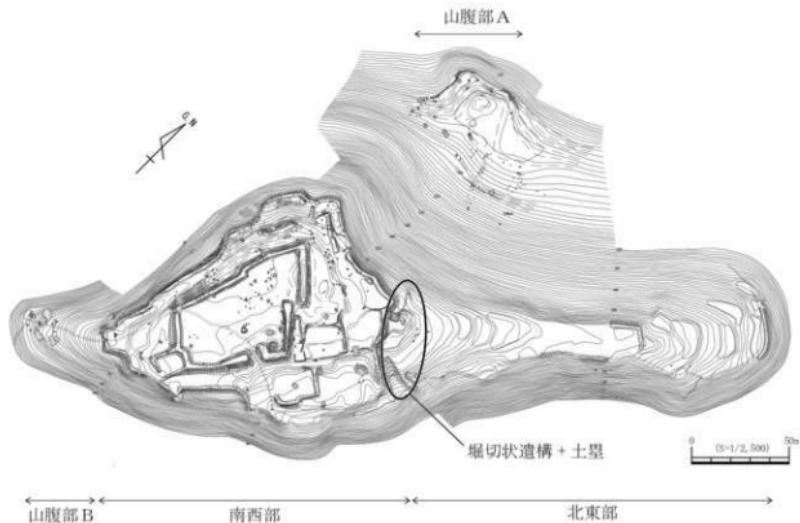
また、平成28年度から令和2年度にかけての調査では、主郭を中心とした南西部の構造を明らかにするため、25cm間隔で等高線を引いた新たな測量図を作成した（第2-8図）。その際には、勝賀城跡保存会や作業員の方々の力添えもあり、山頂部全域の伐採及び草刈りを実施することができた。記して感謝申しあげたい。



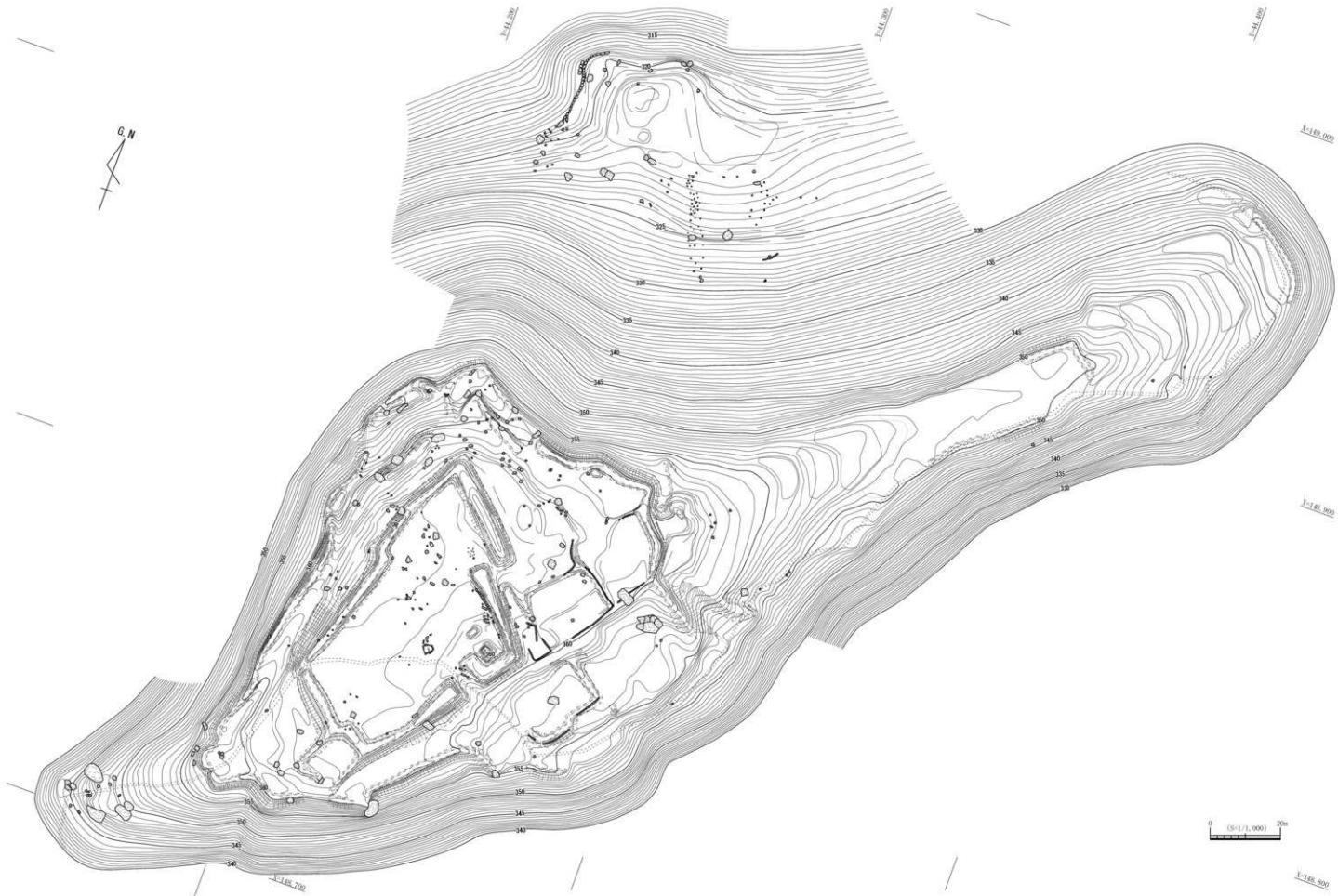
第2-1図 勝賀城跡の位置 (S=1/500万)

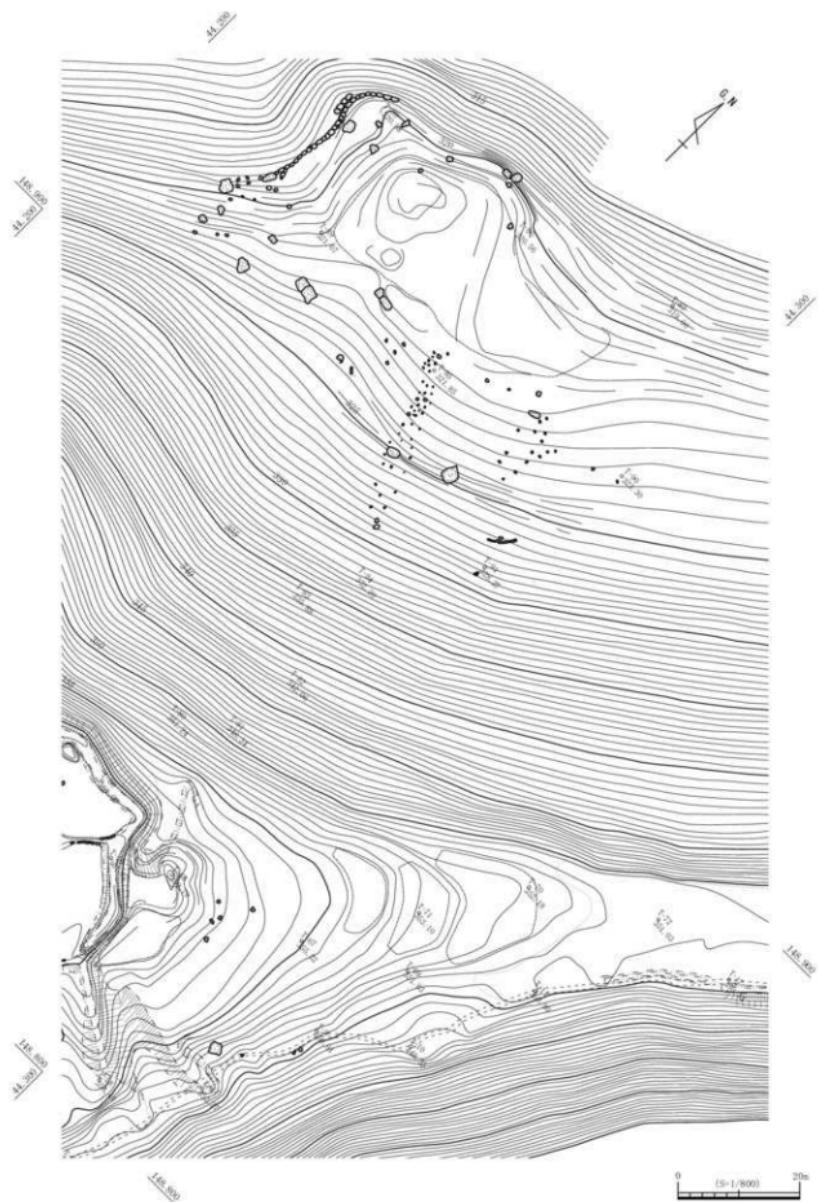


第2-2図 勝賀城跡の位置 (S=1/100,000)



第2-3図 各部位の名称 (S=1/2,500・1/1,500)

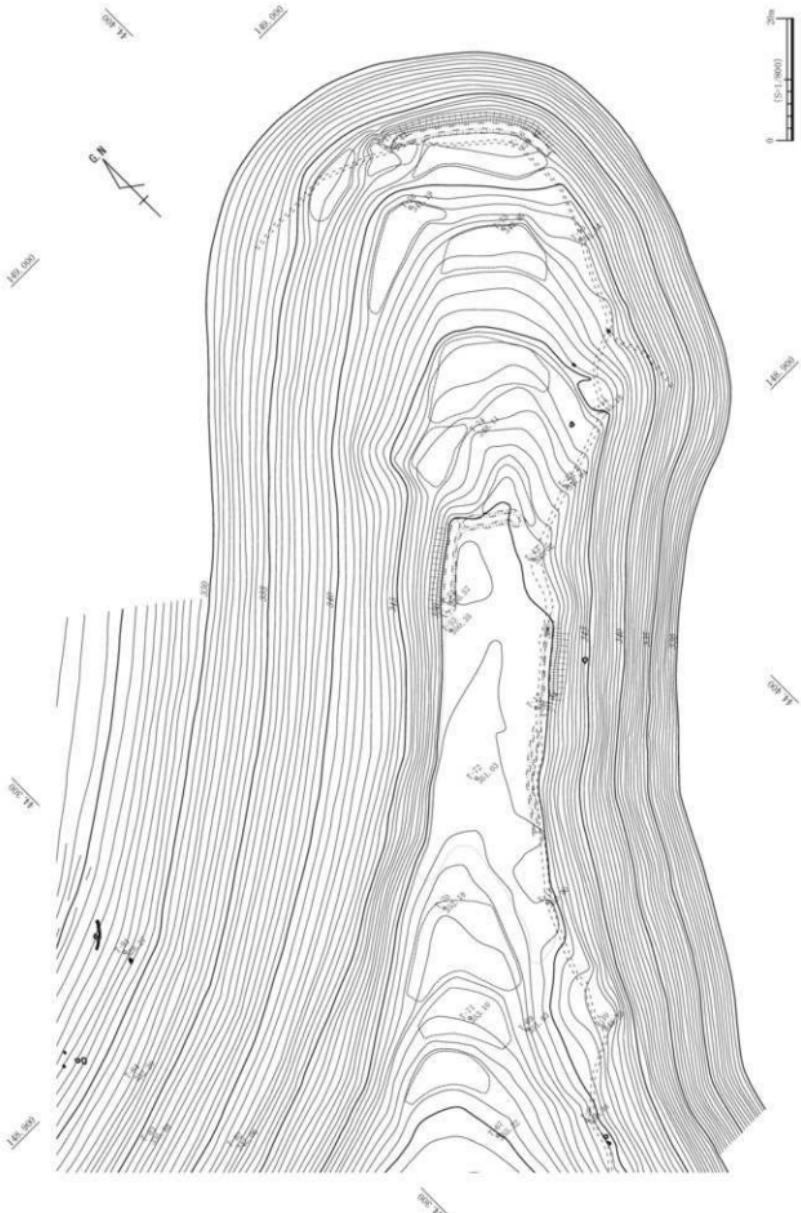




第2-5図 勝賀城跡山腹部A測量図 (S=1/800)



第2-6図 勝賀城跡南西部・山腹部B測量図 (S=1/1,000)



第2-7図 勝賀城跡北東部測量図 (S=1/800)

第2節 勝賀城跡の範囲

勝賀城跡は標高 365 m の勝賀山の山頂に位置する。勝賀山は標高 150 ~ 320 m まではマサ状に風化した花崗岩の露岩がみられ、標高 320 m 付近から頂上までは安山岩の露岩がみられる。安山岩は花崗岩に比べ風化しにくいため、安山岩の露岩が出現する標高 320 m 付近から、傾斜が急勾配になり天然の要害となっている。城跡は勝賀山の山頂全域にまたがり、全長約 380 m に及ぶ。

勝賀城跡の縄張図は、池田誠氏（香川県教委編 2003）と松田英治氏（松田 2012）によって提示されている（第 2-9 図）。両氏の縄張図は、1 次調査の測量図を基に作成されているため曲輪の構造や大きさ等の基本的な部分については類似する。1 次調査の測量図と池田・松田両氏の縄張図の大きな違いは、城跡の範囲及び山腹の曲輪における認識である。これらの認識の違いを整理するため、本調査中に踏査を行った。踏査は、調査会議の会長である中井均氏及び高松市文化財専門員数名で行った。

1 次調査の測量図と池田・松田両氏の縄張図の大きな違いは、3箇所ある（第 2-9 図：範囲①～③）。

範囲①は、両氏の縄張図では、山頂から 200 m 以上南へ降った標高 260 ~ 280 m の尾根上に曲輪が点在している。これらが曲輪群であるか検討するため踏査を行った結果、これらの平坦地は自然地形で、尾根上の微妙な平坦面を曲輪と認識したものと判断した。

範囲②は山腹部 A の部分である。1 次調査報告の『勝賀城跡』では、周囲の地形から本来緩やかな斜面地形が山腹に張り出したところであり、人為的な改変は西端の一画程度（第 2-10 図：曲輪 26）と想定している。一方、両氏の縄張図では、曲輪 26 の東側に長さ約 150 m の広大な平坦地があり、曲輪と認識している。踏査を行った結果、『勝賀城跡』の記述通り人為的な改変は認められなかった。ただし『勝賀城跡』でも述べているように、このような平坦地を兵の駐屯所として利用した可能性はある。また、両氏の縄張図では、曲輪 26 から北西に約 50 m 降った場所に曲輪を、その周囲には堅堀を想定しているが、この曲輪も踏査の結果、自然地形と判断した。

範囲③は、勝賀城跡北東部東側斜面に堅堀を想定している。これらを踏査した結果、人為的な遺構ではなく自然によって形成されたものであると判断した。また、池田氏の縄張図では曲輪が描かれているが、この曲輪も踏査の結果、自然地形と判断した。

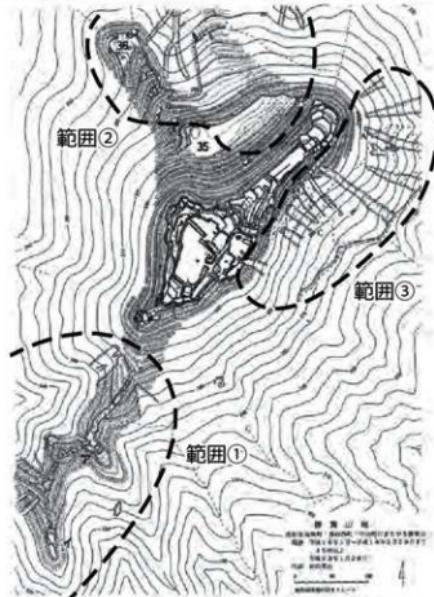
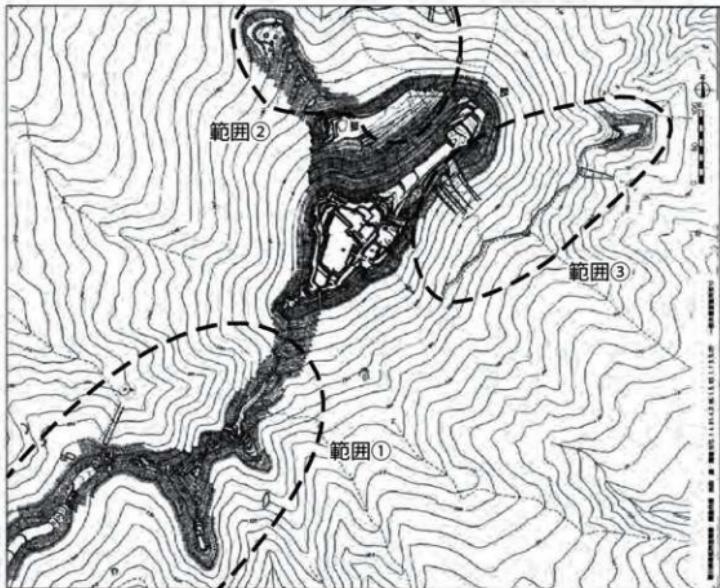
以上の踏査結果を踏まえ、新たな縄張図を作成した（第 2-10 図）。勝賀城跡は勝賀山の安山岩が分布する範囲におさまり、南北約 380 m、東西約 150 m に及ぶことが明らかになった。

第3節 勝賀城跡の構造

勝賀城跡は山頂部全域に及ぶ城跡だが、山頂からやや下がった山頂部中央に堀切状の遺構と土壘（斜面部に堅堀と土壘とも言い換えられる）が組み合わさった遺構があり、これらの遺構を境に南西部と北東部で構造が大きく異なる。南西部は主郭及び全体が土壘で囲まれた、主郭



第2-8図 勝賀城跡南西部測量図 (S=1/500)



第2-9図

勝賀城跡の縄張図

上：池田誠氏作成

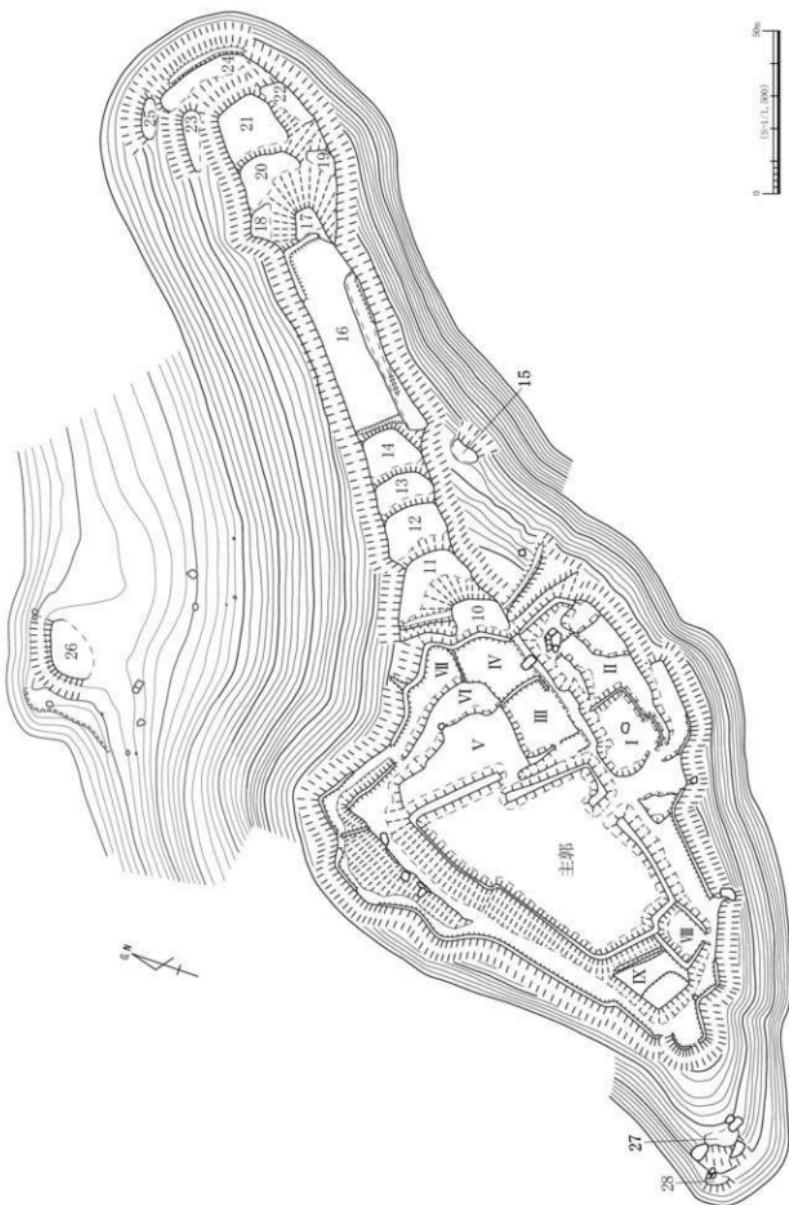
(香川県教委編 2003)

下：松田英治氏作成

(松田 2012)

50m
(S=1/1,500)

第2-10図 勝負城跡の細部図 (S=1/1,500)



の求心性が高く曲輪が複雑に配置された構造で、喰い違い虎口や方形曲輪など16世紀後半に出現する時期的に新しい要素の遺構がみられ、「織豊系城郭」と呼ばれる城郭と構造が類似する。一方、北東部は尾根上に曲輪が連なるように配置される連郭式で、天霧城跡や雨滝城跡など讃岐の中世山城の典型的な構造と同様である。以下、南西部及び北東部の構造に加え山腹部の曲輪について詳細に述べる。

(1) 南西部

南西部は、主郭を大きな土塁で囲み、南西部全体を小さな土塁で囲む二重の土塁が特徴的である。主郭は讃岐の中世山城のなかで、最大級の広さである。主郭を囲む土塁は高さ1~2mで四周を囲み、西と南で直角に近い折れがみられる。土塁により北と東に二つの虎口が形成され、北側は喰い違い虎口、東側は平虎口である。外周の土塁は高さ50cmで、折れを多用するのが特徴である。折れの部分には随所に巨大な自然露岩を土留めとして利用しており、築城の妙が窺える。北側の外周土塁には、土塁の折れの部分から派生するように外側に堅土塁が築かれる。南西部において北側は傾斜が最も緩やかな部分であるため、外周土塁の折れによる横矢や堅土塁により侵入を防ぐ工夫を凝らしている。外周土塁の内側には安山岩が1~2石土留めとして配置されている。

外周土塁により南西と東に二つの虎口が形成されている。大手と呼ばれる正面の入口は東側の虎口と考えられる。大手の虎口を入り直進すると、北側にある方形曲輪（曲輪I）の横を通り、主郭の東虎口に進入することができる。主郭と外周土塁の間には曲輪が9つ（曲輪I~IX）配置されている（第2-10図）。各曲輪の詳細については第3章で述べるが、主郭の東側の一段下がった場所に方形状の曲輪が2つ（曲輪I・II）、北側に方形状の曲輪が2つ（曲輪III・IV）と不整形の曲輪が3つ（曲輪V~VII）、南側に方形状の曲輪が2つ（曲輪VIII・IX）配置されており、曲輪I・III・VIIは土塁で方形状に区画されている。

西側と南側の主郭を囲む土塁と外周土塁の間には帯状の平坦地が認められる。西側の帯状の平坦地は外周土塁によって形成された南西の虎口（搦手）から入った場合の通路と考えられる。この通路を北上すると途中で、北進する通路と北西に進み一段下がる通路の二又に分かれる。全体の構造を考慮すると、北西に一段下がる通路を進ませるようにしていったと考えられる。そして、この二又の位置に合わせるように、主郭の土塁は直角に近い折れが生じ横矢を掛けられるようになっている。二又を北進する通路の方では西側に土塁が築かれており、西側の外周土塁の外側から城をみると、主郭土塁を含めて三段の土塁がみえる。二又を北西に進むと、途中で通路を遮るように堅土塁がある。さらに進み北東隅を曲がると南側にも土塁が築かれ、土塁に挟まれた通路となる。この通路を抜けると曲輪VIに抜けるが、通路南側の土塁と外周土塁により喰い違い状の虎口が形成されている。

(2) 北東部

北東部は、尾根上に曲輪が連なるように配置されている。全体的に自然地形の傾斜面を削平して平坦地を造成しており、平坦面も南西部に比べ傾斜している曲輪が多い。西端から5郭目まで（曲輪10~14）は南側斜面は緩やかな自然地形の傾斜となっており、帶曲輪が存在する可能性がある。北側斜面は急傾斜の切岸が造られており、曲輪11と12の西側切岸は不連続的である（写真図版25）。曲輪16は、長さ120mと長大で、西端には堀切の

可能性がある遺構、南端には土壘、東端には逆L字形の土壘が構築されている。東端の逆L字形の土壘の高さは約10cmで、現在は僅かに高まりがある程度である。南端の土壘の高さは約30cmである。

(3) 山腹部

山腹部A（第2-3図）には、山頂から西側に約40m降った場所に幅20m程度の不整形の曲輪（曲輪26）が存在する。曲輪の西側斜面には巨岩が列石をなしている（写真図版26）。しかしながら、列石の背後に曲輪はなく、緩やかな傾斜面となっているため、何のために列石が配置されたのかは不明である。

山腹部B（第2-3図）には、南西部南端の外周土壘から南西に10～15mほど降った場所に幅10m程度の不整形の曲輪が2つ（曲輪27・28）みられる。

第3章 各曲輪の概要と発掘調査成果

第1節 主郭

主郭の現況（第3-1図）

主郭の形状は、短軸32～40m、長軸50～60m（土壘の内側）の長方形である。周囲には土壘が廻り、土壘によって北側に喰い違い虎口、東側に平虎口が形成されている。

主郭の面積は約2,000m²で、香川県内の中世山城の中では突出して最も広い。主郭は一見すると平坦だが、東の平虎口付近が最も低く、北西部に向かって次第に高くなる。主郭内の高さは362.00～363.75mで、最高所と最低所の高低差は約1.75mである。主郭内には安山岩の自然露岩が散在しており、特に北側に集中してみられる。主郭内には近世末以降に建てられた祠（竜王社）と3箇所の擾乱がみられる。鉤形に折れる土壘の内側にある擾乱は、約4m四方、深さ約1mの落ち込みである。戸井跡と呼ばれているが、壁面・底面に遺構の痕跡はみられない。近代以降に故意に掘り下げられたという話もあり、2次調査で行われた発掘調査成果や形態等からも積極的に戸井跡と評価することはできない。

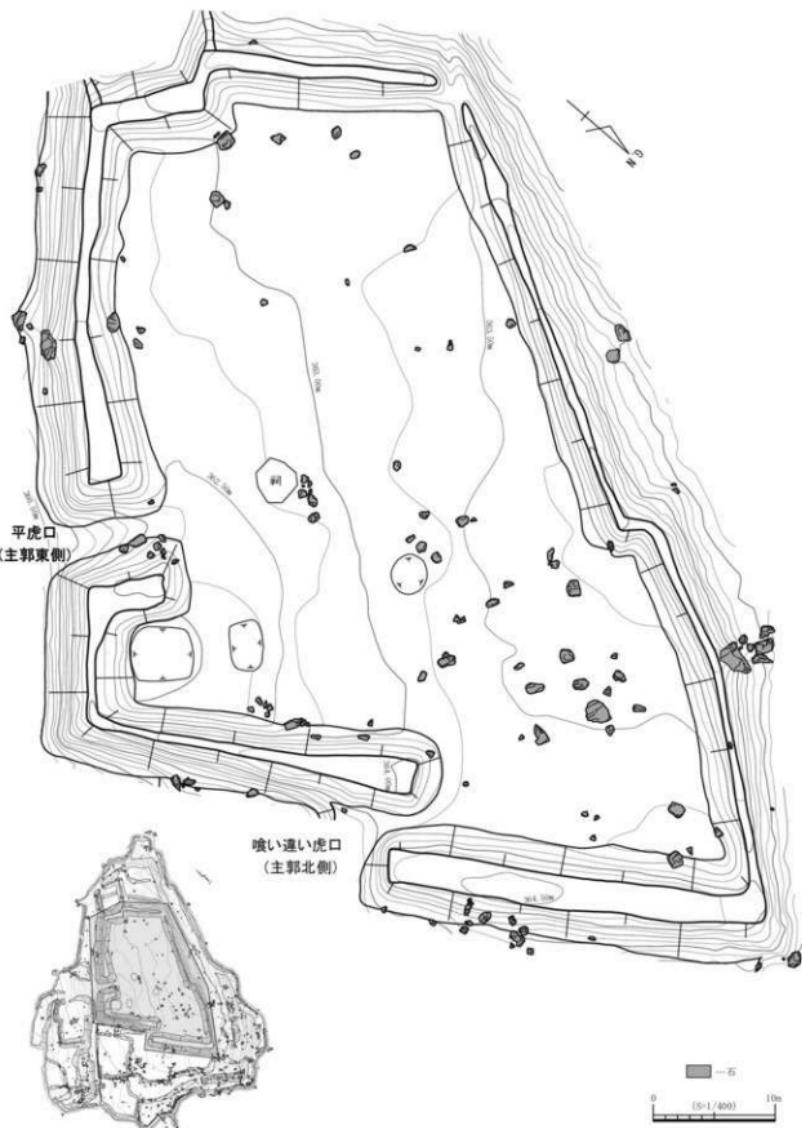
主郭の周囲には高さ1～1.25m、幅6～8mの土壘が廻っている。土壘は西側と南側の2箇所で直角に近い折れがみられる。土壘頂部の幅は0.5～1m程度であるが、虎口の周辺では頂部が広くなり、幅が2.5～3.0mになる。土壘西南隅部は、後世の道により削平されている。土壘の裾部に石が置かれている箇所が部分的にみられるが、列状に配置されている箇所はわずかで、露岩の可能性がある。『勝賀城跡』では土壘築造時に「腰巻石垣」状を取り入れたと指摘されたが、踏査においても発掘調査においても認められなかった。

発掘調査の目的（第3-2図）

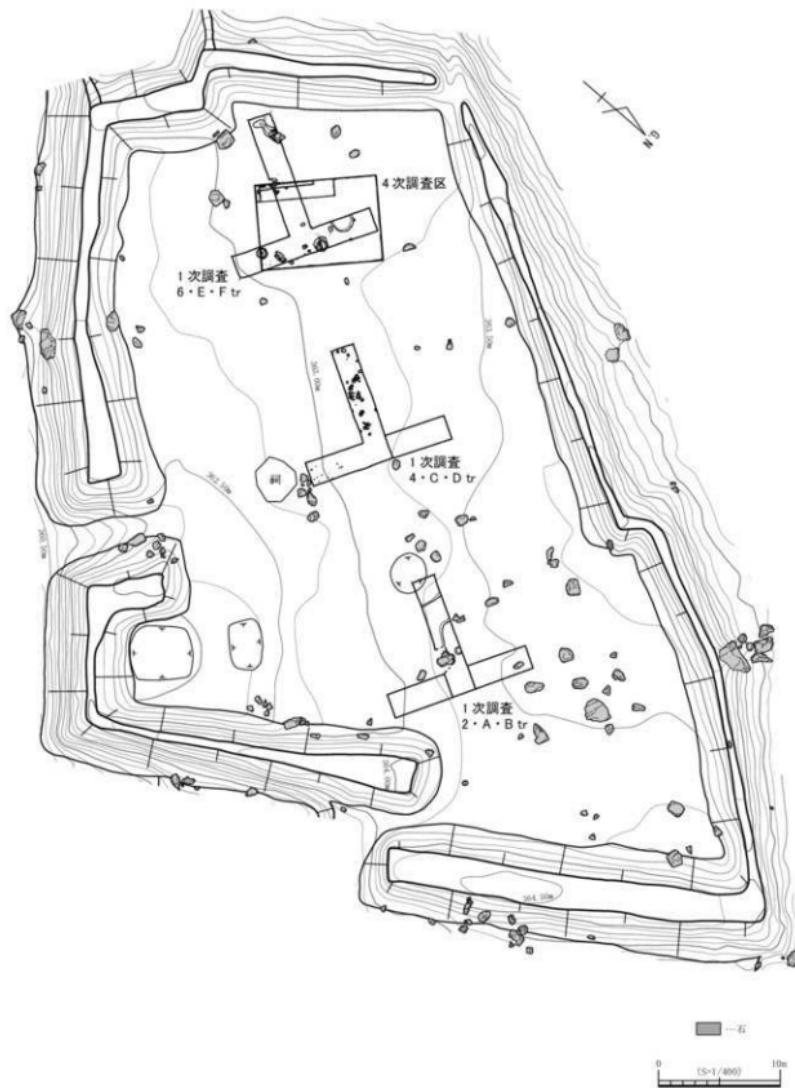
昭和53(1978)年度に行われた1次調査は、主郭内の遺構の確認及び出土遺物からみた城跡の時期比定を目的としてトレンチ設定及び発掘調査が行われた。1次調査で柱穴の可能性のある土坑が確認されており、土坑の周辺は主郭の中で最も傾斜が緩やかな場所だったため、平成28(2016)年度に行った4次調査では土坑周辺にトレンチを設定し、土坑の再検出及び土坑周辺における遺構の確認をするため発掘調査を行った。

1次調査の成果（第3-3, 4, 5図）

1次調査では、主郭の中央部に東西2m×12m、南北2m×10m（6トレンチのみ12m）のT字形のトレンチを南北方向に3箇所並べて設定した。1次調査で作成した原図が行方不明のため、A・B・Dトレンチの詳細は不明であるが、報告書によると、E・Fトレンチで浅い落ち込み(SK01)や二段掘り込みの土坑(SK02)を検出した以外に遺構らしきものはなかったようである。SK01・02から遺物は出土しなかった。土層断面図をみると、表土直下に黄褐色風化礫を多量に含む暗黄土色土層の地山がみられ、地山上面が遺構面である。遺物は表土中又は地山上面で出土した。また、出土遺物の年代は中世後半（15～16世紀）がほとんどを占めているため、主に中世後半に利用された山城であることが明らかになった。



第3-1図 主郭平面図 (S=1/400)



第3-2図 主郭平面図（トレンチ配置）(S=1/400)

4 次調査の成果（第3-6図）

4次調査では、1次調査で検出したSK01、02を再検出するため6・E・Fトレーニチに重なるように東西7m、南北10mのトレーニチを設定し発掘調査を行った。SK01、02を再検出し、断面図を作成した（第3-7図）。4次調査区ではSK01、02の他に遺構は確認されなかった。SK01は長短軸約1.1m、深さ約0.2mの円形の土坑である。断面の形状は半円状で、土質は1次調査で完掘したため不明である。SK02は長短軸約0.8m、深さ約0.3mの円形の二段掘り込みの土坑である。断面の形状は台形状で、土質は1次調査で完掘したため不明である。SK02は二段掘り込みで柱穴の可能性があると『勝賀城跡』では指摘されているが、柱穴にしてはやや大きく、二段掘りの部分が浅い。

1次調査と4次調査では、主郭の中心を南北に縦断するようにトレーニチを設定したが、遺構はほとんど検出されなかった。トレーニチの幅が2mであるためトレーニチの間を縫うように掘立柱建物が林立していた可能性は考えられるが、4次調査では面的に広げて調査しており、可能性は低いと思われる。主郭内に掘立柱建物が建っていたとしても小規模かつ少数であろう。

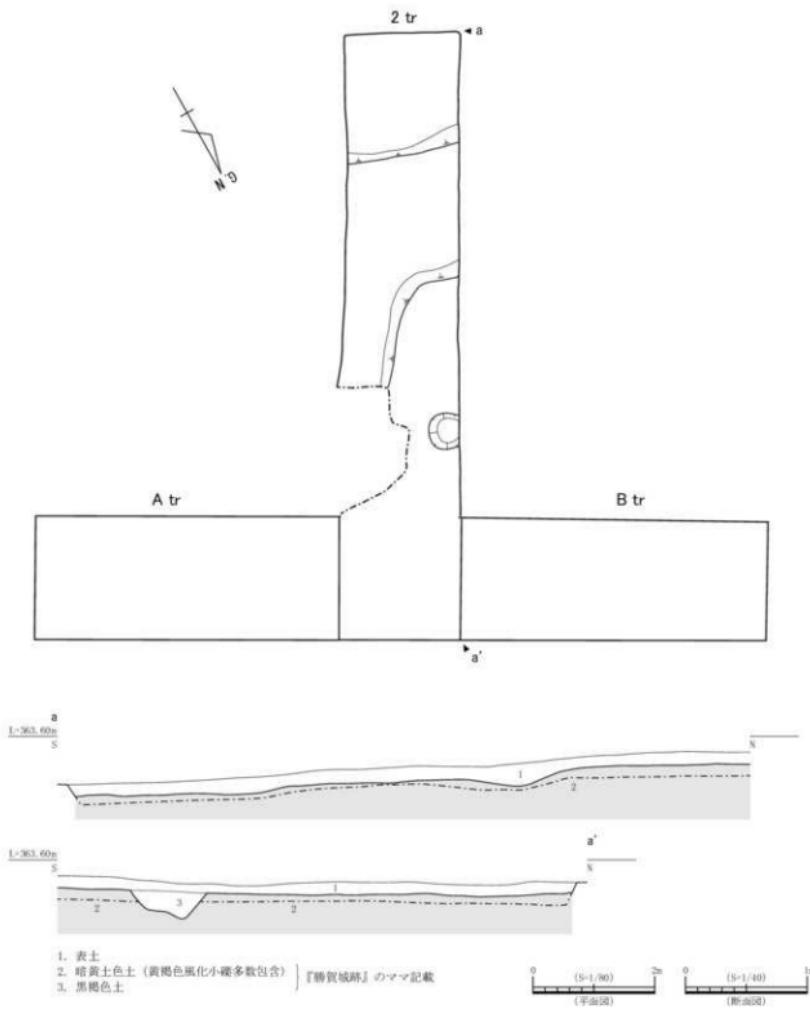
一方、主郭内には礎石に利用可能な平坦な上面をもった安山岩礎が散乱しており、雨滝城跡や昼寝城跡のように礎石建物があったのではないかと『勝賀城跡』で指摘されている。雨滝城跡でみられる礎石は地山の上に置いただけのものであるため、同様な構造であった場合、勝賀城跡は堆積土が薄いためイノシシなどにより掘り返され旧状を保っていない可能性が考えられる。また、遺構として残らないような建物があった可能性も考えられる。以上のように、主郭内の建物の存否について多くの仮説が想定されるが、遺構として残るような建物跡が検出されなかったこと、その一方で出土遺物には小皿や鍋など生活をしていったと窺える遺物が一定数出土していることが発掘調査によって明らかになっており、その評価については考察で述べる。

1次調査と4次調査の土層断面をみると、表土直下に黄褐色風化礎を多量に含む暗黃土色土層の地山がみられる。また、井戸跡と呼ばれる平虎口の北にある擾乱の壁面においても表土直下に地山がみられたことから、主郭は盛土を用いて地山を削平することによって造成したことが明らかになった。削平した土は周囲の土壌に用いられたと想定される。

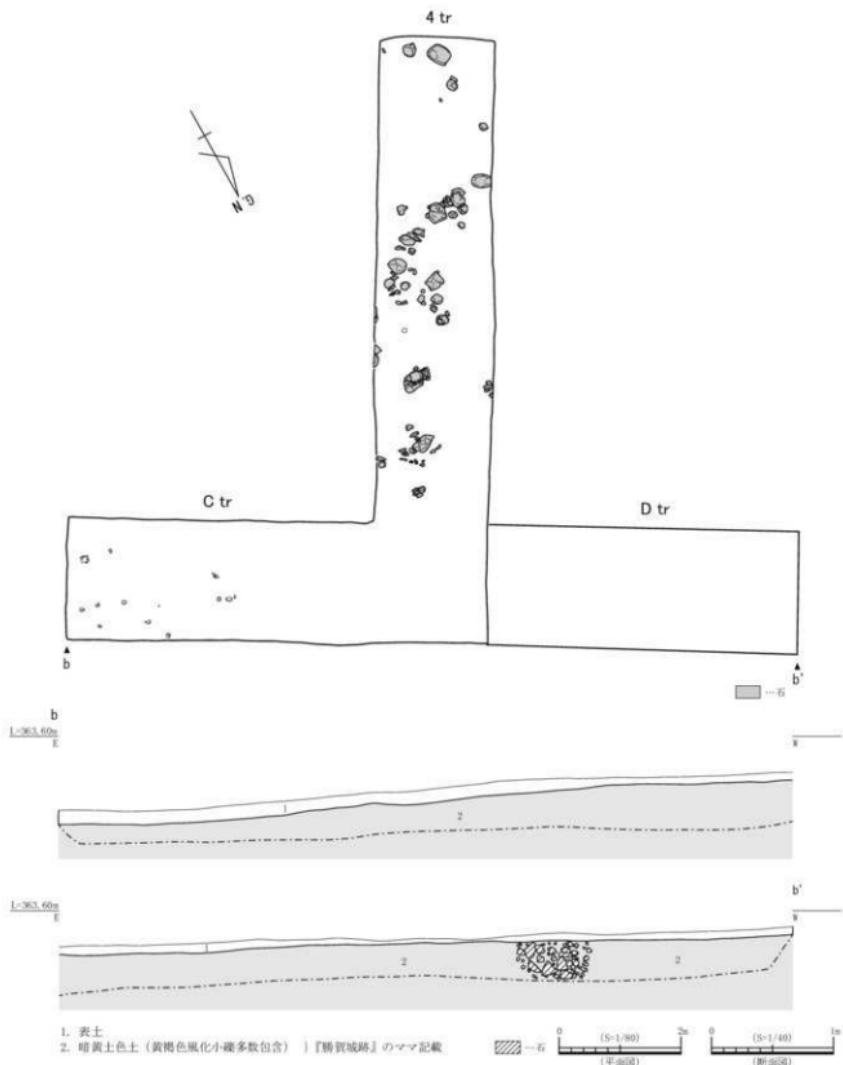
出土遺物（第3-8,9図）

遺物は発掘調査及び表採によりコンテナ1箱分出土した。出土遺物は、主に16世紀の土師質土器、備前焼、中国製陶磁器である。巻貝や鉄釘、小柄、銅製品、古錢なども出土した。1～22は土師質土器である。1～5は小皿である。破片が小さいため復元は困難である。底面には回転ヘラ切り、静止糸切りの痕跡が認められる。6は杯の底部である。外面に黒斑がみられる。7～11は鍋である。内傾する口縁部は端部が丸められ、外部には痕跡的な鈞部がみられる。胴部は羽釜形で、7,8のように把手を伴うものが多くみられる型式と想定される。12～20は鉢である。口縁部が内湾し、18のような片口のものもみられる。19,20は内面に間隔を空けて横目がみられる捕鉢である。21は火鉢の脚部である。1～21は16世紀代に属する。22は13世紀代の鍋の口縁部である。

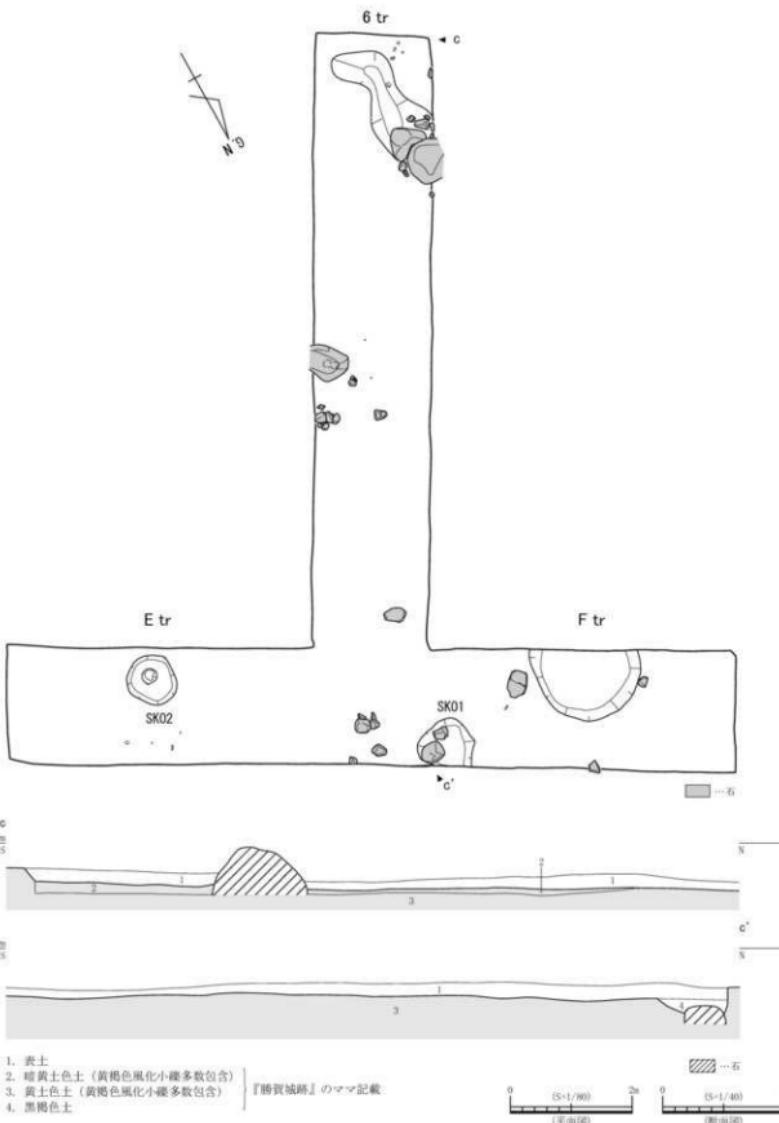
23～32は備前焼である。23～27は壺である。壺の口縁は胴部からやや外側に真っ直ぐに立ち上がり、端部は粘土折り返しによる玉縁をもつ。胸肩部に櫛描波状文・櫛描直線文がみら



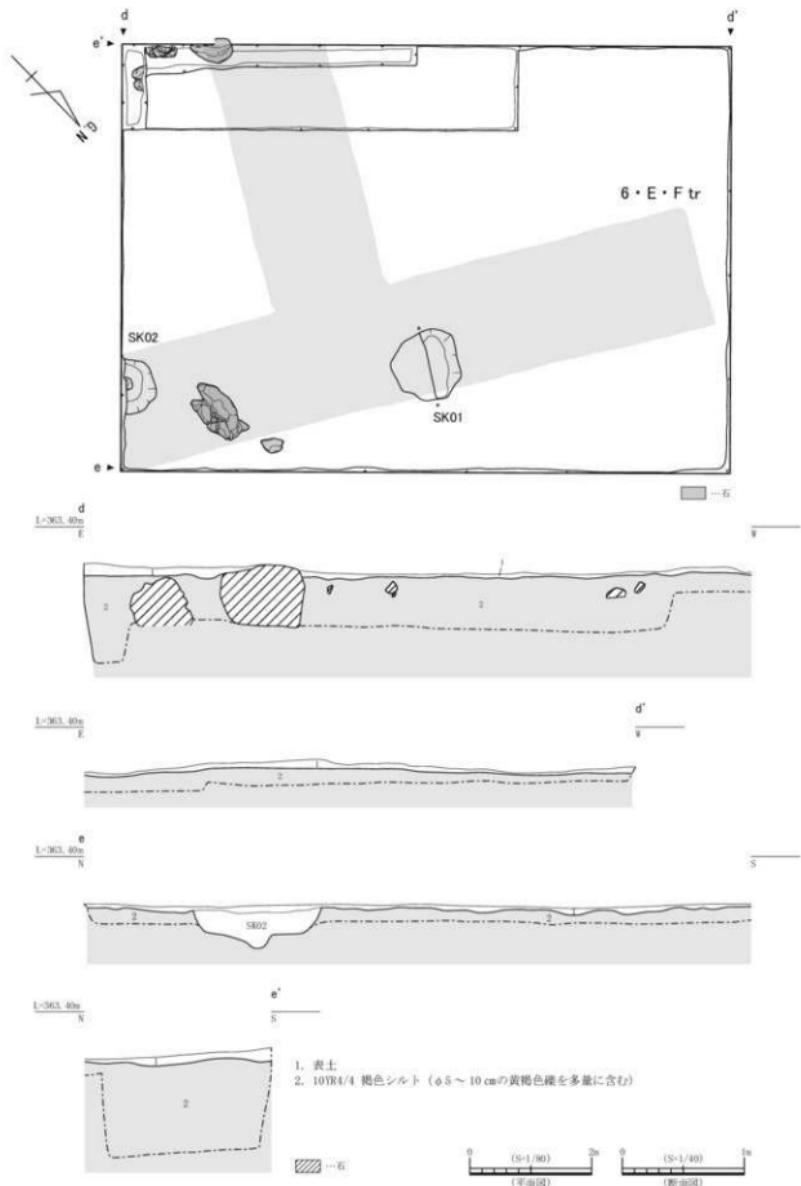
第3-3図 1次調査区平・断面図① ($S=1/80 \cdot 1/40$)



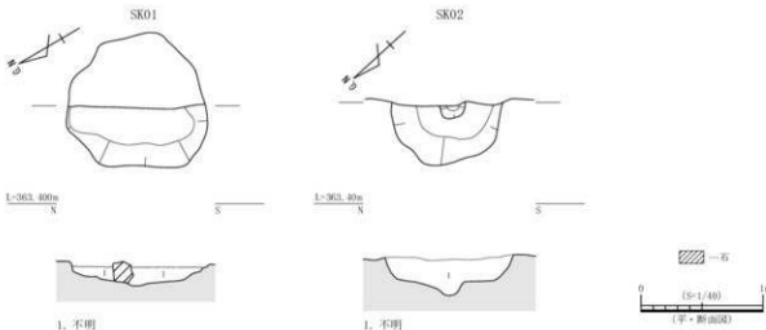
第3-4図 1次調査区平・断面図② (S=1/80・1/40)



第3-5図 1次調査区平・断面図③ (S=1/80・1/40)



第3-6図 4次調査区平・断面図 (S=1/80・1/40)



第3-7図 SK01・02 平・断面図 (S=1/40)

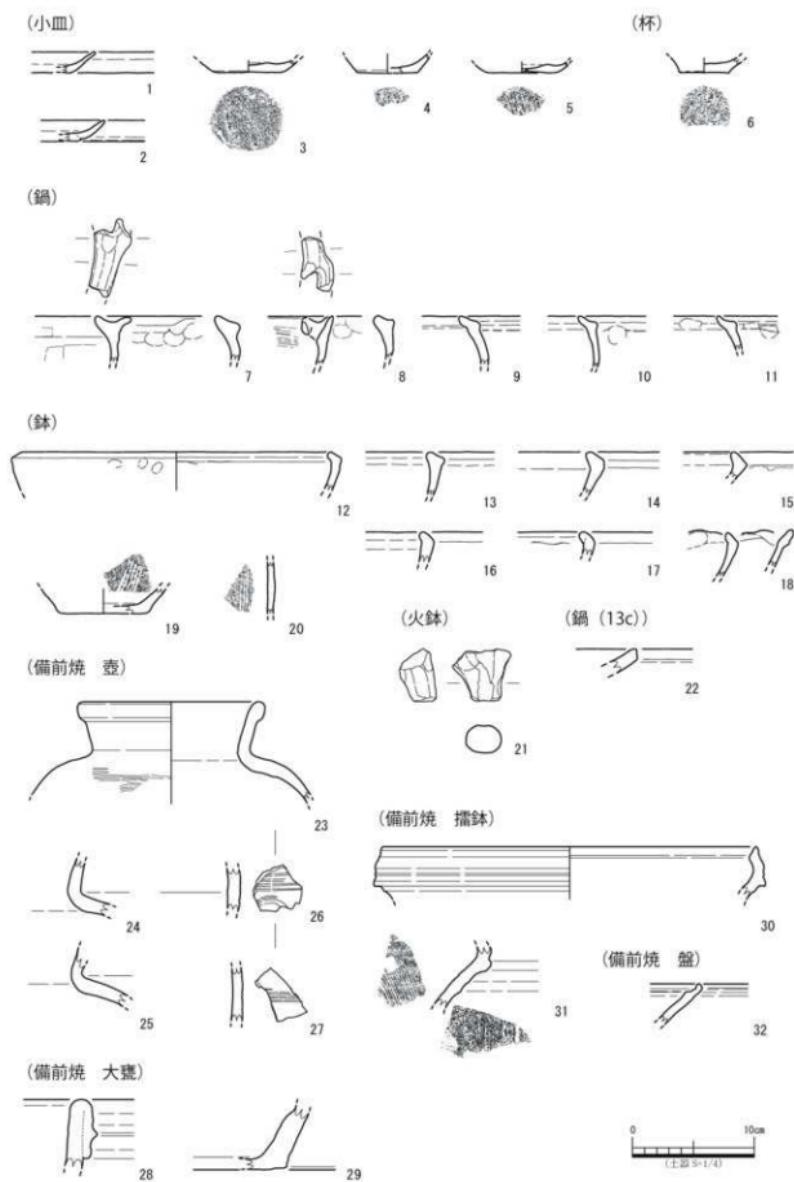
れる。乗岡編年（乗岡 2017）の中世 5b～6a 期である。28、29 は大甕である。28 は口縁部帯に多条回線が形成されることから、乗岡編年の中世 6a 期である。30、31 は擂鉢である。口縁部帯に 2 条の回線が形成されることから、乗岡編年の中世 6b 期である。32 は盤（大皿）である。口縁部端が丸くつまみあげられ、内面に強いナデがみられる。備前焼の盤は天正年間に新しく登場した器種で、乗岡編年の近世 I b 期のものとみられる。

33～38 は中国産陶磁器である。33 は龍泉窯系青磁碗で蓮弁文が施されている。細線と剣頭により蓮弁の単位が意識されていることから、上田編年（上田 1982）の B-IV 類である。34 は景德鎮系染付碗である。35、36 は景德鎮系染付碗又は皿の口縁部で端反りである。37 は景德鎮系白磁碗又は皿の口縁部で端反りである。38 は景德鎮系青磁碗又は皿の口縁部である。

39 は砾石である。石材は頁岩と思われる。

40～46 は金属器である。40 は小柄である。41～44 は鉄釘で断面は長方形状である。45 は飾り金具である。花弁形を呈し、中央には 2mm × 16mm の孔がある。一部に緑青が吹いていることから青銅製と考えられるが、両面ともに金色を呈しておりメッキ等の処理が施されている。土圧のためか真ん中で屈曲している。46 は端部に環をもつ釘状の製品である。

47～53 は古錢である。47 は治平元寶である。北宋錢で初鑄年は 1064 年である。48 は熙寧元寶である。北宋錢で初鑄年は 1068 年である。49 は紹聖元寶である。北宋錢で初鑄年は 1094 年である。4 箇所に方形の孔が開けられている。50 は□□元寶である。1 箇所に方形の孔が開けられていることから、49 と同じ紹聖元寶であると考えられる。51 は大觀通寶である。北宋錢で初鑄年は 1107 年である。52 は朝鮮通寶である。朝鮮王朝（李朝）によって鋳造された錢である。初鑄年は 1423 年である。53 は寛永通寶である。3 期のものであり、初鑄年は 1697 年である。



第3-8図 主郭出土遺物① (S=1/4)

カラー

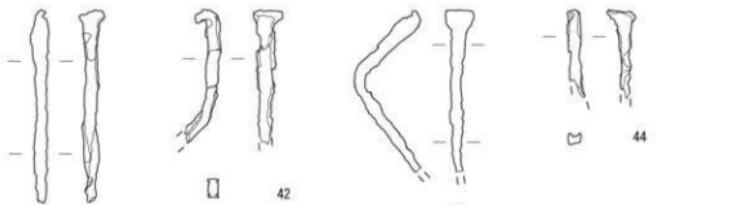
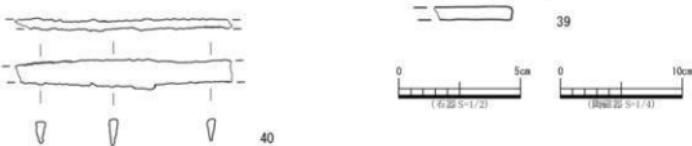
(中国産磁器)



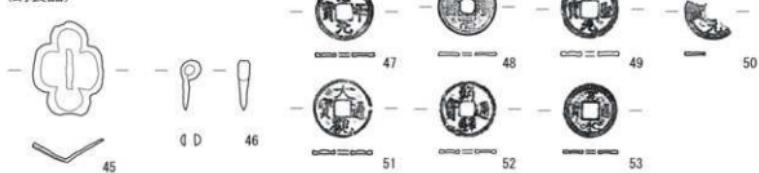
(砥石)



(鉄製品)



(銅製品)



第3-9図 主郭出土遺物② (S=1/4・1/2)

第2節 噉い違い虎口

噉い違い虎口の現況（第3-10図）

噉い違い虎口は主郭北側の入口であり、主郭を囲む土星の食い違いによって形成される。主郭土星の頂部は虎口付近で幅が広くなる。噉い違い虎口を形成する南側の鉤状土星は高さ約0.7～1mで、頂部の幅は約0.7mである。ただし、虎口付近になると頂部の幅が約3mに広がる。北側の土星は高さ約1～1.2mで、頂部の幅は約3mである。主郭土星の頂部の幅は基本的に約0.5～0.7mだが、北側部分のみ幅が広くなる。これは、北側から攻められた場合、主郭を守る最後の防衛線となるため、頂部に櫓などの構造物を築くことが想定される。主郭の外側には東に東西方向の横堀状の段を設けて直線的に進入されることを防ぎ、曲輪Vからのみ主郭へ入ることができる。

発掘調査の目的

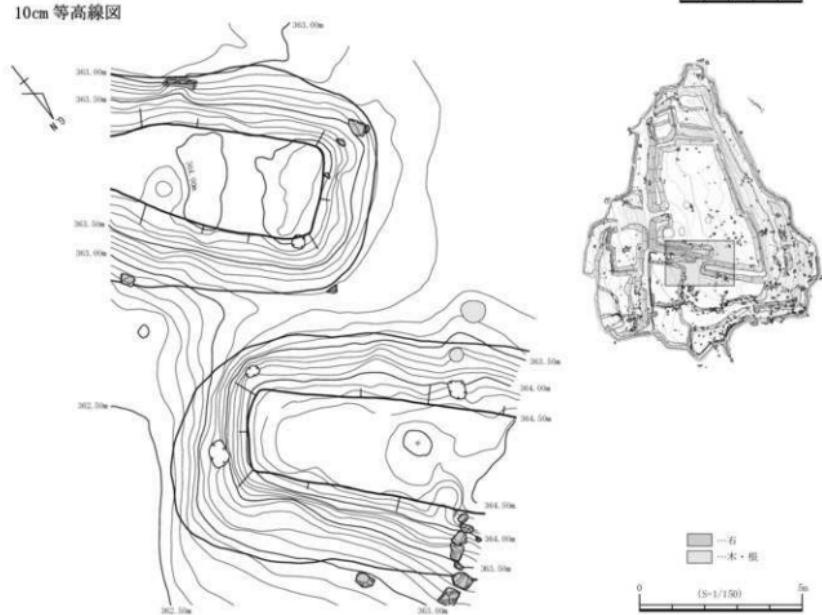
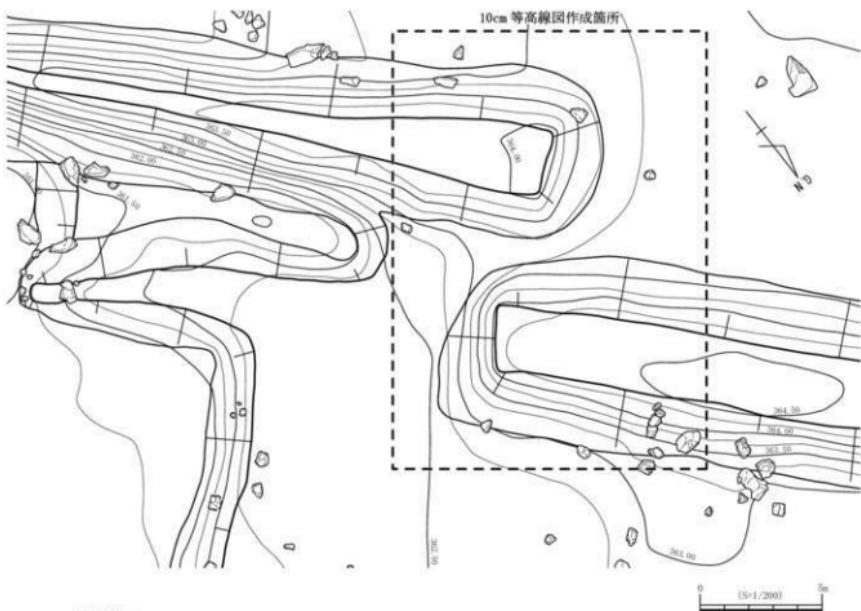
噉い違い虎口に関連する遺構、特に門について検討することを目的として調査を行った。土星の頂部及び裾部に柱を据えるような門又は櫓を想定し、門に関連する遺構の有無の確認、そして門があった場合は配置・規模を明らかにするためのトレンチを設定し、発掘調査を実施した。

調査の手順としては、まず10cm間隔の等高線図を作成した（第3-10図）。その結果、噉い違い虎口部分で曲輪Vから主郭に向かって0.7mほど高くなり、道が傾斜していることが明らかになった。次に虎口を形成する土星の頂部に遺構があるか確認した。そして土星裾部（立ち上がり部分）を確認するため、城道を横断するように幅1mの土星断ち割りトレンチを設定した。これは、土星の土砂が流れて築城当時の土星裾部が埋没していると想定したためである。築城当時の土星裾部を確認した後に、土星の頂部及び門が建つ可能性がある場所を網羅するよう北側・南側両土星裾部にトレンチを設定（第3-11図）し、発掘調査を行った。

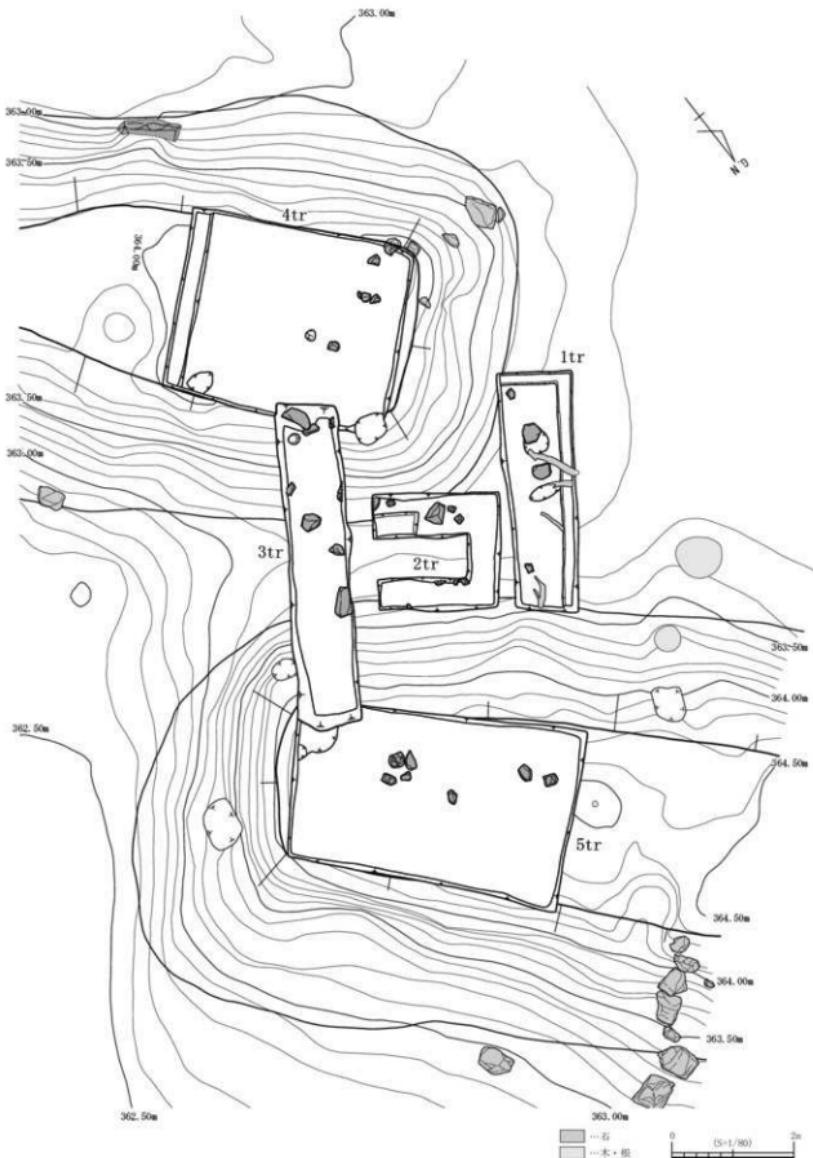
発掘調査の成果（第3-11～13図）

南側の土星頂部に東西3.7m、南北3mのトレンチ（4トレンチ）を、北側の土星頂部に東西4.6m、南北3mのトレンチ（5トレンチ）を設定して発掘調査を行った。表土を剥いで遺構面を検出したが、どちらのトレンチからも遺構は確認されなかった。遺物は土師質土器が数点出土した。

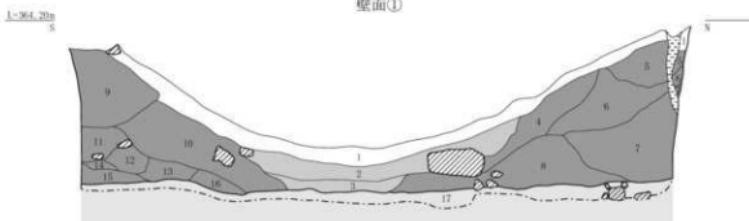
土星及び城道を断ち割った3トレンチ（幅1m、長さ5.2m）の断面から、築城当時の土星裾部の位置が判明した。土星を構成する土は地山起源の黄褐色礫を多量に含むことから、土星は曲輪築造などで削平した地山の土を盛り上げて造成したと想定される。また、土星の築造方法は版築のように突き固めた強固なものではなく、単に土を盛ったのみであることが明らかになつた。そのため土星から土砂が流れやすく、当時は幅0.8mだった城道が、現在では幅約1.3mと広くなっている。土星から土が流れ、土星の傾斜が緩やかになり城道が広がつたと理解できる。また、3トレンチ西壁をみると、当時の城道は現在よりも約0.4m低い。土星に挟まれた城道は、土星からの流水によって高くなっている。そのため、現在やや傾斜している噉い違



第3-10図 噛み違い虎口測量図 (S=1/200・1/150)



第3-11図 噴い違い虎口トレンチ配置図 (S=1/80)



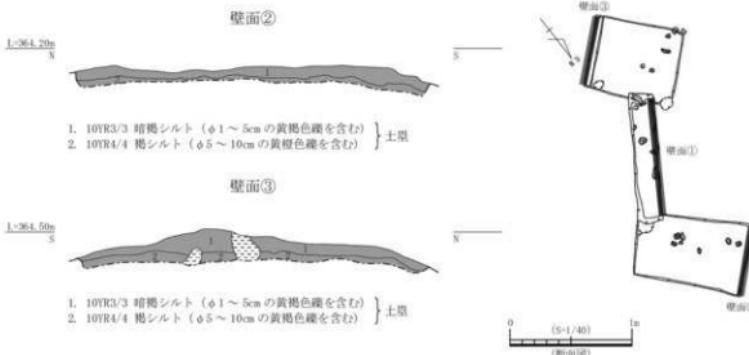
1. 表土
 2. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト ($\phi 1 \sim 3\text{cm}$ の黄褐色礫を含む)
 3. 10YR4/2 灰黄褐色シルト ($\phi 3 \sim 5\text{cm}$ の黄褐色礫を含む)
 4. 10YR4/2 灰黄褐色シルト ($\phi 1 \sim 5\text{cm}$ の黄褐色礫を含む)
 5. 2.5Y5/2 喷灰黄褐色シルト ($\phi 1 \sim 5\text{cm}$ の黄褐色礫を多量に含む)
 6. 10YR4/2 灰黄褐色シルト ($\phi 1 \sim 5\text{cm}$ の黄褐色礫を含む)
 7. 10YR4/2 にぶい黄褐色シルト ($\phi 1 \sim 5\text{cm}$ の黄褐色礫を含む)
 8. 10YR3/2 喷褐色シルト ($\phi 1 \sim 5\text{cm}$ の黄褐色礫を含む (粘性強))
 9. 2.5Y5/2 喷灰黄褐色シルト ($\phi 1 \sim 5\text{cm}$ の黄褐色礫を多量に含む)
 10. 10YR4/2 灰黄褐色シルト ($\phi 1 \sim 3\text{cm}$ の黄褐色礫を少量含む)
 11. 10YR3/2 黒褐色シルト ($\phi 1 \sim 3\text{cm}$ の黄褐色礫を少量含む)
 12. 10YR3/2 黑褐色シルト (粘性強, 繊まりが強)
 13. 10YR2/3 黑褐色シルト (粘性強)
 14. 10YR3/2 黑褐色シルト ($\phi 1 \sim 3\text{cm}$ の黄褐色礫を含む, 繊まりが強)
 15. 10YR4/2 灰黄褐色シルト ($\phi 0.5 \sim 1\text{cm}$ の黄褐色礫を少量化)
 16. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト ($\phi 0.5 \sim 1\text{cm}$ の黄褐色礫を少量化)
 17. 10YR4/2 灰黄褐色シルト ($\phi 3 \sim 10\text{cm}$ の黄褐色礫を多量に含む)

土壌の底土
 ■—土壌
 ■—土壌の底土
 □—堆山
 ▨—石
 └—木・根

土壌

堆山

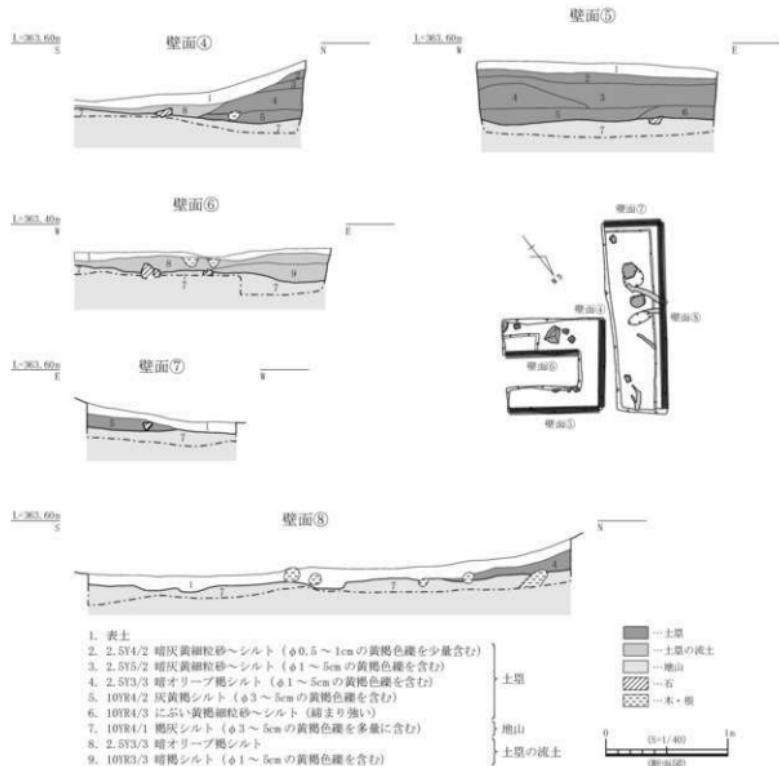
地山



第3-12図 噴い違い虎口トレンチ断面図① (S=1/40)

い虎口の入口（外から入った場合）は、現在よりも傾斜が緩やかだったと考えられる。

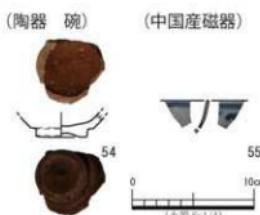
また、主郭土壌の裾部には長さ0.3～1m程度の石が点在しており、3トレンチでも認められる。石を並べて配置された箇所は認められないが、これらは土壌を築く際に土留めとして意図的に置かれたものと考えられていた。この点について検討してみる。まず、3トレンチで検出した土壌裾部の長さ0.3～0.5mの石は、土層図をみると地山に直接置かれたものではないことがわかる。また、1～3トレンチや2次調査I-2トレンチをみると、土壌裾部の石は列



第3-13図 噙い違い虎口トレング断面図② (S=1/40)

状に並べられておらず、点的に分布している。それらの石は大きさが様々で、土壌内部においても同様な大きさの石が各層から検出されている。さらに、土壌据部に分布する石は、外周土壌に伴う石積みの基底部のように、長辺が土壌に対し平行になるように配置されていない。このことは、石が意図的に配置されたものではないことを示すと考えられる。

以上の状況から、土壌を盛り上げる最中に土に混じった石が据部に転落したと考えられ、主郭を廻る土壌の据部にある石の多くは意図的に置かれたものではないと考えられる。



第3-14図
噙い違い虎口出土遺物 (S=1/4)

えられる。

土壘裾部に設定した1トレンチ（幅1.2m、長さ4m）及び2トレンチ（コ字形）でも遺構は検出されなかった。遺物は土師質土器片や陶磁器片が数点出土した。

出土遺物（第3-14図）

54, 55は表土及び土壘の流土から出土した。54は瀬戸・美濃系陶器の天目茶碗の底部である。高台周辺は薄い錆軸が付着している。55は中国産磁器の景德鎮系染付碗又は皿の口縁部である。

第3節 平虎口

平虎口の現況（第3-15図）

平虎口は主郭東側の入口であり、主郭を囲む鉤状土堀と直線的な土堀によって形成される。喰い違い虎口と同様に、土堀の頂部は虎口付近で幅が広くなる。平虎口を形成する北側の鉤状土堀は高さ約1.2～1.5mで、頂部の幅は約0.6mだが、虎口付近になると頂部の幅が約3mに広がる。南側の土堀は高さ約1.2mで、頂部の幅は約0.6mだが、虎口付近になると頂部の幅が約0.6mから約3mに広がる。

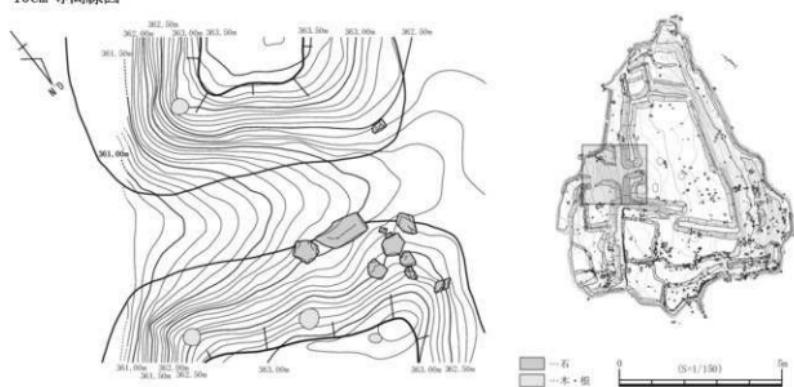
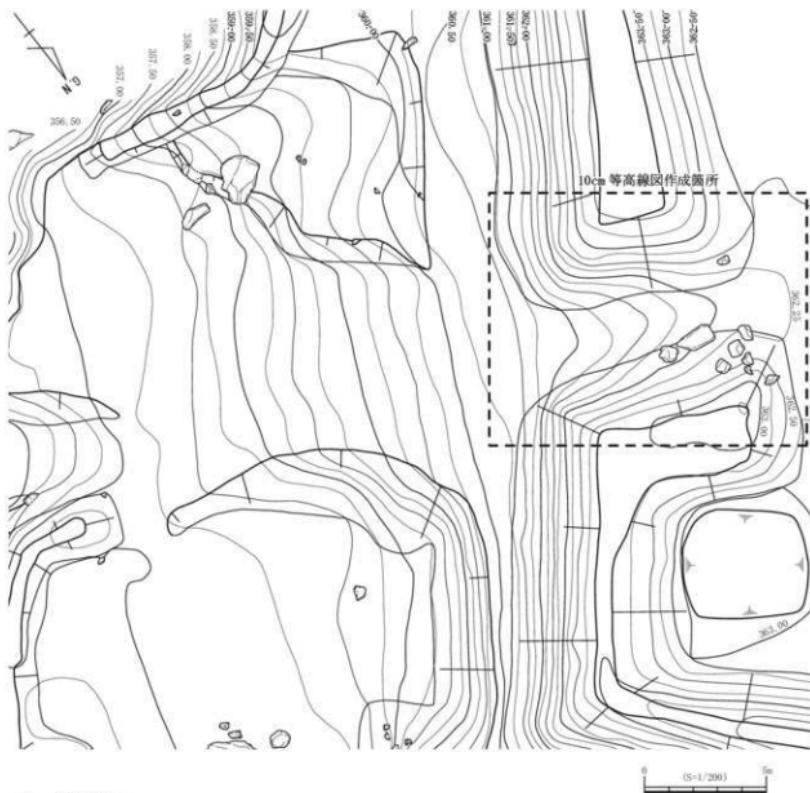
虎口の外側には、前面に幅約8m、長さ15mの傾斜した空間（幅広の道）があり、傾斜面を登りながら直進して主郭へ入ることができる。一見すると単純な構造の平虎口であるが、中井氏が「平虎口は、門という施設のあり方だけで評価すると単純な出入り口でしかないが、曲輪の星線、城道、建物などを含めて分析しなければ、その機能を判断することはできない」と指摘しているように（中井2014）、前面の空間を含めた虎口空間に対して曲輪や土堀がどのような配置・形状をしているかを考える必要がある。以上の観点で、城の虎口から主郭の虎口へ向かう道を含めてみてみよう。城の虎口から入城すると南西に直進する。すると、西に一度曲がり主郭前面の空間に入る。この折れの部分には、曲輪Iの東側土堀が張り出すように折れており、城道に対して横矢が掛けられるようになっている。主郭前面の空間に入ると、北は曲輪I、南はやや平坦な曲輪2段と帶曲輪、西は主郭の土堀という多方向からの横矢が可能となっている。以上を考慮すると、虎口空間として堅固な防御機能を有しているといえるだろう。

発掘調査の目的

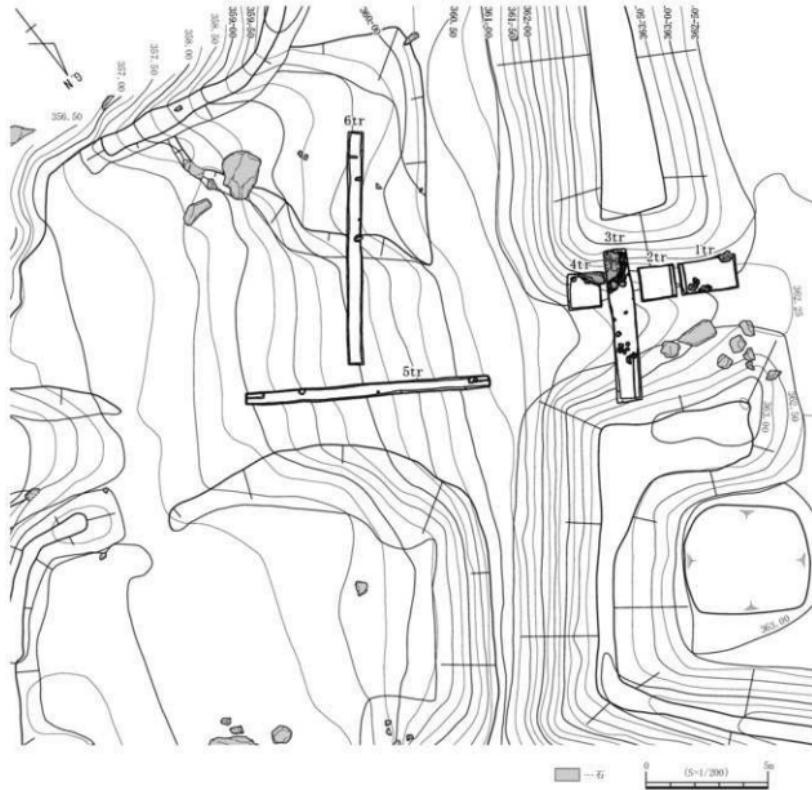
喰い違い虎口と同様に、平虎口に関連する遺構、特に門について検討することを目的として調査を行った。門に関連する遺構の有無の確認、そして門があった場合は配置・規模を明らかにするためトレンチを設定し、発掘調査を実施した。

調査の手順としては、まず10cm間隔の等高線図を作成した（第3-15図）。その結果、虎口部分の城道は主郭に向かって上がるよう傾斜しており、10mの長さで1.4m高くなることが明らかになった。そして虎口を形成する土堀裾部（立ち上がり部分）を確認するため、城道を横断するように幅1mの土堀断ち割りトレントを設定した。これは、土堀の土砂が流れ築城当時の土堀裾部が埋没していると想定されるためである。築城当時の土堀裾部を確認した後に、北側の土堀裾部は長さ1m以上の巨大な安山岩が多数露出しておりトレントを設定することが難しかったため、門が建つ可能性がある場所を網羅するように南側の土堀裾部にトレントを設定し、発掘調査を行った。

また、平虎口前面の傾斜地についても調査を行った。前述したように、平虎口前面の傾斜地は横矢が掛かる堅固な防御機能を有する構造であることがわかる。ただし、平虎口前面の傾斜地は幅が8mもあり、勝賀城内の城道と比較すると幅が広すぎる。したがって後世の改変により築城当時よりも幅が広がった可能性が想定されたため、東西と南北に断面を確認するためのトレントを設定し発掘調査を行った。



第3-15図 平虎口測量図 ($S=1/200 \cdot 1/150$)

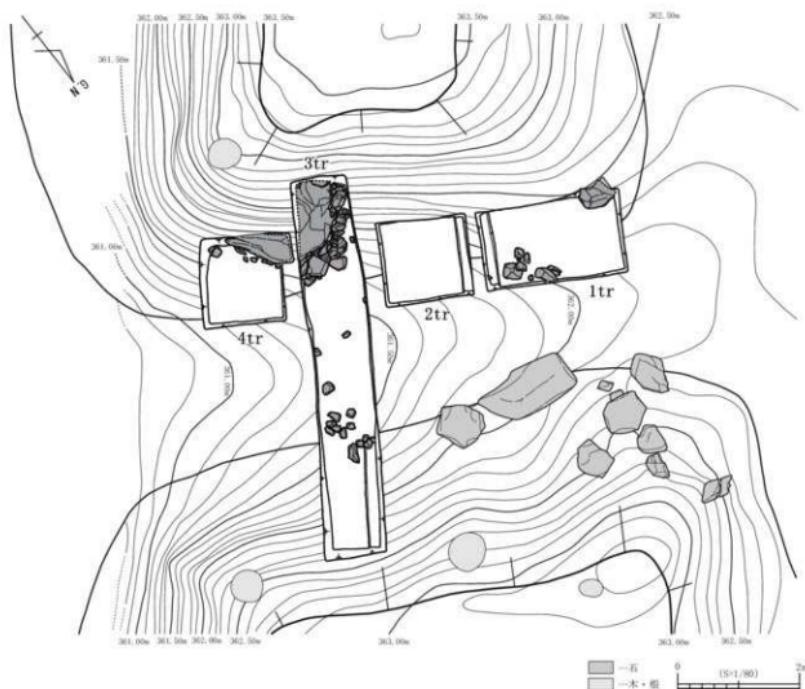


第3-16図 平虎口トレーニング配置図① (S=1/200)

発掘調査の成果（第3-16, 17, 19～22図）

土壘及び城道を断ち割った3トレーニング（東西1m、南北6.2m）の断面から、築城当時の土壘部の位置が判明した。喰い違い虎口と同様に、土壘を構成する土は地山起源の黄褐色礫を多量に含むことから、土壘は削平した地山の土を盛り上げて造成したと想定される。虎口部分の城道は現在幅約2.5mだが、築城当時は現在よりやや狭く幅約2.2mであったことが明らかになった。

南側土壘の裾部に設定した1トレーニング（東西2.4m、南北1.3m）、2トレーニング（東西1.5m、南北1.4m）、4トレーニング（東西1.4m、南北1.5m）で遺構は検出されなかった。3、4トレーニングでは巨大な安山岩の露岩を検出した。元来存在した巨大な露岩を土壘端部に土留めとして利用している。このような露岩の利用方法は外周土壘においても認められる。盛土部分に土留



第3-17図 平虎口トレンチ配置図② (S=1/80)

(鹽 (10~12c))

(土釜 (10~12c))

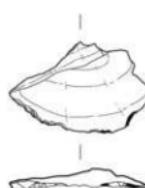


56



57

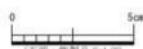
(スクレイバー)



(鉄製品)

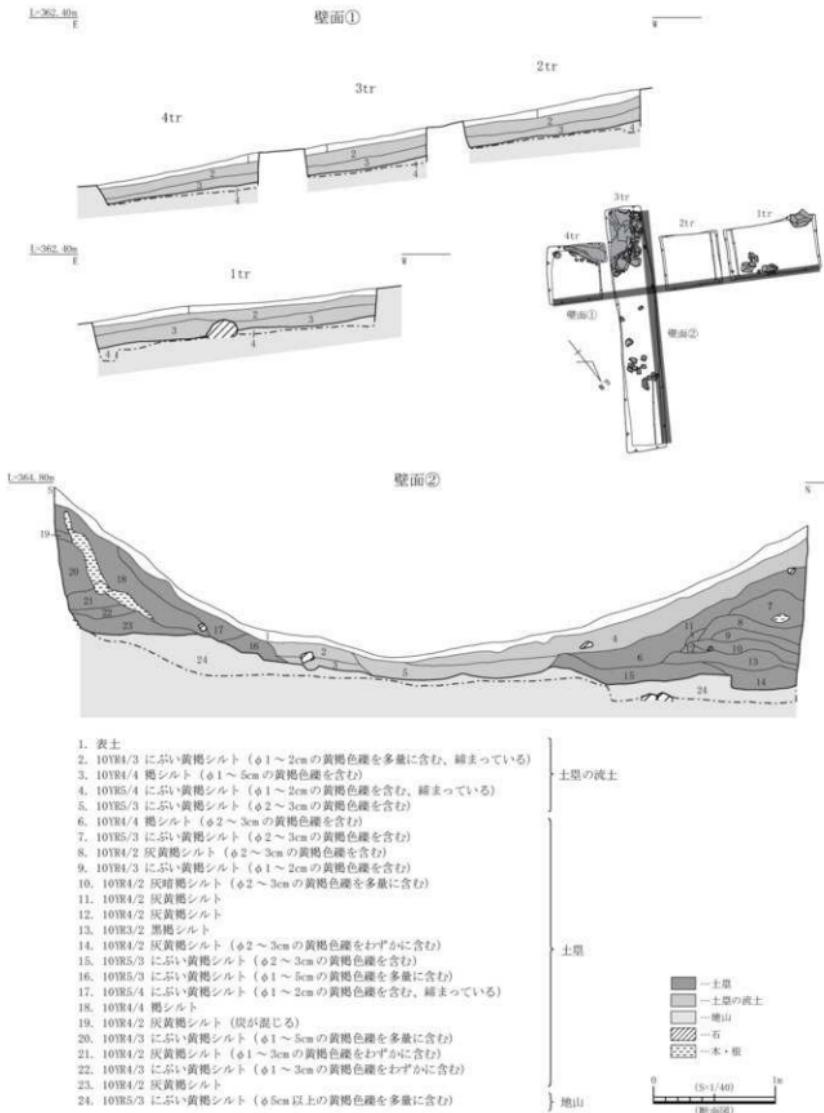


58



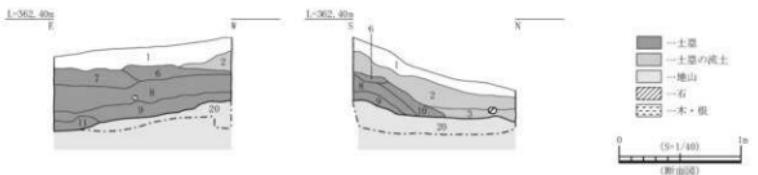
59

第3-18図 平虎口トレンチ出土遺物 (S=1/4・1/2)

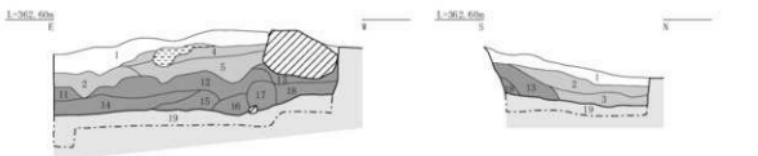


第3-19図 平虎口トレーニング断面図① (S=1/40)

壁面③



壁面④

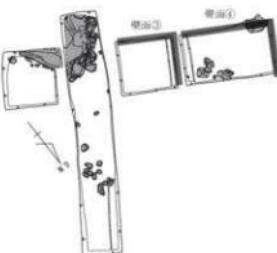


1. 表土
 2. 10YR1/3 にぶい黄褐色シルト ($\phi 1 \sim 2\text{cm}$ の黄褐色縫を多量に含む)
 3. 10YR4/4 暗シルト ($\phi 1 \sim 5\text{cm}$ の黄褐色縫を若干含む)
 4. 10YR4/2 灰黄褐色シルト ($\phi 1 \sim 5\text{cm}$ の黄褐色縫を若干含む、粘質)
 5. 10YR4/2 反黄褐色シルト ($\phi 1 \sim 5\text{cm}$ の黄褐色縫を若干含む)
 6. 10YR4/2 灰黄褐色シルト ($\phi 1 \sim 2\text{cm}$ の黄褐色縫を多量に含む)
 7. 10YR4/2 灰褐色シルト ($\phi 1 \sim 2\text{cm}$ の黄褐色縫をわずかに含む)
 8. 10YR3/2 黒褐色シルト
 9. 10YR3/2 黒褐色シルト ($\phi 1 \sim 3\text{cm}$ の黄褐色縫を若干含む)
 10. 10YR4/4 暗シルト
 11. 10YR4/2 反黄褐色シルト (締まっている)
 12. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト ($\phi 1 \sim 5\text{cm}$ の黄褐色縫を多量に含む)
 13. 10YR4/4 暗シルト ($\phi 1 \sim 2\text{cm}$ の黄褐色縫をわずかに含む)
 14. 10R3/3 暗褐色シルト
 15. 10R3/3 暗褐色シルト ($\phi 1 \sim 3\text{cm}$ の黄褐色縫をわずかに含む)
 16. 10YR4/2 反黄褐色シルト ($\phi 1 \sim 5\text{cm}$ の黄褐色縫をわずかに含む)
 17. 10R3/2 黑褐色シルト ($\phi 1 \sim 5\text{cm}$ の黄褐色縫をわずかに含む)
 18. 10YR4/2 反黄褐色シルト ($\phi 1 \sim 5\text{cm}$ の黄褐色縫をわずかに含む)
 19. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト ($\phi 1 \sim 5\text{cm}$ の黄褐色縫を多量に含む)

土壌の底土

土壌

地山



第3-20図 平虎口トレング断面図② (S=1/40)

めとして安山岩を利用するという築造方法は、勝賀城跡の特徴の一つであるといえる。遺物は土師質土器片や瓦質土器片が出土した。

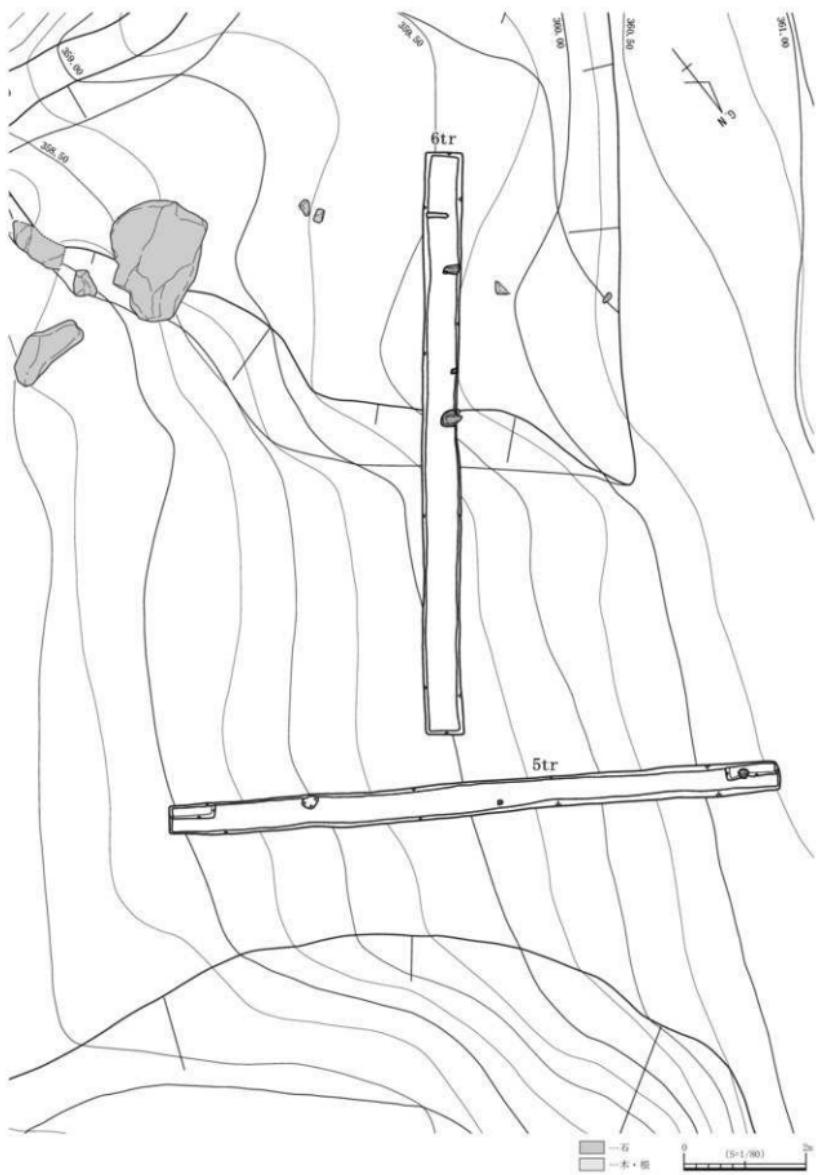
土星中からは土師質土器片や鉄釘片に加え、10～12世紀の土師質土器片や弥生時代のサヌカイト製石器及び剥片が数点出土した。これらの資料は、勝賀城跡が築城される前の勝賀山の利用を知る上で重要な資料となる。

虎口前面の傾斜地には東西に延びる幅0.5m、長さ10mの5トレングと南北に延びる幅0.6m、長さ9.5mの6トレングを設定して発掘調査を行った。平面及び断面をみると擾乱や大規模な造成の痕跡は全くみられず、傾斜地は削平によって形成されていることが明らかになった。現在残されている繩張りの城がつくられた時から現地形はほとんど変わっておらず、現在みられる繩張りは当時の様相を示していることがわかった。5、6トレングでは構造は検出されず、

遺物は土師質土器片や備前焼の大甕片、近世の陶磁器片が数点出土した。

出土遺物（第3-18図）

56～59は土塙中から出土したものである。56は古代後半～末（10～12世紀）の甕の口縁部である。端部がややつまみ上げられ、内面にはハケ目が施される。57は古代後半～末（10～12世紀）の土釜の鉗部である。58はスクレイパーである。石材はサヌカイトである。59は鉄釘で断面は長方形状である。



第3-21図 平虎口トレンチ配置図③ (S=1/80)

壁面⑤

1.360.00m
E



1.360.00m
E

46

壁面⑥



1. 売土
2. 1078.3 に於ける地質シート (φ1 ~ 5cmの異色層を含む) - 地山



第3-22 図 甲斐虎口トレンチ断面図③ (S=1/40)

第4節 曲輪I・II

曲輪I・IIの現況（第3-23図）

曲輪I・IIは主郭の東側で、主郭より約4m低い場所に位置する。曲輪Iは平虎口前面にある傾斜地の北にある曲輪で、曲輪IIは曲輪Iの北にある曲輪である。

曲輪Iの平面形は方形で東西約11m、南北約18mである。曲輪内の高さは356.75～357.25mで、最高所と最低所の高低差は約0.5mで比較的平坦で、曲輪内は西から東に向かって緩やかに低くなる。西と南は切岸、北と東は土星で囲まれた曲輪である。土星は東の切岸から派生するように延びており、土星頂部の幅は約0.5mである。土星の高さは北側の高いところで約1.0m、東側は低くなり約0.5mである。東側の土星には直角に近い折れがみられる。曲輪の中心には高さ2m以上の巨大な安山岩の露岩がある。

曲輪IIは曲輪I・IIをあわせた南北約52m、東西約18mの長方形状の曲輪から曲輪Iを除いた部分である。曲輪IIは西から東に向かって3段に分かれしており、曲輪内も西から東に向かって緩やかに低くなる。曲輪内の高さは355.75～357.75mで、最高所と最低所の高低差は約2mである。一段高い曲輪II-1は平面が不整形で、南北約15m、東西約2.5mである。曲輪II-1とII-2の境となる段の高さは約0.4～0.6mである。曲輪II-2は曲輪II-1とII-3に挟まれた部分である。曲輪II-2は平面が不整形な帯状で、曲輪Iの東まで延びている。南北は最大で約42.5m、東西は最大で約15mである。曲輪II-2の北端には巨大な安山岩の露岩が密集している。曲輪II-2とII-3の境となる段の高さは約0.2mである。一番低い曲輪II-3は平面が半円状で、南北約18m、東西約8.5mである。曲輪II-3の北端には壠状の落ち込みがみられるが、遺構の性格は不明である。曲輪IとIIの大きな違いは、曲輪内における平坦面の造成にみることができる。

発掘調査の目的

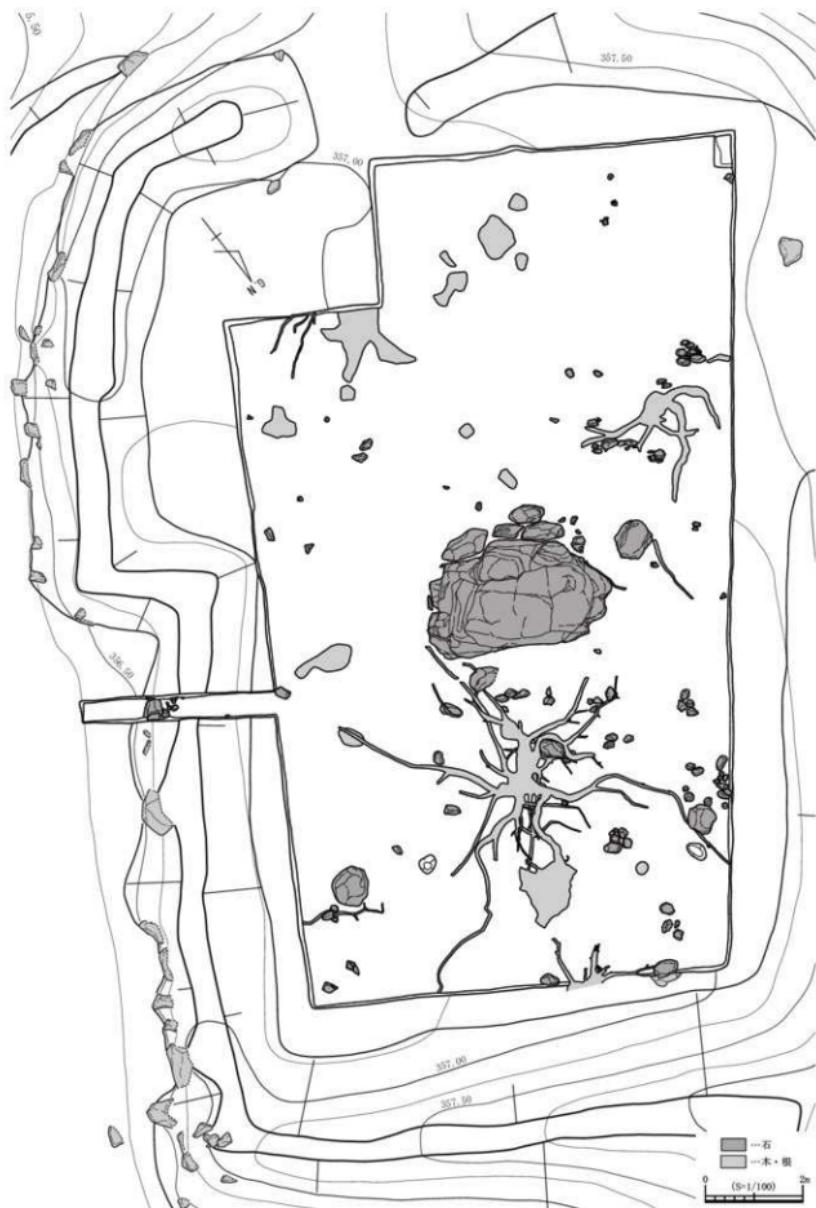
曲輪Iは主郭虎口に最も近く、大手の虎口から城内に入り主郭へ向かう城道に隣接している。また、曲輪も土星と切岸によって平面形は方形状に整形されており、土星には折れがみられ、曲輪内は平坦に近く造成されている。以上のことから、勝賀城跡において主郭に次いで重要な曲輪と想定される。一方、主郭の中心には巨大な安山岩の露岩が存在しており、丁寧に整形された曲輪内に露岩が放置されていることに違和感を覚える。また、主郭における発掘調査成果と他の曲輪内の調査成果を比較するため、城内の曲輪をいくつか全域旅游調査することとし、曲輪Iは対象の一つとした。

発掘調査の成果（第3-24～26図）

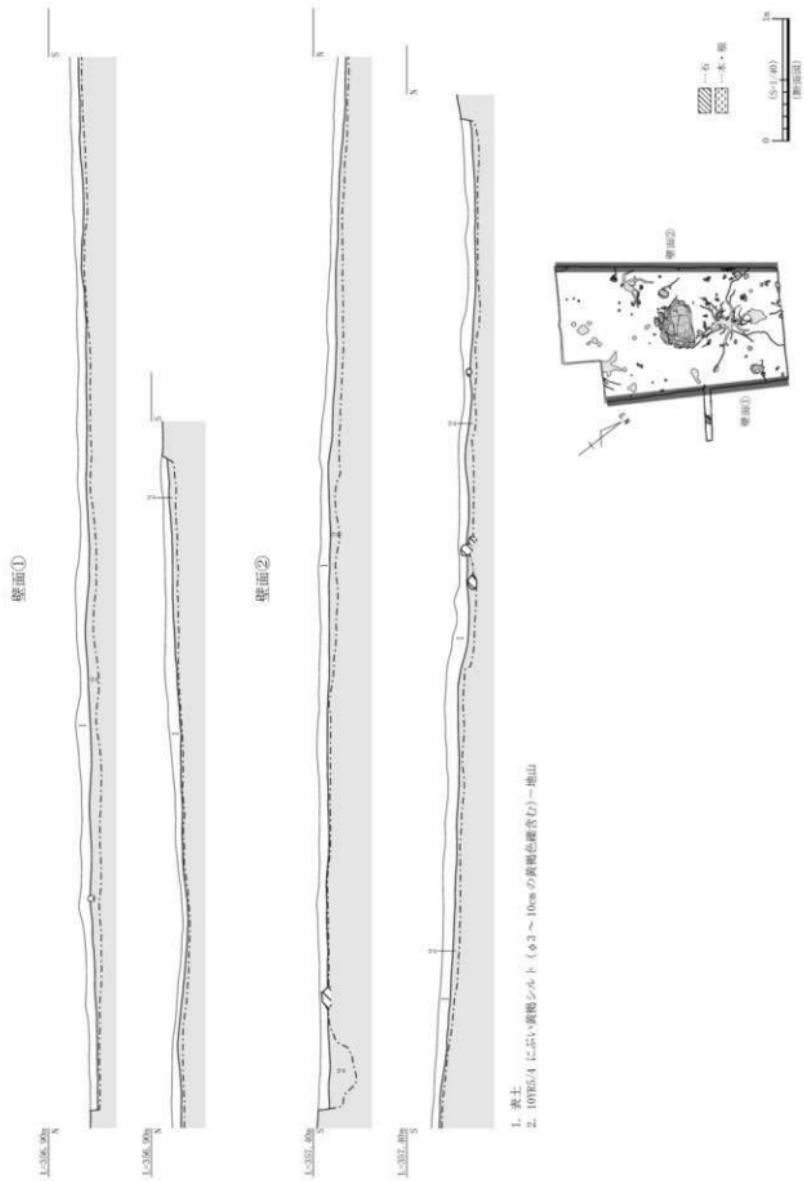
曲輪I内に南北約17m、東西約9～10mのトレーナーを設定し発掘調査を実施した。土層断面図を見ると、表土直下に地山である黄褐色風化縞を含むにぶい黄褐色シルトがみられ、地山上面が遺構面である。土坑を2基検出したが、断面が不整形で深さが0.05～0.15mと浅いこと、遺構が離れており相互に関連性がみられないことから、木の根などによる擾乱と考えられる。そのため、曲輪内において人為的な遺構は認められなかった。遺物は表土中又は地山上面



第3-23図 曲輪I・II測量図 (S=1/250)



第3-24図 曲輪I トレンチ配置図 (S=1/100)

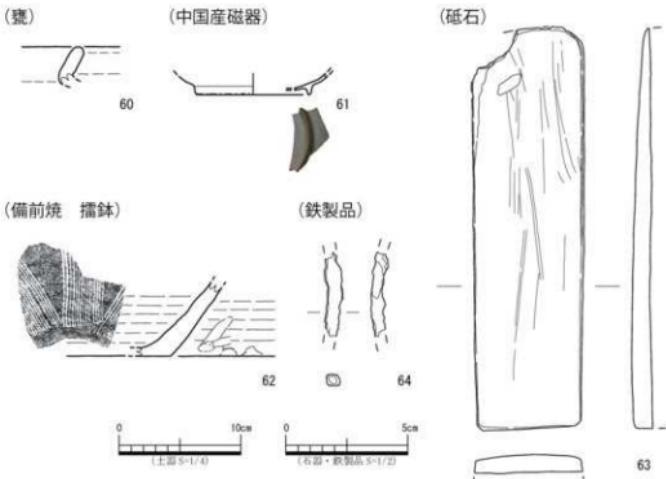


1
1/400
(Bf. 50m)

第3-26図 曲輪Iトレーンチ断面図② (S=1/40)



カラー



第3-27図 曲輪I トレンチ出土遺物 (S=1/4・1/2)

で出土した。土師質土器片や瓦質土器片、中国産陶磁器片、備前焼の大甕片が十数点出土した。

また、東側土壘の土層を明らかにするために幅約0.5m、長さ約4mのトレンチを土壘を断ち割るように設定し、発掘調査を実施した。土壘は地山起源の黄褐色礫を含む褐色シルト層である。そのため、土壘は削平した土をそのまま使用し、盛り上げて成形したもので、層状に土を撒きだし、突き固めを行うような丁寧な施工ではないことが明らかになった。また、土壘の南面基底部には石がある。この石は長辺を土壘に平行するように置かれており、周辺にも同様な石があるため、土壘の土留めとして配置された可能性がある。土壘中からは鉄釘片1点が出土した。

出土遺物（第3-27図）

60は土師質土器の甕の口縁部である。61は中国産磁器の景德鎮系白磁で、碗又は皿の底部である。高台は細く断面三角形状で高台疊付部分のみ露胎である。62は備前焼の擂鉢の底部である。14条1組の御目がみられる。東側土壘頂部にできた木の根による攪乱内で表採したため、土壘中に含まれた遺物の可能性がある。63は砥石である。長さ16.6cm、幅4.6cmの長方形形状で、裏面は剥離していて不明だが、横面も丁寧に研磨している。石材は頁岩と考えられる。使用痕がみられる。64は土壘中から出土した鉄釘片で、断面は長方形形状である。

第5節 曲輪III・IV

曲輪III・IVの現況（第3-28図）

曲輪III・IVは主郭の北東に位置する長方形状の曲輪で、主郭から約1m低い場所に位置する。中央の土壘により曲輪IIIと曲輪IVを南北に区画している。中央の土壘は曲輪Vから派生するように土壘が延び、北東端で折れて南に約6.5m延びる逆L字型を呈する。土壘の高さは西端が約0.7mで、東に延びるほど低くなり最終的に約0.1mになる。土壘の北面は安山岩が1～2段積まれて並べられており、石積みは土留めの役割を果たしている（第3-31図）。南面にも土留めの安山岩が数点みられるが北面ほどみられない。

曲輪III・IVの東端には東側の城道に沿って高さ約0.8～1mの安山岩の石積みがある（第3-30, 31図）。石材の大きさによって段数は異なるが1～3段ほど積まれており、南側には一部石積みが認められない箇所がある。

曲輪IIIは南北約19m、東西約15mの方形状の曲輪である。曲輪内の高さは360.75～361.5mで、最高所と最低所の高低差は約0.75mで比較的平坦である。曲輪内には安山岩の露岩が数点点在している。曲輪IIIと西に隣接する曲輪Vは切岸によって区画されており、比高差は約0.8～0.9mである。曲輪IIIの南側には喰い違い虎口の東側に横堀が開削され、横堀の北には曲輪Vから派生するように土壘が東西方向に約9.5m延びる。土壘の高さは西端が約0.6mで、東に向かうほど低くなり最終的に約0.2mになる。土壘の東側が曲輪IIIへの入口となつており、曲輪III・IVの東側にある南北の城道から南に回り込むような構造になっている。曲輪IIIの南部にはコ字形に安山石が一部積まれて並んでおり、上部に建造物等があった可能性が想定される。コ字形の石組みがある空間から約0.2m高くなり、曲輪IIIに入るようになっている。

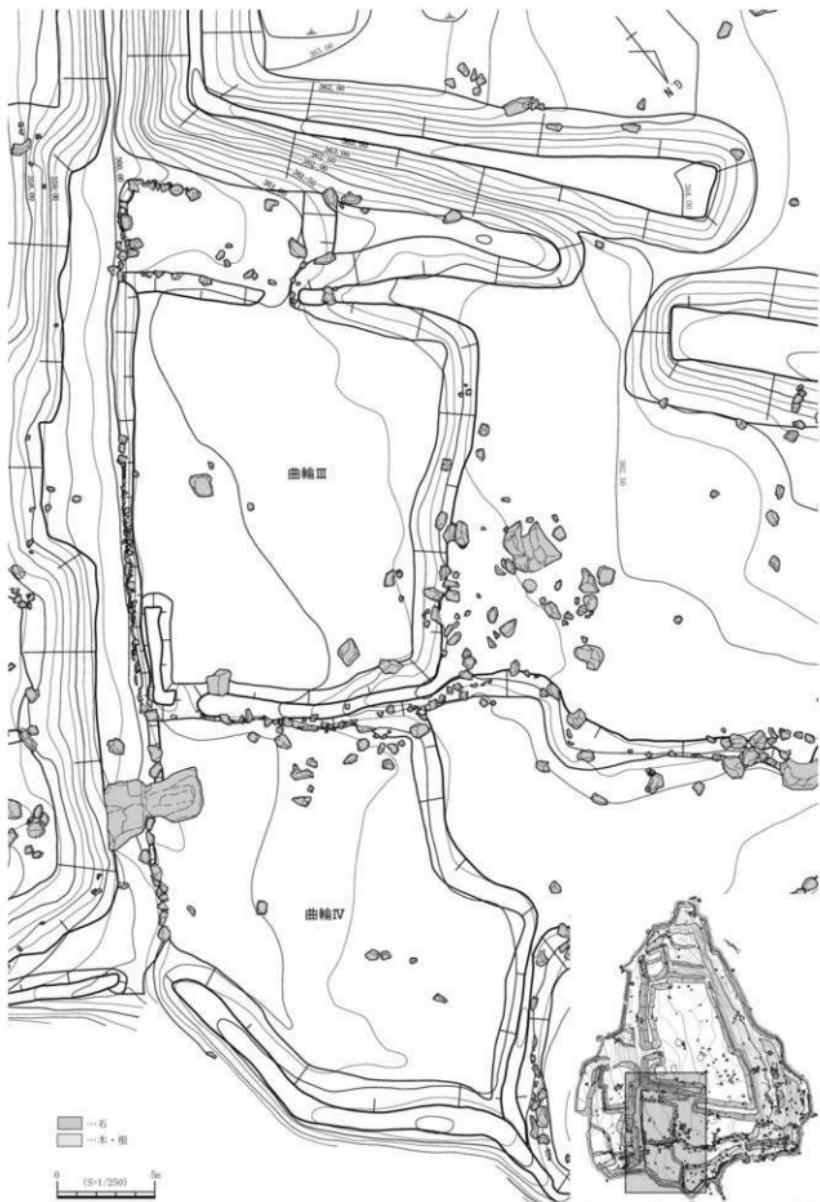
曲輪IVは南北約17.5m、東西約18.5mの七角形状の曲輪で、西に隣接する曲輪VIの張り出しや外周土壘によって方形がやや変形している。曲輪内の高さは360.25～361.00mで、最高所と最低所の高低差は約0.75mで比較的平坦である。曲輪内には安山岩の露岩が数点点在している。南側の外周土壘の高さは約0.4mで、頂部の幅は約1mである。土壘の内側に安山岩の石積みは現況では認められない。

発掘調査の目的

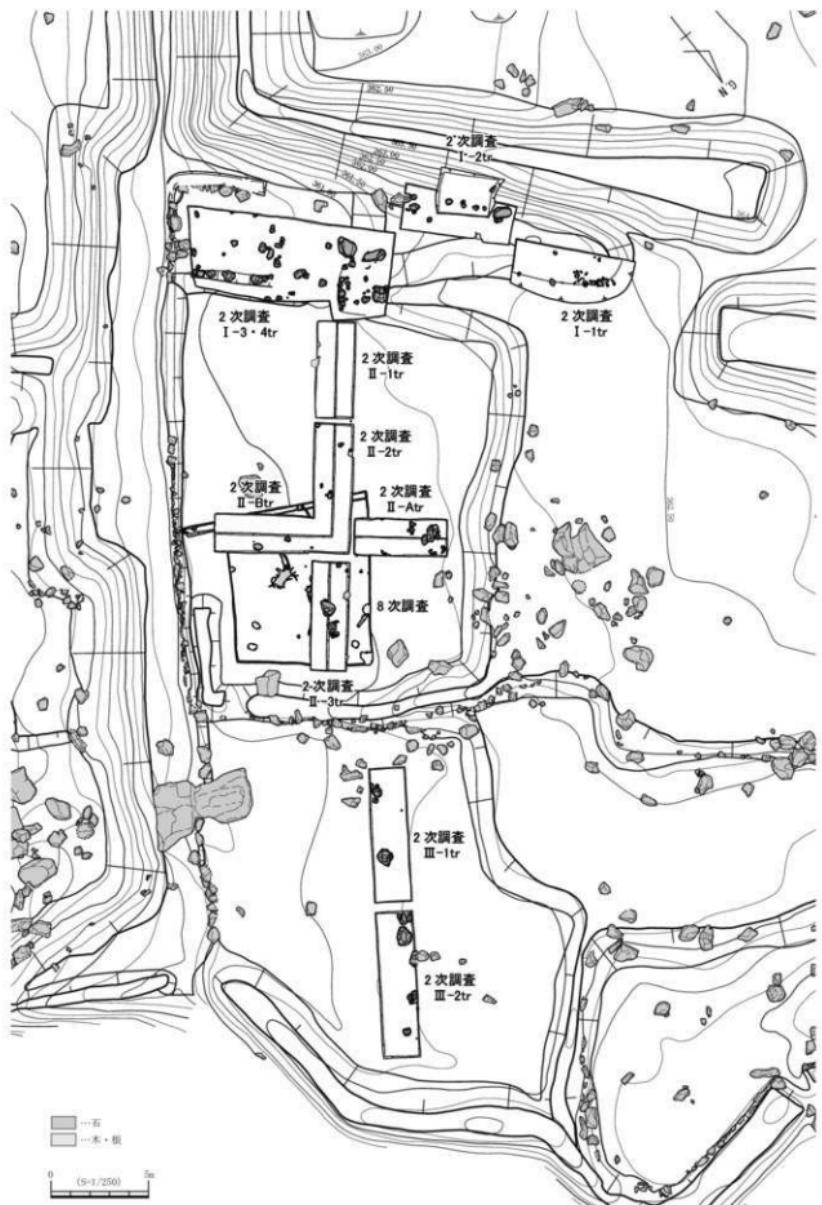
昭和54(1979)年度に行なった2次調査では、曲輪IIIが主郭に隣接しており、石積みや土壘を用いて方形に整えられた曲輪であることから、遺構の建築方法の解明や建造物跡などの遺構の検出、出土遺物からみた城跡の時期比定を目的としてトレーンチ設定及び発掘調査が行われた。2次調査で曲輪の東側が盛土で造成したことが判明したため、令和2(2020)年度に行なった8次調査では、盛土部分に対して広くトレーンチを設定し、下位の遺構面で遺構検出を行い、改修以前の遺構の検出を目的として発掘調査を行った。

2次調査の成果（第3-29, 32～36, 38, 39図）

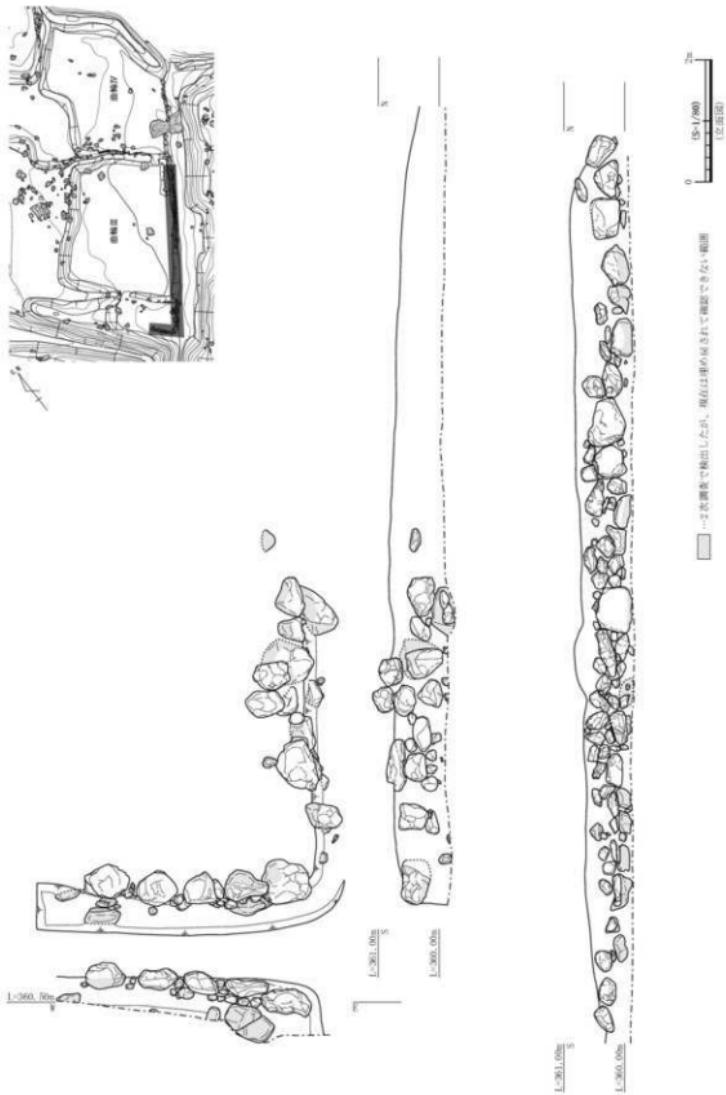
2次調査では、調査区を大きく3つに分けて調査を行った。以下、調査区ごとに成果を述べる。第I調査区は、曲輪IIIの南にある横堀内及びコ字形の石組み内である。



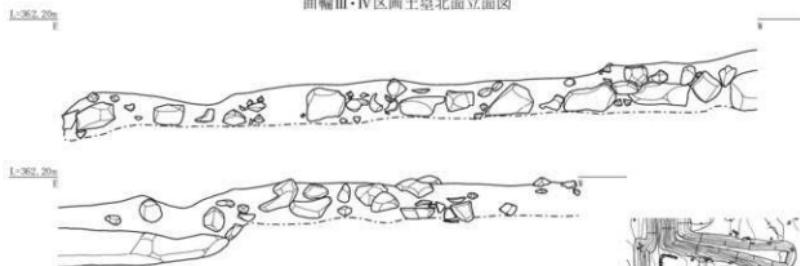
第3-28図 曲輪III・IV測量図 (S=1/250)



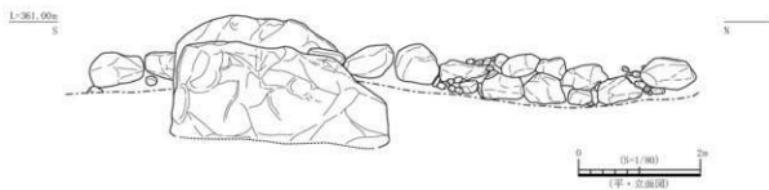
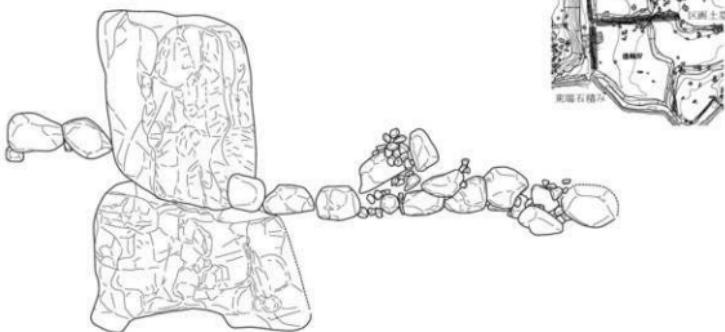
第3-29図 曲輪III・IVトレンチ配置図 (S=1/250)



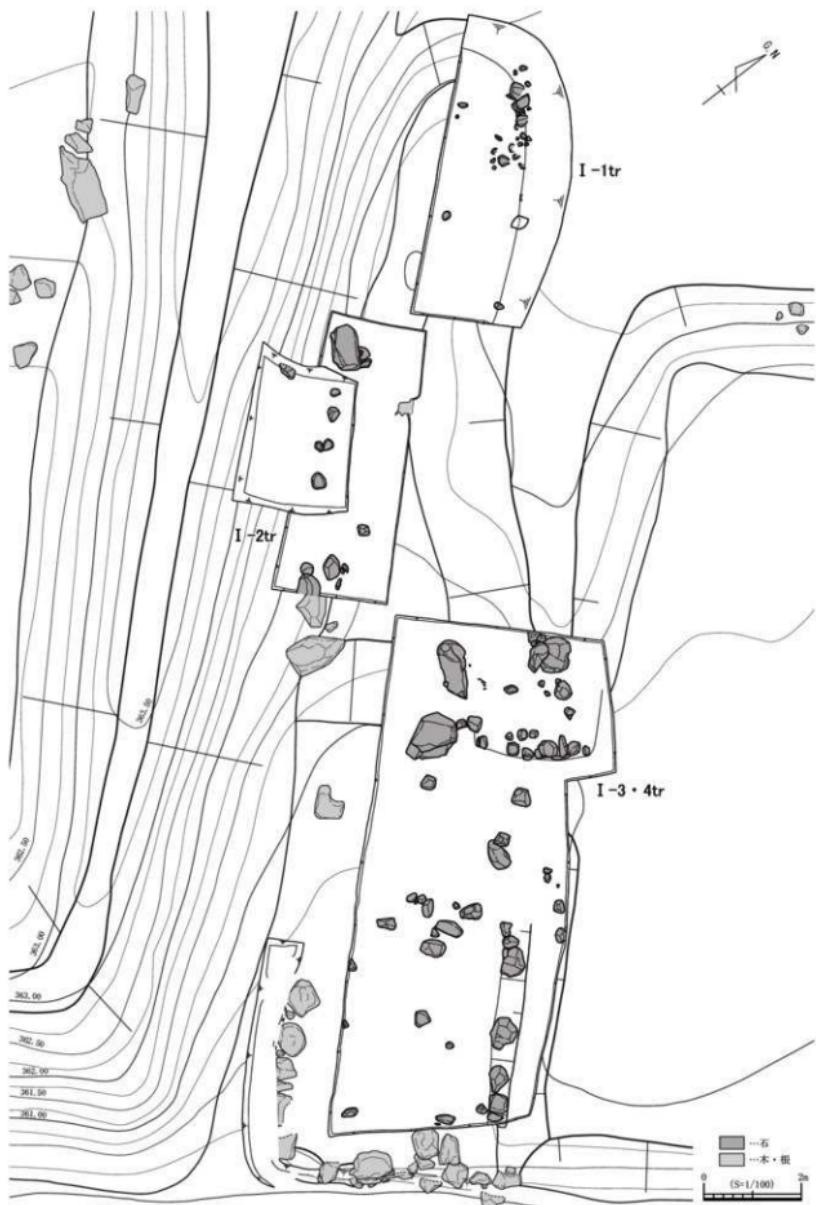
曲輪III・IV区画土塁北面立面図



曲輪IV東端石積み平面・立面図



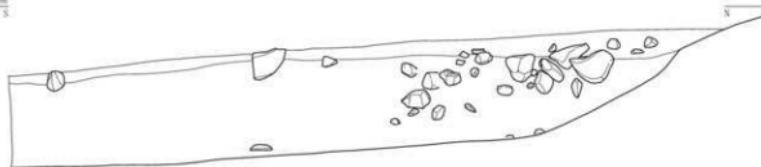
第3-31図 曲輪III・IV区画土塁立面図・曲輪IV東端石積み平・立面図 (S=1/80)



第3-32図 2次調査第I調査区配置図 (S=1/100)

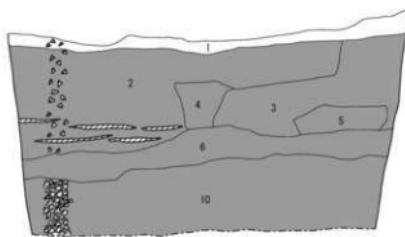
L-362, 40m
S

壁面①(立面図)



L-363, 40m
S

壁面②



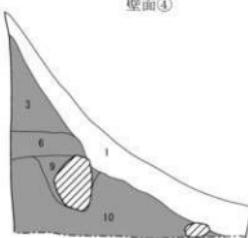
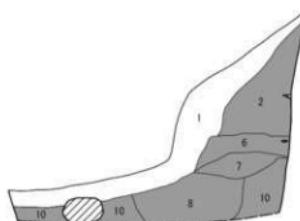
L-363, 40m
S

壁面③

L-363, 40m
S

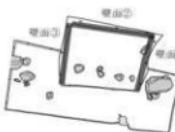
壁面④

N



1. 表土
2. 暗灰褐色土層
3. 暗褐色土層(礫を含まず)
4. 暗黒褐色土層
5. 暗茶灰褐色土層
6. 黒色粘質土層
7. 黑褐色土層
8. 暗茶褐色土層
9. 暗褐色粘質土層
10. 暗黄土層

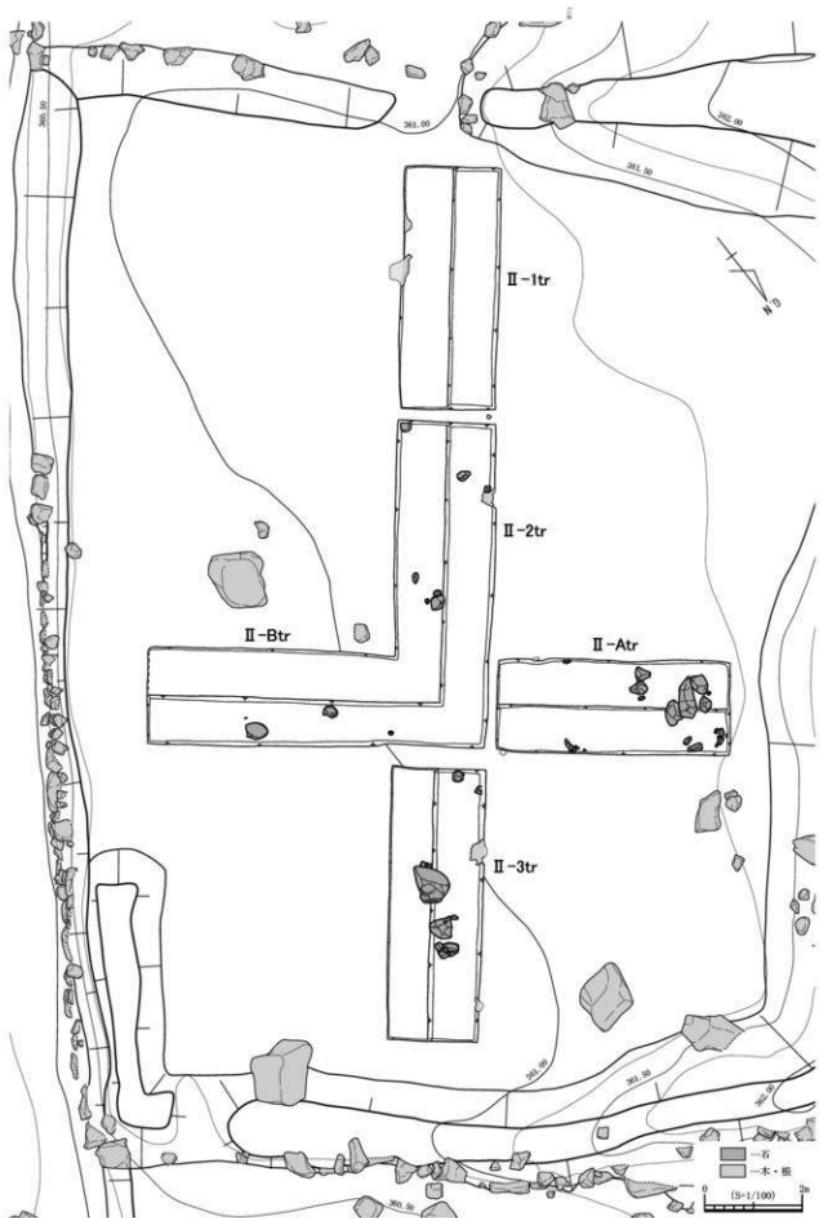
『勝賀城跡II』のマーカ記載



一土壤
…6

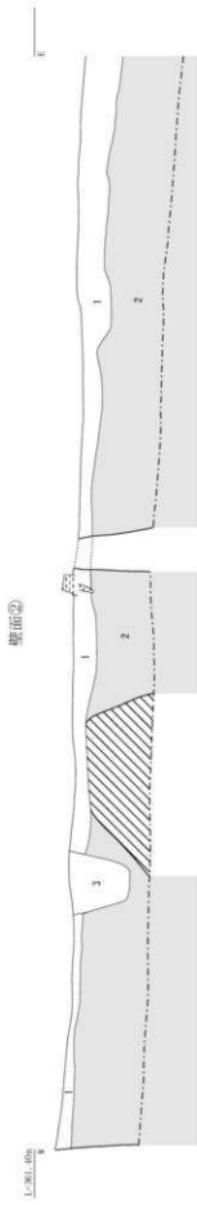
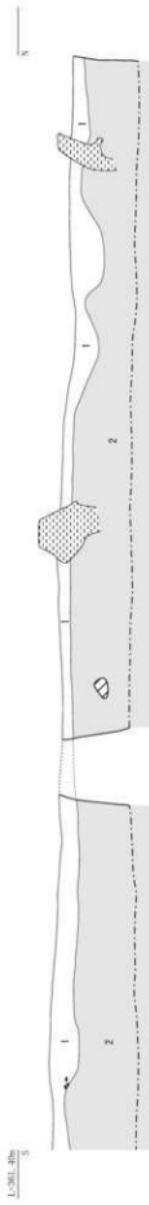
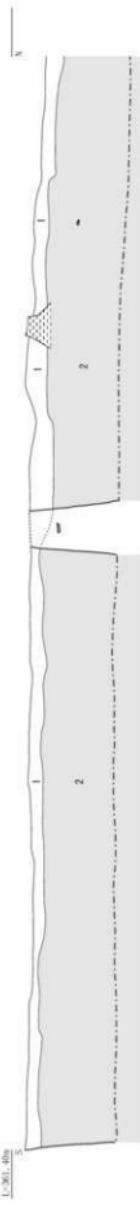
0 (S=1/40)
1m
(距離図)

第3-33図 2次調査第I調査区断面図 (S=1/40)

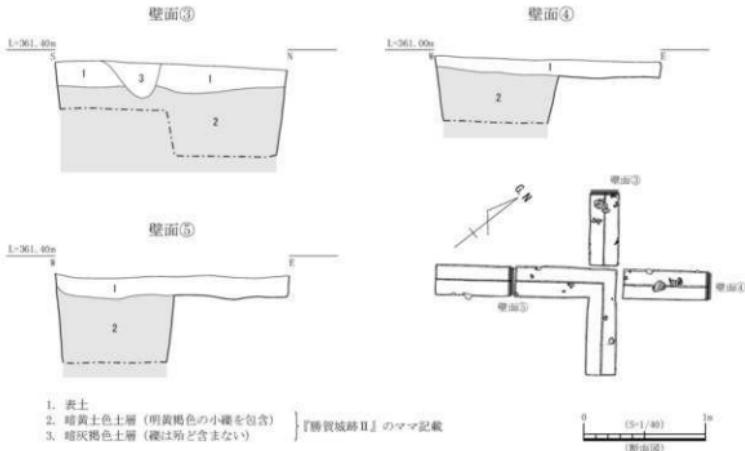


第3-34図 2次調査第II調査区配置図 (S=1/100)

壁面①



第3-35図 2次調査第II調査区断面図① (S=1/40)



第3-36 図 2次調査区断面図② (S=1/40)

I-1 トレンチは、北側上端部に散見していた拳大の安山岩群の性格を明らかにするため調査区を設定した。調査の結果、表土を除去すると遺構面である地山上面が認められた。遺構面では、安山岩は上端部を中心に検出されたが底部まで積まれた様子ではなく、堀底面にもあまり転落していなかった。全体として安山岩の分布はかなり疎で石積みの痕跡は認められなかつた。

I-2 トレンチは主郭土壘の崩落部を修復することも考慮にいれ、調査区を設定した。喰い違い虎口の調査区と同様に、土壘据部で飛び石状に長さ0.2～0.3mの安山岩を検出した。報告書では安山岩の位置から土留めとしての役割を想定しているが、一方でその大きさに土留めとしての役割が果たせるか疑義を呈している。喰い違い虎口でも認められたように土壘築造中の転石と考えられ、意図的に置かれたものではないと考えられる。

I-3・4 トレンチは曲輪Vから延びる土壘の築造方法とコ字形の石組み内の遺構を検出すことを目的として調査区を設定した。土壘東端部には安山岩が1～2石積まれており、土壘裾部に石積みが配置されていると想定したが、調査の結果、土壘先端部を防護するように存在していたのみであった。また、コ字形の石組み内に南北約4.5m、東西約7mの調査区を設定して調査したが、遺構は確認されなかつた。遺物は土師質土器が数点出土した。層序については、断面図を作成していないようであるため不明である。

第II調査区は、曲輪IIIの中央部に南北2m×17.5m、東西2m×11.5mの十字形のトレンチを設定した。土層断面図をみると、基本的には表土直下に黄褐色風化礫を含む暗黃土色土層の地山がみられ、地山上面が遺構面である。ただし、II-Bトレンチの東端から約4m西までは暗褐色粘質土層の盛土が認められ、暗褐色粘質土層上面が第1遺構面、その下層にある黄褐色風化礫を含む暗黃土色土層の地山上面が第2遺構面となる。曲輪東端の石積みが盛土の土留めとしての役割を果たしていると想定される。そのため、石積みが形成される曲輪IIIの北東部

は盛土で造成された可能性が高い。遺構は検出されなかったが、遺物は表土中又は地山上面で出土した。盛土内からも土師質土器片が出土した。

第III調査区は、曲輪IV中央部に幅2 m、長さ14.5 mのトレンチを南北に設定した。土層断面図をみると、表土直下に黄褐色風化礫を含む暗黄土色土層の地山がみられ、地山上面が遺構面である。遺構は検出されなかったが、遺物は表土中又は地山上面で土師質土器片が2点出土した。

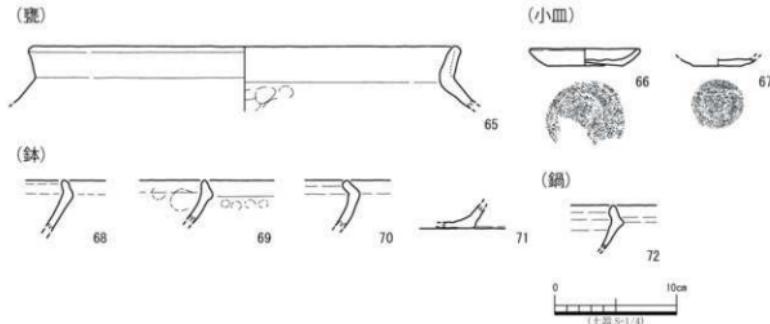
8次調査の成果（第3-40, 41図）

8次調査は、盛土部分下層の遺構確認を目的とするため曲輪IIIの東側にトレンチ設定を試みたが、南東部は大きな木が生えておりトレンチを設定することが困難だったため、北東部に南北長軸約8.8 m、南北短軸約7.4 m、東西約7 mの台形のトレンチを設定した。表土を除去し第1面の遺構検出を行った後に、北東隅に南北約4 m、東西約3.2 mの範囲を設定し盛土を掘り下げて第2面の遺構検出を行った。遺構検出の結果、第1・2面ともに遺構は検出されなかつた。遺物は表土や第1遺構面上面から土師質土器が数点出土したが、盛土や第2遺構面上面から遺物は出土しなかつた。

また、トレンチ南東端から東に幅約0.5 m、長さ約2.2 mのトレンチを延ばして石積み背面の堆積状況を確認した。石積み背面は栗石などの構造物はなく盛土のみであった。盛土内から遺物は出土しなかつた。

出土遺物（第3-37図）

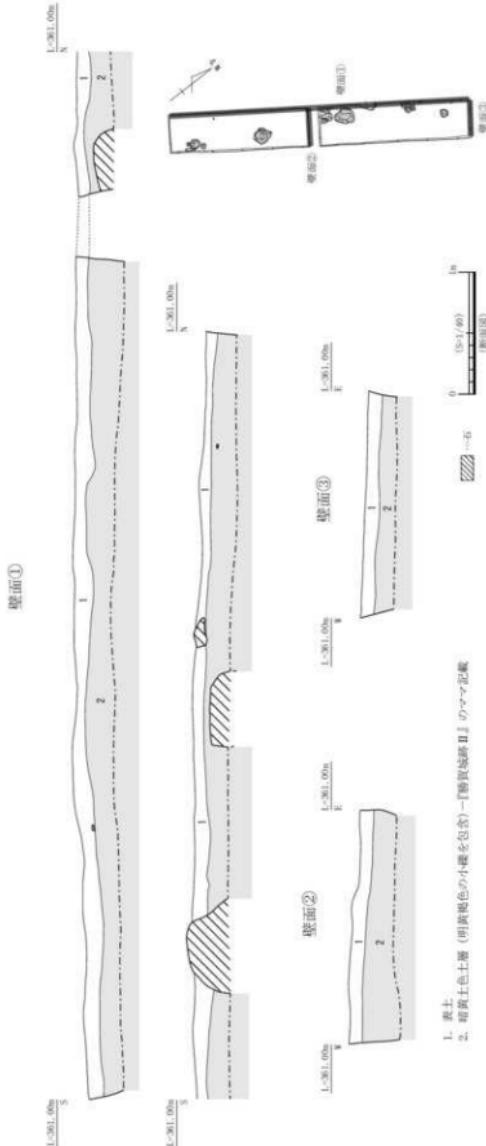
出土遺物は、土師質土器片や瓦質土器片、備前焼片、巻貝である。65～72は土師質土器である。65は横堀内から出土した甕の口縁部である。66～68は曲輪IIIで調査したトレンチから出土したものである。66、67は小皿である。66の底面には回転ヘラ切り痕、67の底面には静止系切り又は静止ヘラ切り痕がみられる。68は8次調査で第1遺構面上面から出土した、鉢の口縁部である。69は2次調査で曲輪IIIの東端にある石積み背面の盛土内から出土した鉢の口縁部である。70は2次調査で曲輪IIIの東端にある石積み背面の盛土内から出土した鉢の口縁部である。71は2次調査で曲輪IIIの東端にある石積み背面の盛土内から出土した鉢の口縁部である。72は2次調査で曲輪IIIの東端にある石積み背面の盛土内から出土した鉢の口縁部である。



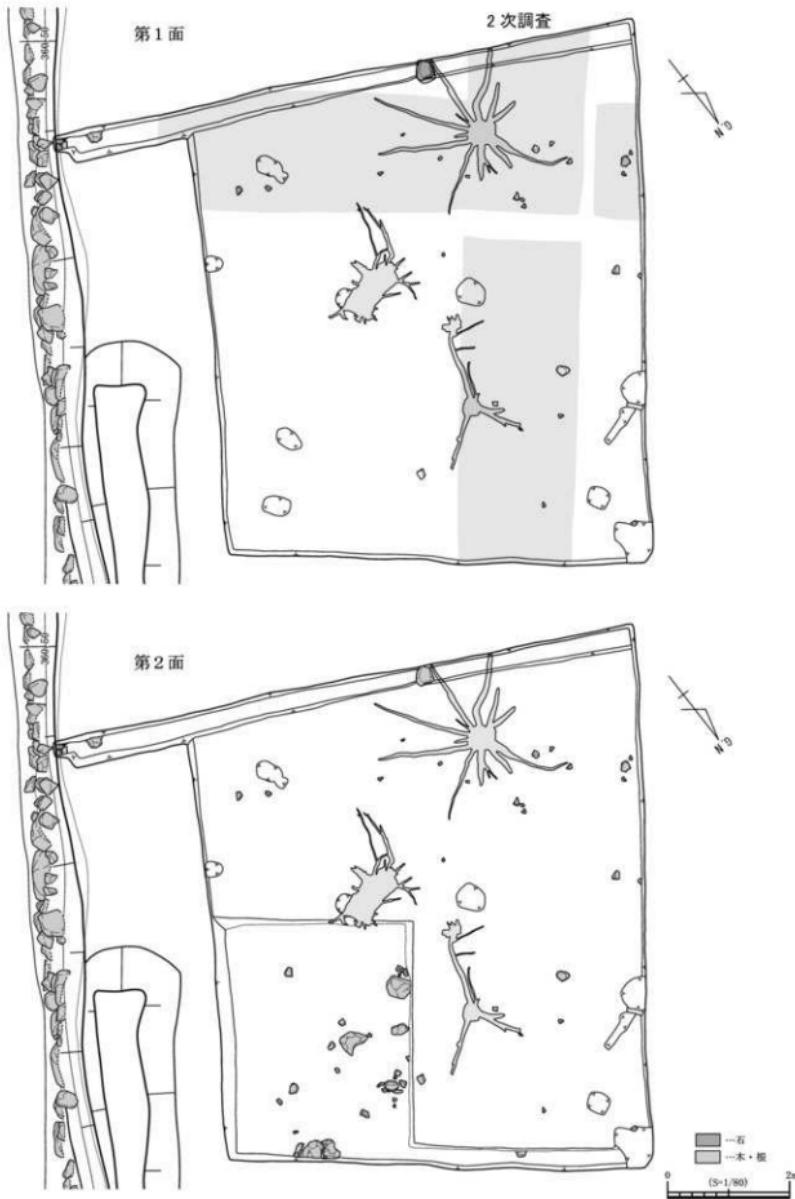
第3-37図 曲輪III・IV出土遺物 (S=1/4)



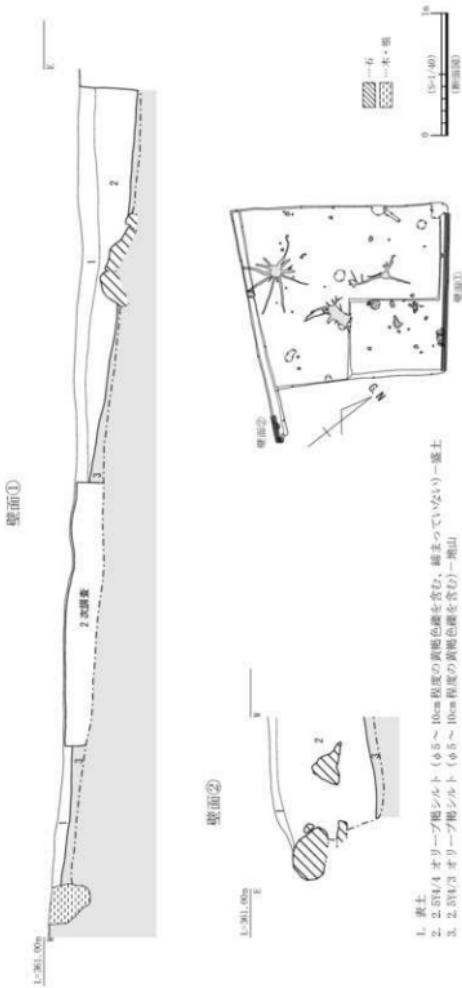
第3-38図 2次調査第III調査区平面図 (S=1/100)



第3-39図 2次調査第III調査区断面図 (S=1/40)



第3-40図 8次調査区平面図 (S=1/80)



第3-41図 8次調査区断面図 (S=1/40)

口縁部である。70、71は曲輪IVで調査したトレンチから出土した鉢である。72は2次調査で出土した出土位置不明の鍋の口縁部である。

第6節 曲輪V・VI・VII

曲輪V・VI・VIIの現況（第3-42図）

曲輪V・VI・VIIは主郭の北に位置する三段の不整形状の曲輪である。曲輪Vと曲輪VIの比高差は東側が最も低く約0.5mで、西側の最も高い箇所は約1.5mである。曲輪Vと曲輪VIの段には露岩を含む安山岩が並べられており、土留めとしての役割を果たしている。安山岩の大きさは様々で、高さ約1mの露岩や高さ約0.4mの安山岩が3段ほど積まれている箇所がみられる。石積みといえるほど丁寧に石を配置しておらず、天端の高さが一定でない。大きな露岩に合わせて盛土を施工した部分の土留めとして配置したと想定される。曲輪VIと曲輪VIIの比高差は西側が最も低く約0.2mで、東側の最も高い箇所は約0.6mである。曲輪VIと曲輪VIIの段には、曲輪Vと曲輪VIの段と比較すると安山岩は配置されておらず、露岩が点々とみられる程度である。

曲輪VIIの北側には、頂部の幅約0.7～1.5m、高さ約0.5mの土壘がある（第3-42, 43図）。折れが4箇所みられ、弓なりになっているのが特徴的である。これは横矢を掛けやすくすることが目的と考えられる。土壘の東西端の折れの頂部には、巨大な露岩があり土留めとしての役割を果たしている。また、土壘中央の折れの頂部から下に向かって堅土壘が造成されており、巨大な安山岩露岩にぶつかり土留めとなっている。土壘の内側には安山岩が並べられており、『勝賀城跡』では腰巻石垣と称される。多くの場合、配置された安山岩は1段だが、2段の箇所もみられる。このように北側には弓なりに折れた土壘と堅土壘が組み合わされており、勝賀城の中でも特に堅固な防御設備を有している。これは主郭を中心とした場合、北側が最も傾斜が緩やかで敵の侵入経路として想定されるからであろう。

曲輪Vは南北約12m、東西約40mの不整長方形状の曲輪である。北側中央に南北約3m、東西約15mの張り出しが認められる。主郭から喰い違い虎口を通って繋がっている曲輪である。曲輪内の高さは362.25～363.25mで、最高所と最低所の高低差は約1mで比較的平坦である。曲輪内の北東部に安山岩の露岩がまとまって分布している。

曲輪VIIは南北約3.0～8.5m、東西約35mの不整長方形状の曲輪である。曲輪内の高さは361.00～361.50mで、最高所と最低所の高低差は約0.5mで平坦である。曲輪内には露岩が点在している。

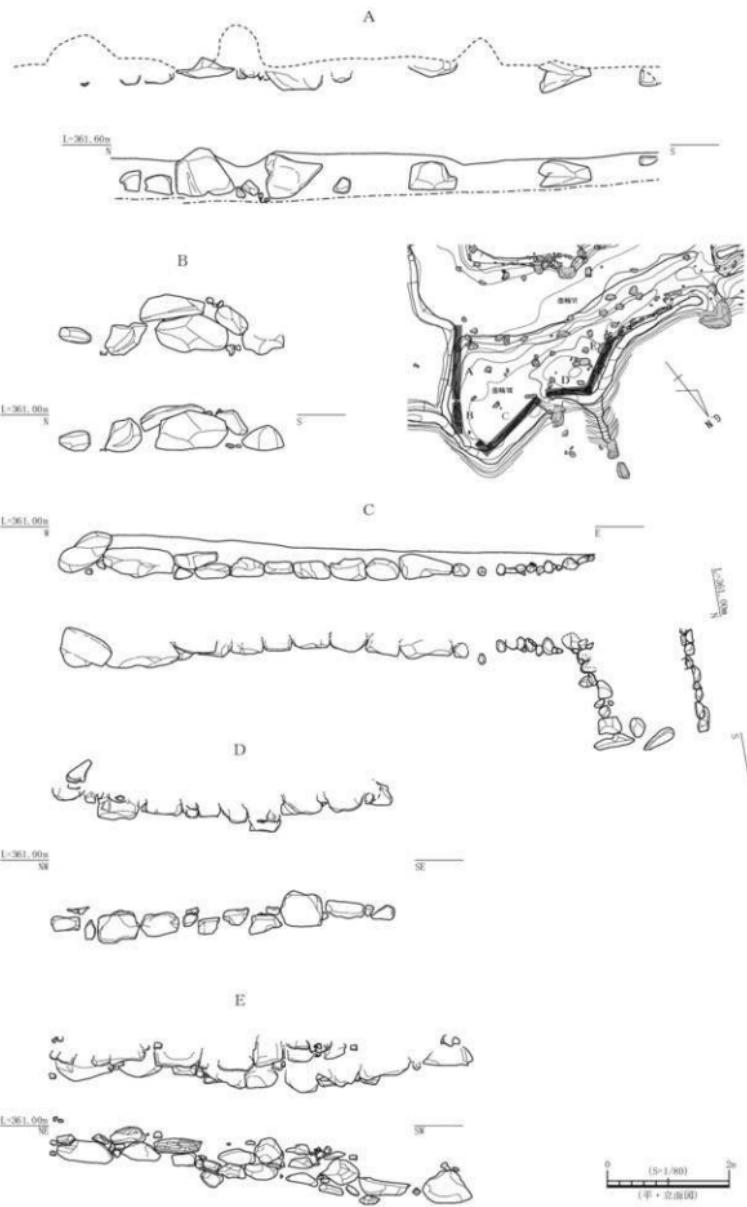
曲輪VIIIは南北約3.5～11.5m、東西約34mの不整長方形状の曲輪である。曲輪内の高さは359.50～360.50mで、最高所と最低所の高低差は約1mで比較的平坦である。曲輪の中央には露岩がまとまって分布している。曲輪VIIIの東側は曲輪IVと土壘で区画されているが、土壘裾部の高さは曲輪IVの方が約0.2～0.4mほど高いことから、曲輪IVと曲輪VIIIは土壘を築く前から平坦面の高さが異なっていたと考えられる。

発掘調査の目的

曲輪Vと曲輪VIの段には石積みの土留めが認められることから、曲輪Vの北側は盛土で造成した可能性が想定された。そのため、曲輪V・VI・VIIの造成方法を明らかにすることを目的として発掘調査を行った。

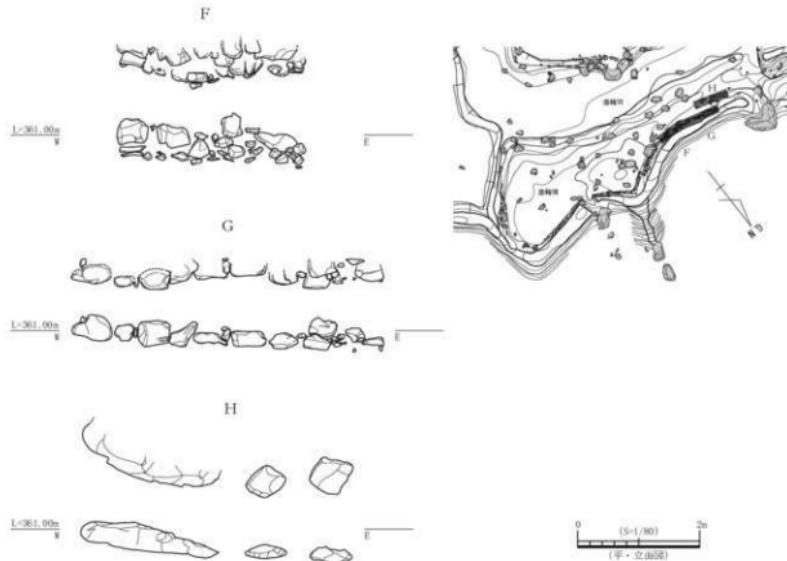


第3-42図 曲輪V・VI・VII測量図 (S=1/250)



第3-43図 曲輪VII土塁平・立面図① (S=1/80)

カラー



第3-44図 曲輪VII土星平・立面図② (S=1/80)

発掘調査の成果（第3-46～48図）

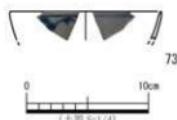
発掘調査では、曲輪V・VI・VIIを南北に断ち割るように、幅約0.5m、長さ約30.6mのトレンチを設定した。断面図をみると、基本的には地山を削平して曲輪を平坦に造成していたことが明らかになった。ただし、曲輪VIと曲輪VIIの段にある安山岩露岩の内側には盛土と考えられる締まりのないびい黄褐色シルト層がみられ、一部は盛土で造成されたことが判明した。遺構は検出されず、遺物は中国産陶磁器片1点が出土した。

また、土星より外側は切岸があり、城内と城外の高低差は3m以上となる。このような高い切岸をどのように造成したかを断面図から考えてみる。城内側の土星裾部では現況から約0.2～0.3m低い位置で地山を検出したことから、切岸全てが土星を築く際の盛土によって施工されたとは考えられない。そのため、地山を削って曲輪の平坦面と切岸を造成した後に曲輪端部に土を盛って土星を築いたと考えられる。

出土遺物（第3-45図）

73は景德鎮系染付碗の口縁部である。曲輪Vの地山上面から出土した。

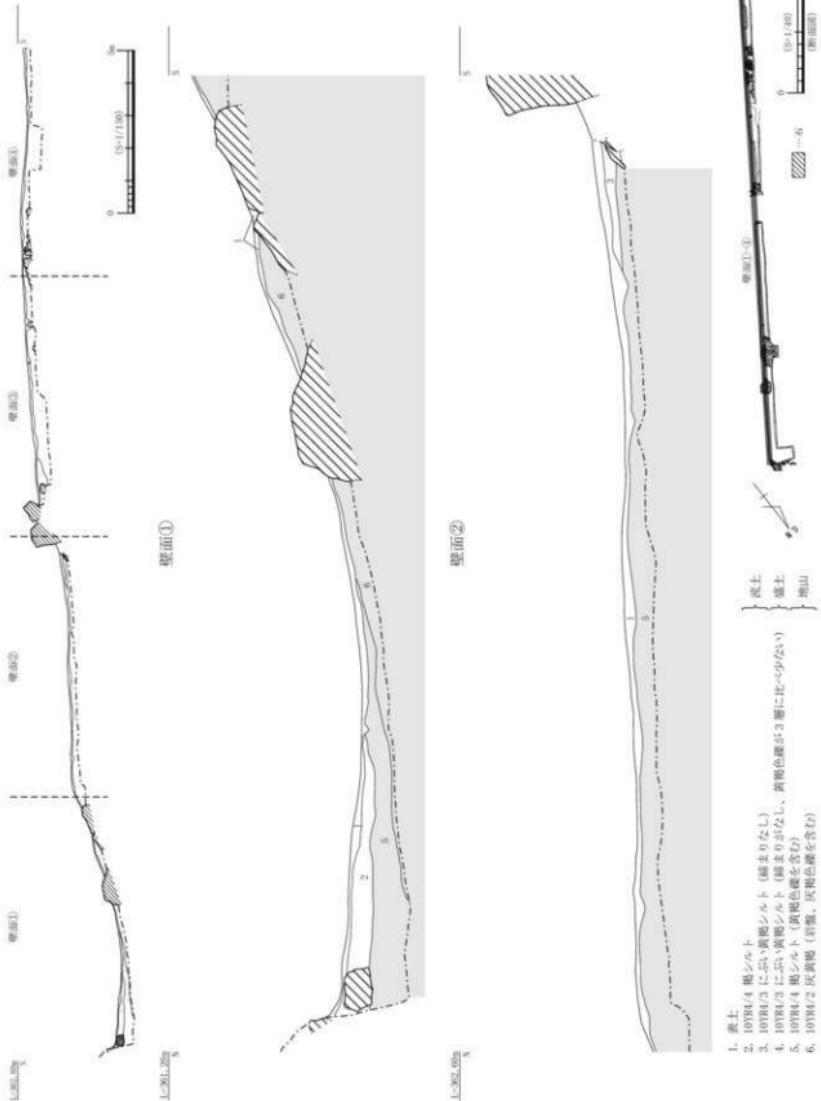
(中国産磁器 碗)



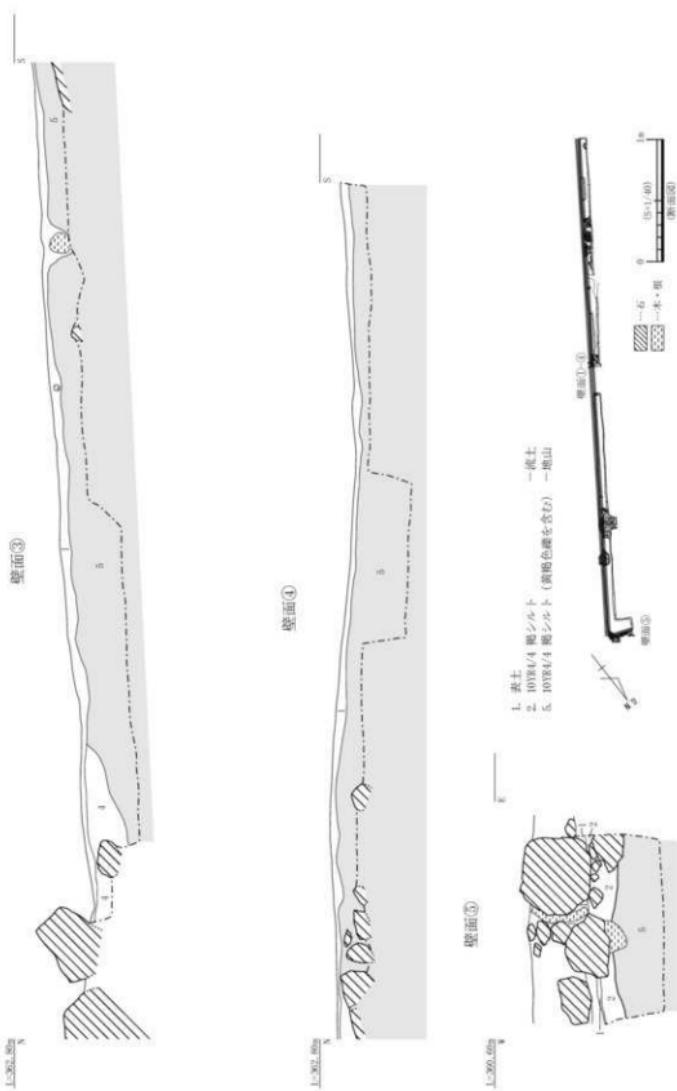
出土遺物 (S=1/4)



第3-46図 曲輪V・VI・VIIトレーンチ配置図 (S=1/150)



第3-47図 曲輪V・VI・VIIトレーンチ断面図① (S=1/150・1/40)



第3-48図 曲輪V・VI・VIIトレンチ断面図② (S=1/40)

第7節 曲輪VIII・IX

曲輪VIII・IXの現況（第3-49図）

曲輪VIII・IXは主郭の南側で、主郭とほぼ同じ高さに位置する。曲輪VIIIは主郭の南東にある曲輪で、曲輪IXは主郭の南西にある曲輪である。曲輪VIIIと曲輪IXは主郭を囲む土塁から派生する頂部幅約0.6m、高さ約0.7mの土塁によって区分されている。

曲輪VIIIは東西約16m、南北約11mの長方形形状の曲輪である。曲輪内の高さは362.00～362.75mで、最高所と最低所の高低差は約0.75mで平坦である。曲輪VIIIの北側は主郭を囲む土塁があり、曲輪VIIIの西から南にかけては主郭を囲む土塁から派生する頂部幅約0.6m、高さ約0.7mの土塁がある。曲輪VIIIの東にも主郭を囲む土塁から派生する頂部幅約0.5m、高さ約0.1mの土塁がある。曲輪VIIIは四周を土塁に囲まれており、南東隅のみ開口し曲輪への入口となっている。曲輪VIIIは北半分のみ平坦に整形されており、約0.2mの段がある。段から南側は南が低くなるように緩やかに傾斜している。

曲輪IXは東西約16m、南北約15mの平行四辺形状の曲輪である。曲輪内の高さは361.00～362.75mで、最高所と最低所の高低差は約1.75mでやや傾斜している。曲輪IXの北側は主郭を囲む土塁があり、その南に幅約2m、深さ約0.2～0.3mの堀が東西に延びている。曲輪IXの東側は曲輪VIIIと区分する土塁があり、南と西は切岸がある。曲輪内は上下2段の平坦面に分かれている。上の平坦面は北半分を中心に東西約16m、南北約6.5mでL字形を呈しており、下の平坦面は南半分で東西約11.5m、南北約6.3mの長方形である。段の高さは約0.5mである。上下どちらの平坦面も西が低くなるように傾斜している。

発掘調査の目的

曲輪VIII・IXは主郭に隣接しており、改修者の可能性がある仙石氏の居城である小諸城との縋張りの類似性やその立地から、他の方形曲輪とは異なる性質をもつ可能性が調査会議で指摘された。他の曲輪の発掘調査成果と比較し、曲輪の性質を検証するため、発掘調査を実施した。

発掘調査の成果（第3-50, 51図）

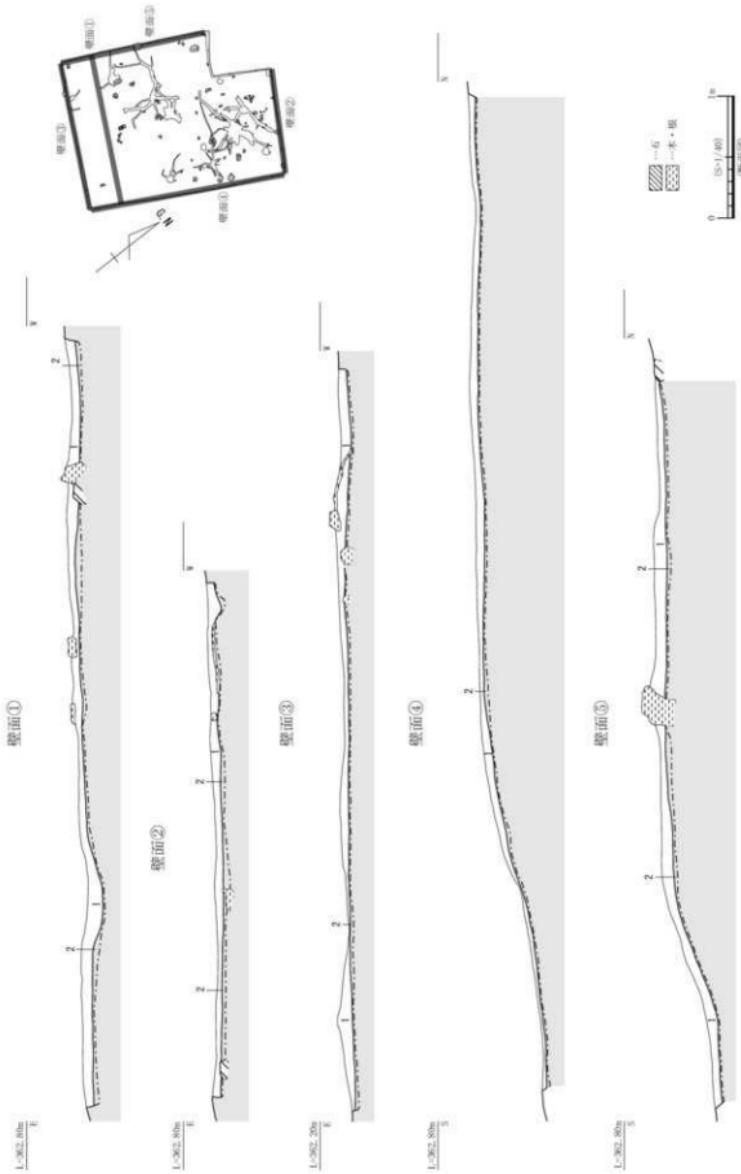
曲輪VIII内に東西約6.4m、南北約8.4mのトレンチを設定し発掘調査を実施した。土層断面図を見ると、表土直下に地山である黄褐色風化礫を含むにぶい黄褐色シルトがみられ、地山上面が遺構面である。地山は北半分が平坦になっており、南半分は現況と同様に傾斜していることが明らかになった。遺構は検出されなかった。また、遺物は1点も出土しなかった。



第3-49図 曲輪VII・IX測量図 (S=1/250)



第3-50図 曲輪VIIIトレンチ配置図 (S=1/80)



第3-51図 曲輪VIIIトレシ断面図 (S=1/40)

1. 粘土
2. 10cm×4に亘る黄褐色シルト (φ3~10mmの黄褐色色を含む) — 植生

第3-1表 土器観察表(1)

掲号	報告書号	遺構名/層位	種類	器種	部位	法量(cm)			調整		色調	胎土	焼成	備考	
						口径	底径	高さ	外面	内面					
3-8	1	主葬1次Cトレンチ2層	土師質土器	小瓶	口縁部	[10.4]	[6.4]	1.7	摩滅	摩滅	[外]10YR7/4に55°黄褐 [内]10YR7/4に55°黄褐	青	2mm以下の石 英・長石を含む	良	
3-8	2	主葬1次Cトレンチ2層	土師質土器	小瓶	口縁部	—	—	[1.7]	摩滅	摩滅	[外]10YR8/4浅黒褐 [内]10YR8/4浅黒褐	青	2mm以下の石 英・長石・赤色を含む	良	横合窓有
3-8	3	土葬許存不明	土師質土器	小瓶	底部	—	5.6	[1.0]	ナチュラル 切り	ナチュラル 底部	[外]10YR7/3浅黄 [内]10YR7/3浅黄	青	砂粒をほぐし て食まない	良	「精質城跡」 19
3-8	4	主葬1次Cトレンチ2層	土師質土器	小瓶	底部	—	[5.0]	[1.6]	ナチュラル 切り	ナチュラル 底部	[外]10YR8/4赤黄 [内]10YR8/4赤黄	青	1mm以下との石 英・長石を少 量含む	良	
3-8	5	主葬1次Eトレンチ2層	土師質土器	小瓶	底部	—	[5.4]	[0.9]	摩滅・回転ヘ リ	摩滅	[外]10YR7/2暗灰黄 [内]10YR7/2暗灰黄	青	1mm以下の長 石を含む	良	
3-8	6	主葬1次Dトレンチ2層	土師質土器	杯	底部	—	4.1	[1.2]	ナチュラル 切り	ナチュラル 底部	[外]10YR7/3浅黄 [内]10YR7/3浅黄	青	1mm以下の石 英・長石を少 量含む	良	外面黒膜有
3-8	7	主葬6C2層上面	土師質土器	把手付鍋	口縁部	—	—	[3.7]	ナチュラル 把手	ナチュラル 把手	[外]10YR7/4に55°黄褐 [内]10YR7/4に55°黄褐	青	5mm以下の石 英・長石・赤 色を含む	良	
3-8	8	主葬1次Cトレンチ2層	土師質土器	把手付鍋	口縁部	—	—	[4.8]	ナチュラル 把手	ナチュラル 把手	[外]10YR6/4赤褐 [内]10YR6/4赤褐	青	5mm以下の石 英・長石・赤 色を含む	良	
3-8	9	主葬1次Cトレンチ2層	土師質土器	鍋	口縁部	—	—	[3.9]	横ナデ・摩滅	横ナデ・摩滅	[外]10YR7/4浅灰褐 [内]10YR7/4浅灰褐	青	3mm以下の石 英・長石・赤 色を含む	良	
3-8	10	主葬1次Cトレンチ2層	土師質土器	鍋	口縁部	—	—	[3.7]	横ナデ・指押 丸・摩滅	横ナデ・摩滅	[外]10YR7/4浅灰褐 [内]10YR7/4浅灰褐	青	3mm以下の石 英・長石・赤 色を含む	良	
3-8	11	主葬1次Cトレンチ2層	土師質土器	鍋	口縁部	—	—	[2.8]	横ナデ・指押 丸・摩滅	横ナデ・指押 丸・摩滅	[外]10YR8/3浅黒褐 [内]10YR8/4浅黒褐	青	3mm以下の石 英・長石・赤 色を含む	良	
3-8	12	主葬表様	土師質土器	鉢	口縁部	(25.2)	—	[3.2]	ナチュラル 把手	ナチュラル 把手	[外]10YR7/2に55°黄褐 [内]10YR7/2浅黒褐	青	3mm以下の石 英・長石・赤 色を含む	良	
3-8	13	主葬表様	土師質土器	鉢	口縁部	—	—	[3.8]	ナチュラル	ナチュラル	[外]10YR6/3に55°黄褐 [内]10YR6/4に55°黄褐	青	3mm以下の石 英・長石を含む	良	
3-8	14	主葬表様	土師質土器	鉢	口縁部	—	—	[3.5]	ナチュラル	ナチュラル	[外]10YR7/3に55°黄褐 [内]10YR7/3に55°黄褐	青	3mm以下の石 英・長石・赤 色を含む	良	
3-8	15	主葬表様	土師質土器	鉢	口縁部	—	—	[2.3]	ナチュラル	ナチュラル	[外]10YR7/4に55°黄褐 [内]10YR7/3に55°黄褐	青	2mm以下の石 英・長石を含む	良	
3-8	16	主葬表様	土師質土器	鉢	口縁部	—	—	[2.4]	ナチュラル	ナチュラル	[外]10YR7/4に55°相 [内]10YR7/4に55°相	青	2mm以下の石 英・長石・赤 色を含む	良	
3-8	17	主葬1次Cトレンチ2層	土師質土器	鉢	口縁部	—	—	[1.9]	ナチュラル	ナチュラル	[外]10YR7/3浅灰褐 [内]10YR7/3浅灰褐	青	4mm以下の石 英を含む	良	
3-8	18	主葬1次Cトレンチ2層	土師質土器	鉢	口縁部	—	—	[3.6]	ナチュラル・摩滅	ナチュラル	[外]10YR7/6相 [内]10YR7/6相	青	3mm以下の石 英・長石・赤 色を多量に 含む	良	
3-8	19	主葬表様	土師質土器	模様鉢	底部	—	(6.8)	[2.0]	ナチュラル	ナチュラル	[外]10YR6/3に55°黄褐 [内]10YR6/3に55°黄褐	青	1mm以下の石 英を含む	良	「精質城跡」8
3-8	20	主葬1次Cトレンチ2層	土師質土器	模様鉢	脚部	—	—	[4.2]	摩滅	脚部(4本1組) [外]10YR8/4浅黒褐 [内]10YR8/4浅黒褐	青	2mm以下の石 英・長石を含む	良	「精質城跡」9	
3-8	21	主葬1次6トレンチ1層	土師質土器	火鉢	脚部	—	—	[4.3]	ナチュラル・摩滅	ナチュラル	[外]10YR6/4に55°相 [内]10YR7/4に55°相	青	3mm以下の石 英・長石・赤 色を含む	良	
3-8	22	主葬1次6トレンチ2層	土師質土器	火鉢	脚部	—	—	[2.5]	ナチュラル	摩滅	[外]10YR6/4に55°相 [内]10YR7/4に55°相	青	1.5mm以下の 石英・長石を含む	良	13世紀
3-8	23	主葬1次Cトレンチ2層	陶器	壺	口縁部	(14.6)	—	[8.3]	柄端直線文5 ~6条・自然 輪	柄端直線文5 ~6条・自然 輪	[外]10YR7/2深灰褐 [内]10YR7/2深灰 [脚]10YR5/1褐色	青	良好	「精質城跡」1	
3-8	24	主葬1次Bトレンチ2層	陶器	壺	頭部	—	—	[4.7]	自然輪	回転ナデ	[外]10YR7/2深灰褐 [内]10YR7/2深灰 [脚]10YR5/1褐色	青	良好	「精質城跡」2	
3-8	25	主葬1次Bトレンチ2層	陶器	壺	頭部	—	—	[4.9]	自然輪	回転ナデ	[外]10YR7/2深灰褐 [内]10YR7/2深灰 [脚]10YR5/1褐色	青	良好	「精質城跡」2	
3-8	26	主葬1次Bトレンチ2層	陶器	壺	頭部	—	—	[3.8]	柄端直線文4 ~6条・鶴摺波段 文条	回転ナデ	[外]10YR7/1褐色 [内]10YR7/1褐色 [脚]10YR5/1褐色	青	良好	「精質城跡」5	
3-8	27	主葬1次Bトレンチ2層	陶器	壺	頭部	—	—	[4.3]	柄端直線文3 条	回転ナデ	[外]10YR7/1褐色 [内]10YR7/1褐色 [脚]10YR5/1褐色	青	良好	「精質城跡」6	

第3-2表 土器観察表(2)

標図 番号	報告書 番号	遺構名 /層位	種類	器種	部位	法量(cm)			調整		色調	胎土	焼成	備考
						口径	底径	器高	外面	内面				
3-8	28	主部(次2トレンチ)1層	陶器	入壺	口縁部	—	—	[5.7]	凹輪ナデ	凹輪ナデ	[外]内外面[503/2]黒褐色 [内]2,513/2黒褐色	青	良好	縫合無 外面:自然釉付 内面:有
3-8	29	上部(次6トレンチ)1層	陶器	入壺	底部	—	—	[5.3]	ナデ	凹輪ナデ	[外]内面[103/6/2]灰黄褐 [内]103/6/2にぶい黄褐	青	良好	縫合無
3-8	30	主部(次3トレンチ)	陶器	様林	口縁部	(30.5)	—	[4.5]	凹輪ナデ・沈 縫2条	凹輪ナデ	[外]内面[503/3]灰い赤 [内]503/2,517/2灰黄 [胎土]2,516/6/2灰黄	青	良好	縫合無 外面:自然釉付 者 「勝利城跡」4
3-8	31	主部表探	陶器	様林	胴部	—	—	[5.0]	凹輪ナデ	凹輪ナデ・凹 縫2条	[外]内面[103/6/2]明赤褐色 [内]103/6/2灰褐色	青	良好	縫合無 「勝利城跡」3
3-8	32	王郭4次2層上 面	陶器	盤	口縁部	—	—	[3.5]	凹輪ナデ	凹輪ナデ	[外]内面[2,513/2]灰褐色 [内]2,513/2灰褐色	青	良好	縫合無
3-9	33	主部(次Eトレンチ、4次1層)	青磁	碗	口縁部	(13.6)	—	[4.3]	輪釉・蓮弁文	輪釉	[外]輪[56/1]オリーブ灰 [内]56/1灰白	精良		中国產
3-9	34	主部4次1層	磁器	碗	口縁部	(13.0)	—	[2.9]	輪釉・菱付・ 縫2条	輪釉・縫2 条	[外]輪[53/1]青白 [内]53/1青褐色・淡青色	精良		中国產
3-9	35	主部4次1層	磁器	碗or皿	口縁部	—	—	[1.5]	輪釉・菱付	輪釉	[外]輪[51/2]透明 [内]51/2灰白 [胎土]2,518/1灰褐色	精良		中国產
3-9	36	主部4次1層	磁器	碗or皿	口縁部	—	—	[2.7]	輪釉	輪釉	[外]輪[51/2]透明 [内]51/2灰白 [胎土]2,518/1灰褐色	精良		中国產
3-9	37	主部4次1層	磁器	碗or皿	口縁部	—	—	[2.8]	輪釉	輪釉	[外]輪[51/2]透明 [内]51/2灰白	精良		中国產
3-9	38	主部4次1層	磁器	碗or皿	口縁部	—	—	[2.9]	輪釉	輪釉	[外]輪[51/2]透明 [内]51/2灰白	精良		中国產
3-14	54	墳丘3-鹿口2 トレンチ8層	陶器	碗	底部	—	4.2	[2.0]	凹輪ナデ・附 り	凹輪ナデ	[外]2,517/2灰褐色 [内]2,517/2灰白	精良		縫合・美濃系 陶器
3-14	55	墳丘3-鹿口2 トレンチ8層	磁器	碗or皿	口縁部	—	—	[2.3]	輪釉・菱付・ 縫2条	輪釉・縫2 条	[外]輪[51/2]透明 [内]51/2灰白 [胎土]2,518/1灰白 [外]輪[51/2]青白・青色	精良		中国產
3-18	56	平底3トレンチ13~15層	土師質 土器	盤	口縁部	—	—	[3.2]	摩滅	ハケ目	[外]2,519B/4/254/9褐色 [内]2,519B/4/254/9褐色	2,5mm以下の 石英・長石・ 角閃石・赤色 鉱を含む	良	
3-18	57	平底口北側土 質底部表探	土師質 土器	土釜	脚部	—	—	[2.2]	摩滅	摩滅	[外]103/6/3/2にぶい黄 [内]103/6/3/2にぶい黄	3mm以下の石 英・長石・赤 色鉱を含む	良	縫合無有
3-27	60	曲輪I1層	土師質 土器	盤	口縁部	—	—	[1.1]	ナデ	ナデ	[外]2,5YR7/4にぶい緑 [内]2,5YR7/4にぶい黄	青	良	
3-27	61	曲輪I1層	磁器	碗or皿	底部	—	—	[0.2]	輪釉	輪釉	[外]輪[NA/NA]灰白 [内]輪[NA/NA]灰白	2mm以下の石 英・長石・赤 色鉱を含む	精良	中国產
3-27	62	曲輪I1東側土 質底部表探	陶器	様林	底部	—	—	[0.1]	凹輪ナデ・ハ リ削り・工具 目(14束10) 縫2条	凹輪ナデ・ハ リ削り・工具 目(14束10) 縫2条	[外]2,5YR6/4にぶい緑 [内]2,5YR6/4にぶい黄	青	良好	縫合無
3-37	65	曲輪II構築区	土師質 土器	盤	口縁部	(35.5)	—	[5.1]	ナデ	ナデ・指押さ え	[外]輪[10YR7/6]明黃 [内]輪[10YR7/6]明黃	3mm以下の石 英・長石・赤 色鉱を含む	良	「勝利城 跡」4
3-37	66	曲輪II次2-2 トレンチ	土師質 土器	小皿	口縁部 ~底部	(9.1)	—	[6.2]	凹輪ナデ・回 転ナドリ	凹輪ナデ	[外]2,5YR7/4にぶい黄 [内]2,5YR7/4にぶい黄	青	3mm以下の石 英・長石・赤 色鉱を含む	「勝利城 跡」3
3-37	67	曲輪II次2-2 トレンチ	土師質 土器	小皿	底部	—	(4.1)	[0.6]	昇止赤吊りor 昇止へら吊り ・摩擦	摩擦	[外]2,5YR7/6灰 [内]2,5YR7/6灰	3mm以下の石 英・長石・赤 色鉱を含む	良	
3-37	68	曲輪II次2層上 面	土師質 土器	盤	口縁部	—	—	[4.2]	ナデ	ナデ	[外]103/6/4/2にぶい黄 [内]103/6/4/2にぶい黄	青	良	
3-37	69	曲輪II次2層頂 み背面	土師質 土器	盤	口縁部	—	—	[3.5]	ナデ・指押さ え	ナデ・指押さ え	[外]2,5YR6/3/3灰 [内]2,5YR6/3/3灰	3mm以下の石 英・長石・赤 色鉱を含む	良	
3-37	70	曲輪II次2層-1 トレンチ	土師質 土器	盤	口縁部	—	—	[3.9]	ナデ	ナデ・指押さ え	[外]103/7/4にぶい黄 [内]103/7/4にぶい黄	青	3mm以下の石 英・長石・赤 色鉱を含む	「勝利城 跡」1
3-37	71	曲輪II次2層-1 トレンチ	土師質 土器	盤	底部	—	—	[2.0]	摩滅	摩滅	[外]103/7/4にぶい黄 [内]103/7/4にぶい黄	青	3mm以下の石 英・長石・赤 色鉱を含む	「勝利城 跡」1
3-37	72	曲輪II次2層上 面	土師質 土器	盤	口縁部	—	—	[3.6]	摩滅	摩滅	[外]2,5YR7/4にぶい黄 [内]2,5YR7/4にぶい黄	青	3mm以下の石 英・長石・赤 色鉱を含む	「勝利城 跡」2
3-45	73	曲輪V5層上面	磁器	碗	口縁部	(12.4)	—	[2.5]	輪釉・菱付・ 縫2条	輪釉・縫2 条	[外]輪[56/1]透明 [内]56/1灰白 [胎土]2,518/1灰白 [外]輪[56/1]青白・淡青色	精良		中国產

第3-3表 石器観察表

擇因 番号	報告書 番号	遺構名/層位	種類	機種	石材	法量(cm)				備考
						最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	
3-9	39	主郭表採	石器	磁石	頁岩	[3.1]	[3.3]	0.5	8.6	
3-18	58	平虎口3トレンチ 13~15層	石器	スクレイパー	サスカイト	3.7	5.7	1.0	14.8	
3-27	63	曲輪11層	石器	磁石	頁岩	16.6	4.6	0.8	93.7	

第3-4表 鉄製品観察表

擇因 番号	報告書 番号	遺構名/層位	種類	機種	法量(cm/g)				備考
					長さ	幅	厚さ	重量	
3-9	40	主郭4次1トレンチ1層	鉄製品	小柄	(8.9)	1.1	0.4	7.8	
3-9	41	主郭1次EorFトレンチ	鉄製品	釘	7.9	0.6	0.5	6.5	『勝負城跡』12
3-9	42	主郭1次EorFトレンチ	鉄製品	釘	(5.5)	0.5	0.8	5.7	『勝負城跡』13
3-9	43	主郭4次1トレンチ1層	鉄製品	釘	(6.6)	0.6	0.5	5.6	
3-9	44	主郭4次1トレンチ1層	鉄製品	釘	(3.6)	0.5	0.5	1.9	
3-9	45	主郭4次1トレンチ1層	鉄製品	飾り金具	3.8	2.9	0.1	4.3	
3-9	46	主郭1次6トレンチ	鉄製品	留釘	2.9	0.8	0.5	1.3	『勝負城跡』14
3-9	47	主郭5次モトレンチ	鉄製品	占鉗	2.4	2.4	0.1	3.3	『勝負城跡』15
3-9	48	主郭表採	鉄製品	古鉗	2.4	2.4	0.1	2.4	
3-9	49	主郭4次1トレンチ1層	鉄製品	古鉗	2.4	2.4	0.2	2.9	
3-9	50	主郭1次6トレンチ	鉄製品	古鉗	(1.8)	(1.8)	0.1	1.0	『勝負城跡』16
3-9	51	主郭4次1トレンチ1層	鉄製品	古鉗	2.5	2.5	0.1	2.9	
3-9	52	主郭1次モトレンチ	鉄製品	古鉗	2.4	2.4	0.1	2.8	『勝負城跡』17
3-9	53	主郭表採	鉄製品	古鉗	2.2	2.2	0.1	2.4	
3-18	59	東虎口2トレンチ6~10層	鉄製品	釘	6.8	0.6	0.6	5.3	
3-27	64	曲輪1土塁断ち割り2層	鉄製品	釘	(3.5)	0.5	0.5	2.0	

写 真 図 版

写真図版

1

1・2次調査



1次調査トレンチ設定



1次調査 2tr 完掘状況



1次調査 4tr 完掘状況



1次調査 C + Dtr 完掘状況



1次調査 6tr 完掘状況



2次調査 I -1・2tr 完掘状況（西から）



2次調査 I -3・4tr 完掘状況（西から）

写真図版
3
1・2次調査



2次調査I-3・4tr 完掘状況（南から）



2次調査I-3tr 完掘状況



2次調査I-4tr 完掘状況

写真図版 4
1・2次調査



写真図版
5
1・2次調査



調査風景①



調査風景②



調査風景③



調査風景④

写真図版 6
4次調査（主郭）



4次調査断ち割り壁面



完掘状況（南から）



4次調査完掘状況（東から）



SK01 半掘状況



SK02 半掘状況



喰い違い虎口



喰い違い虎口完掘状況①



喰い違い虎口完掘状況②

5・6次調査（喰い違い虎口）



喰い違い虎口完掘状況（2,3tr）



喰い違い虎口完掘状況（2tr）



土壠頂部（4,5tr）完掘状況

写真図版
9
5・6次調査（喰い違ひ虎口）



南側土壘頂部(4tr) 完掘状況



北側土壘頂部(5tr) 完掘状況



北側土壘頂部(5tr) 断面

写真図版
10
5・6次調査（喰い違い虎口）



土壠断ち割り（3tr）断面①（北）



土壠断ち割り（3tr）断面②（中）



土壠断ち割り（3tr）断面③（南）

6次調査
(平虎口)



平虎口（主郭から）



平虎口（主郭外から）



平虎口完掘状況①



平虎口完掘状況②



平虎口完掘状況③



平虎口完掘状況④

写真図版
13
6次調査（平虎口）



7次調査（曲輪I）



曲輪I（西から）



曲輪I 完掘状況①



曲輪I 完掘状況②



曲輪I 完掘状況③



曲輪I 完掘状況④



曲輪I 完掘状況⑤



土壘断ち割り完掘状況①



土壘断ち割り土層断面①



土壘断ち割り土層断面②



曲輪Ⅲ完掘状況



石積み裏部分断ち割り①



石積み裏部分断ち割り②



石積み裏部分断面



第2遺構面完掘状況



第2遺構面断面



曲輪VI完掘状況（南から）



曲輪V完掘状況



曲輪VII完掘状況



曲輪VI完掘状況（北から）



曲輪V盛土部分



曲輪V盛土部分の断面



曲輪VII南壁完掘状況①



曲輪VII南壁完掘状況②



曲輪VII南壁東側断面



曲輪Ⅷ北側完掘状況



曲輪Ⅷ南側完掘状況



曲輪Ⅷ西側完掘状況



豎土壘（北側）



主郭



北東部からみた南西部



主郭土壘の折



曲輪 I (東から)



曲輪 II (西から)



曲輪 III 石積み



曲輪V～VII（東から）



曲輪V～VII（西から）



曲輪VIIの外周土塁

主郭東側の帶曲輪・北東部



主郭東側の帶曲輪



主郭東側の帶曲輪と露岩



北東部

写真図版
26

曲輪 26 の石列



曲輪 26 の石列①



曲輪 26 の石列②



曲輪 26 の石列③

勝賀城跡からみた高松湾・高松平野・瀬戸内海



勝賀城跡からみた高松湾



勝賀城跡からみた高松平野



勝賀城跡から瀬戸内海を臨む

現地見学会風景・調査風景



現地見学会風景



草刈り風景



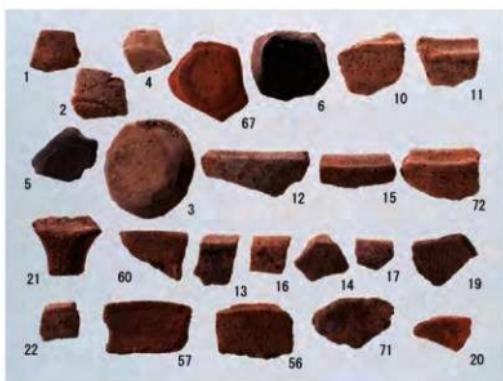
調査員集合写真



土師質土器①



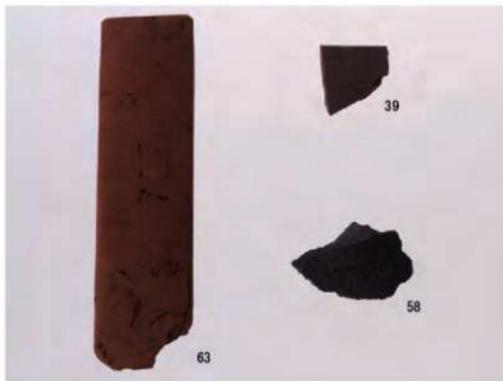
備前焼



土師質土器②



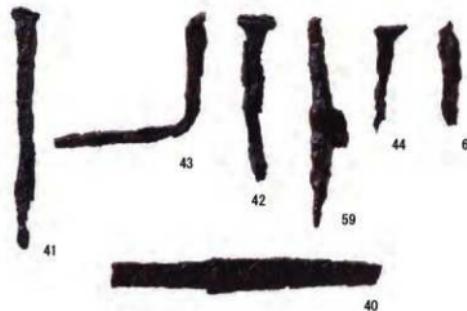
陶磁器



石器



銅製品



鉄製品



養福寺所蔵 泥塔（考察編第2-13図）

報告書抄録

ふりがな	かつがじょうせき3						
書名	勝賀城跡III						
副書名	総括報告書						
卷次							
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	第239集						
編著者名	梶原慎司(編)、田中健二、中井均、乗岡実、橋詰茂、松田朝由						
編集機関	高松市教育委員会						
所在地	〒760-8571 香川県高松市番町一丁目8番15号 TEL087-839-2660						
発行年月日	西暦2022年11月30日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °・'・"	東経 °・'・"	調査期間	発掘原因
		市町村	遺跡番号				
かつがじょうせき 勝賀城跡	かがわけん 香川県 たかまつし 高松市 きなしちょう 鬼無町 ほか	37201	10042	34° 20' 26"	133° 58' 50"	平成28年度 ～ 令和2年度	重要遺跡 確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
勝賀城跡	城館	中世後半	土壘・曲輪等	土師質土器 陶磁器類 鉄製品等			
要約	勝賀城跡は、高松平野西部の勝賀山山頂に所在する山城跡である。室町時代に管領細川京兆家の内衆として在京し、活躍した香西氏の城跡である。平成28年度から令和2年度にかけて行った確認調査では、勝賀城南西部を中心として発掘調査・測量調査を行い、南西部は天正13年の秀吉による四国攻めの際に秀吉勢が改修した陣城であることが明らかになった。主郭を含めた複数の曲輪の発掘調査を行い、遺構が希薄であること、遺物量が香川県内の他の国人衆の城跡に比べ著しく少ないと明瞭化された。このことは、臨時の陣城の特色を示す好例として挙げられる。						

勝賀城跡III

— 総括報告書（調査編） —

令和4年11月30日

編集 高松市教育委員会
高松市番町一丁目8番15号
発行 高松市教育委員会
印刷 (株) 中央ファイリング